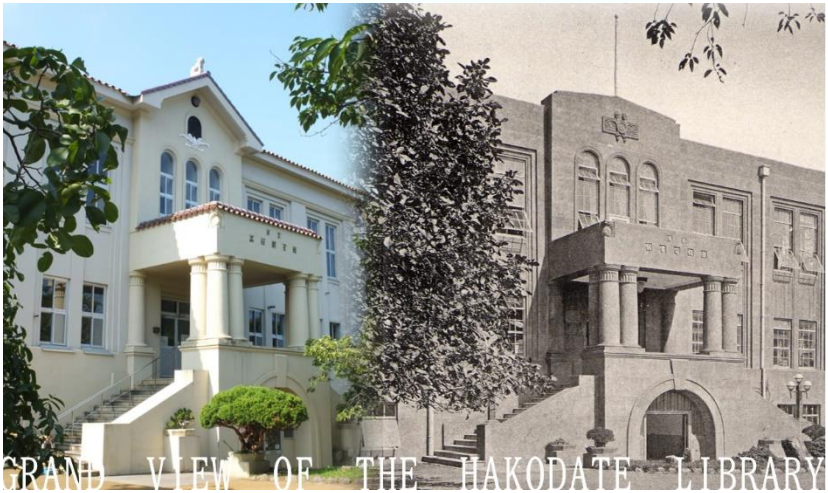
市民文芸

令和6年度
函館市民文芸
入選作品集 第64集

函館市中央図書館
指定管理者 図書館流通センター・
マルエイヘルシーサービス共同事業体



随筆
小説
文芸評論
ノンフィクション
詩
短歌
俳句
川柳

市民文芸

「市民文芸」は、昭和 36 年から続く函館の文学にとって大切な事業です。

函館市民のみなさんが創作作品を発表しあい各作品の質的向上を図るとともに、入賞作品を作品集やホームページで公開することにより、函館の地域文化の向上と意欲の高揚を図るものです。

今年も素敵な作品が集まりました。
どうぞお楽しみください。

函館市民文芸　第64集

目　次

◇随筆（杉浦　清志　選）
【入選】
川のほとり・・・・・・・・・・・川　村　魚　実　1
【佳作】
一年越し・・・・・・・・・・・山　野　みちこ　3
【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

◇小説（和田　裕　選）
【入選】
寒川②・・・・・・・・・・・・・山　本　　大　7
【佳作】
逃げる・・・・・・・・・・・・・畠　田　　農　23

◇文芸評論（和田　裕　選）
【入選】
なし
【佳作】
啄木の娘・石川京子の診断書
・・・水　関　　清　36
【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

◇ノンフィクション（木村　裕俊　選）
【入選】
『話すように読む』……………佐　藤　健　52
ワシを見る………………竹　中　亜　弥　65
【佳作】
テリー・ファンクの追悼とプロレスの現在
……髙　橋　剛　治　72
見る旅・乗る旅・偲ぶ旅、江差線
……水　関　清　84
【選評】……………………………………92
◇詩（鷲谷　みどり　選）
【入選】
波動と鼓動…………………水　関　清　96
【佳作】
呪詛……………………工　藤　貴　子　102
受験……………………根　本　直　樹　106
【選評】……………………………………109
◇短歌（嵯峨　牧子　選）
【入選】竹田光彦・菊地利春・水関清………………111
【佳作】岩見義隆・齊藤満・菅原節子・中崎裕美・
大山利子………………………………111
【選評】……………………………………112
【選者詠】……………………………………114
◇俳句（熊澤　三太郎　選）
【入選】石嵜章枝・竹田光彦・菊地穂草………………115
【佳作】川村尚子・住吉紀美子・斉藤ふじお・
太田満喜子・清水法雄……………………115
【選評】……………………………………116
【選者吟】……………………………………118

◇川柳（白井　靖孝　選）
【入選】本間総子・鍋倉英諒・山崎園子……………… 119
【佳作】大山徒史子・犬石恭子・大山康太・
　山根裕二・山根敬子…………………… 119
【選評】…………………………… 120
【選者吟】………………………… 122
◇審査員紹介・あとがき………………… 123

随筆　入選

川のほとり

川村　魚実

函館に来てもうすぐ一年になる。

物見遊山な気分はだいぶ薄れ、晴れ渡った空の色にも、函館山や五稜郭タワーが遠くに望める景色にも大分慣れた。自動車を持っていないので移動の不便はあるものの、ここ独自の人のありように救われながら過ごしている。

川の音に気付いたのは少し前のことだ。川が今の家の近くにあるのは知っていたし、橋も歩いたことがある。川を覆うようにして木々の葉が茂っているのを見て、あまり水面が見えないな、とその場を通り過ぎるような感想しか持っていなかった。しかし夏の盛りに大雨が降り、警報が出てハザードマップを確認したり、子どもと夫の無事を確認した日の夜、布団にもぐって目を閉じると、その音はうなる声のように主張した。

――ごうごうごう。

私はその音をよく知っていた。ときおり夢に出てくる川の音だ。その音を発しているのは、通った小学校の近くにある常呂川だった。写生会に行ったのも、クラブ活動で魚釣りに行ったのも校舎から近い常呂川で、何より学校に通うにはその川にかかる大きな橋を歩かねばならず、橋の上から堰（正しい名称は知らないが、調べたら頭首工という名前があるらしい）が目に入るのだった。夢に現れる常呂川はたいてい激しい音を立てていて、小さな私は恐る恐る橋を渡るのだった。

もう一つ思い出す川がある。二十代半ばに借りたマンションの近くにあった豊平川だ。

マンションはすすきの交差点から国道三十六号線に沿って東に進み、豊平川を越えてすぐのところにあった。夏の花火大会に行くにも、すすきのや大通で飲んで終電を逃してしまっても都合のいい場所だったから、人がよく訪れた。花火観賞のあとにコンビニで買った酒を手に友人とマンションに向かったときも、すすきので飲んで徒歩で帰ったときも、橋から見える豊平川の水面は黒く波打っていた。それを怖いと思わなかったのは、何時になっても人通りも車通りもあったからか、もしくは若さゆえの無鉄砲さから来るものだったのかはわからない。休みの日は近くのスーパーでサンドイッチを買って河川敷に行き、さらさらと音をたてて太陽の光を反射するまばゆい川面を眺めた。人々は散歩やラン

ニングをして思いおもいに過ごしていて、私も川の恩恵にあずかって、ときには桜を見、ときには草のにおいをかいで束の間の安らぎを得ていた。

川の記憶は音とともにあり、どうどう、ごうごう、ざらざら、さらさらと色とりどりだ。音によって川の表情は変わり、底に眠る記憶は気まぐれに蘇る。

こちらに越すときは猫二匹も一緒だった。歳は十歳を超えて、人間で言えば高齢者にあたる。どちらも拾った猫だが、二匹の内一匹は長毛種で、ひろった仔猫のときは一番やんちゃな顔をしていた。動物病院で「手が大きいから大きくなるかもね」と言われた彼には「リオ」と名付けた。川という意味があると知ってつけた名だ。そのとき使っていた筆名（残念ながら芽は出なかったが）にも川の字が入っていた。今では猫の名も筆名にもなぜ川を入れたのかは思い出せない。ただ川は私には特別なものらしいのだ。――大事なものの名前にするくらいには。

約二十年ぶりに住まう土地が変わり、奇遇にも家の近くには川がある。ここに何年住むかはわからない。夫の転勤でまたすぐどこかに飛んでいくのかもしれないし、案外永住の地になるのかもしれない。日々はいつも頼りなく、先というのはほとんど見えないものだが、時折きらめく瞬間があるのも知っている。

ここでの生活は始まったばかりだ。新しい生活が健やかで忘れられないものになればいいと思っている。

随筆　佳作

一年越し

山野　みちこ

友人が函館空港に到着する時刻をラインしてきた。そこに「大江健三郎の『憂い顔の童子』をお土産に持っていきます」とつけ加えられてあった。東京に暮らす友人は「基本、本は図書館で借りて読む」人だが、気が向いたら購入することもあるといい、読了したそれを私に持ってきてくれることがこれまでにもあった。本棚を見ると私も持っていたので「その本、こちらにもあります」と返信した。

次の日、空港で会うと友人は旅行バッグから〝芋ようかん〟の箱と、それより一回り大きい本をとりだした。両手で受けとりながら「ライン見なかった?」と訊くと「そうだった？　出かける準備で気が急いていたから」と友人はしょげ、「去年大江さんが亡くなったとき、読んだことなかったから買ってみたの。このあいだようやく開いたんだけど難しくて理解できなかった。だけど最後まで読んだからあなたにあげようと思ったのよ」と言った。

去年三月、大江さんの訃報がながれた。ロシアによるウクライナ侵攻が始まって一年経っていた。その間〝戦争〟に関して大江さんのコメントは何もなかった。高齢のはずだから（私より一回り上）どこか具合が悪いのだろうかと気になっていた。享年八十八歳と書かれていた。

追悼に大江さんの本を書棚の上段に並べた。意外に沢山あった。じぶんで買ったのだけでなく誰かからいただいたのもあるはず、と思いながら同時に、ちゃんと読んだのは半分にも満たないと思った。そして大江文学の要のひとつと聞いている『万延元年のフットボール』はなかったし『ヒロシマ・ノート』もない。つまり大江さんの読者ですとは言えない私はそのとき、ここにあるのだけでもこれからちゃんと読み、遅まきながら大江さんと向きあってみようと決心した。しかし実行に至らないまま一年が経った。

友人に、手元にあるとはいえ『憂い顔の童子』も未読のはずと伝え、持ってきてくれた本は、知人の、書棚があるカフェに差し上げることで承諾をえた。

大江健三郎さんの小説を初めて読んだのは、四十年前、ＰＴＡ読書サークルのテキストとしてだった。それまでは〝名前だけ知っている〟作家だった。サークルのリーダーが選んだ『新しい人よ眼ざめよ』は、入り組んだ長いセンテンスで一読では意

味がつかめない。何度繰り返しても理解できないことも多い。この作家の〝知〟のレベルには到底とどかないと諦めた私は全部理解できなくてもいいのだと開き直り、分かるところだけ読みすすめた。父である「僕」は仕事でしばし空けていた家に帰ると妻から、留守のあいだ息子の態度が「悪かった」と聞かされる。障がいをもって生まれ二十歳になろうとする息子は、不在イコール死という受け止めをしており、「パパは死んでしまいました」と不安定になっていたのだった。

〝家族小説〟という面だけを身につまされながら読んだ私だったが、間を置かず『個人的な体験』も手にとることにした。若い男が頭蓋骨に欠陥のある息子誕生に混乱し絶望するのだが運命から逃げないことを選ぶまでの、『新しい人よ眼ざめよ』の二十年前に書かれた小説は最初のほうに「赤んぼうは揺籠のなかで殺したほうがいい」と女友達につぶやかせるところがあった。大江さんはブレイクのこの詩を『新しい人よ眼ざめよ』の中では、かつて誤読していたといって経験に基づいた深い解釈を展開していた。ちなみに、この書名はブレイクからの引用だ。

二作を読んだ私は、すっかり一家の日常の平安をねがう近所のおばさん的な心情で（こういうレベルの読者がいてもいいのではないかと思いながら）大江さんの幾つかの小説を手にとった。とりわけ心が騒いだのは『取り替え子』だった。映画監督・伊丹十三さんが自殺し世間は原因についてさまざま噂した。俳優時代からの伊丹さんファンだった私は『取り替え子』は義弟の大江さんが伊丹さんのことを書いていると聞いて書店に走った。語り手「長江古義人」は、すでにこの世にいない義兄「縞吾良」と、ある仕掛を通して対話をつづけ共に生きた時間を再生していた。

さて、友人のおかげで、大江さんの作品を読むという去年のじぶんに課した企てが蘇り、まず『憂い顔の童子』を開いた。主人公の名前は「古義人」だった！　ドジな行動をして怪我を負ったりする彼は、これまで書いてきた小説を世の批評とともに回想し検証し、あれこれ思いを吐露する。「そもそも自分は、夢あるいは物語を語ることのみを『人生の習慣』として、このように年老いるまで生きてきた者ではないか」という文には大江さんの体温を感じ、「過去にありえたかも知れぬことを『読みなおすこと』…」に強く背を押された。

先日、「セヴンティーン」「政治少年死す（セヴンティーン第二部）」を図書館から借りてきた。初めて触れる大江さんの問題作である。

選評

杉浦　清志

昨年は十点しか応募がなかったそうだが、入選が五点、佳作が一点となっていた。読んでみれば、なるほどこれなら入選、佳作に出来るだろうと思える。それに対して今年は、応募点数は十三点と若干増えたのだが、入選も佳作も各一点しか採れなかった。なぜか、と言えば、採れなかった作品の多くには、誤字脱字とか、句読点が多過ぎたり少な過ぎたり、打つ場所に問題があったり、常体（だ・である体）と敬体（です・ます体）の混用など、文章表現上基礎的な不備が目立つ作品が多かった。内容には魅力的な点もあり、誤字を修正したり句読点の場所を工夫したり、少し手を入れれば採用できそうな作品もあるのだが、そういう修正は私の仕事ではない。応募する際には、応募者自身が推敲を重ねて、そうしたケアレスミスのない作品を提出してもらいたい。以下、入選と佳作の計二点について、選評を記す。

入選「川のほとり」　川村　魚実

函館に来てもうすぐ一年という時に、近所の川の音を聞き、かつて住んだ地での川の思い出を辿ったという内容。小学生の時の常呂川、二十代半ばに借りたマンションの近くにあった豊平川、それぞれの川の思い出を綴り、飼っている猫にも「リオ」という、川の意味があるという名前を付け、自分のペンネームにも「川」を入れたのは、それだけ自分にとって川が特別なものらしいと書き、ここでの生活も「健やかで忘れられないものになればいいと思っている」と結ぶ。内容・表現とも無理がなく、快く読むことが出来た。

山・川・海、それぞれが自然を構成する要素で、人はその中で生きているから、それらに親近感を抱く人は多いだろう。特に川は、エジプトのナイル川、中東のチグリス・ユーフラテス川、インドのインダス川、中国の黄河や揚子江等、人類の文明の発祥と繋がる。そうした大河には常に洪水の危険はあっても、川が人の生活に恵みをもたらすのも確かだから、人は川から離れられない。文学の世界でも川を扱ったものは多く、たとえば鴨川のほとりで生まれ育った鴨長明は、その著方丈記を「行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず」と始めた。その意味でよくある題材と言えばその通りなのだが、文学とは珍しいことを書けばいいわけではなく、それよりも、多くの人が共感できる、追体験できるような内容である方が好感を呼ぶ。この作品も、そうした川を巡る文学の一つになるだろう。

佳作「一年越し」　山野　みちこ

飛行機で函館に来た友人が、大江健三郎の『憂い顔の童子』を持って来てくれたことをきっかけに、買ってはいても難しくて読めなかった作品を読み返し始めたことを書いている。大江文学に、よくわからないながらも向き合おうとする態度は誠実で好ましいのだが、結末が「先日、『セヴンティーン』『政治少年死す（セヴンティーン第二部）』を図書館から借りてきた。初めて

触れる大江さんの問題作である」となっており、あまり結末らしくない。問題作だからどうだというのか。それらをこれから頑張って読むということなのか、どうか。折角借りたのだから、是非とも挑戦してもらいたいし、或いは挑戦したのかもしれないのだが、そこまでは書かれていない。

小説　入選

寒川②

山本　大

和吉　六十三才のある日
穴澗の吊り橋より身を投げる
身は穴澗の淵をよせてはかえし
行くともせず　帰るともせず
潮の干くにまかせ　潮の満ちるにまかせ
穴澗の深淵をさまよう
和吉には聞える　コンコロ節が
和吉には見える　三筋（みすじ）の川が
和吉には解かる　村人の哀歌が

――宮崎正孝『寒川の「和吉」』（詩集『炎の山―石仏にふれて―』所収）より抜粋

＊1

面接を終え、うんざりした気持ちでホテルのエントランスを一歩外に出た途端、暑気に息が詰まった。オサムはネクタイを少し緩め、指先を不器用に突っ込むとワイシャツの第一ボタンを外した。真夏の太陽は白く凶暴で、ギラついていた。燦然と輝き、それは正しさのようでうっとうしかった。

「朝市にはどう行けばいいですか？」

振り向くと男がいた。オサムの両親と同年輩らしいその男は後退したおでこの汗をハンカチで拭いながら、オサムが出てきた建物を見上げていた。からかわれた気がした。それから、どこかの客室の窓から顔を出している知り合いに訊いたのだろうか、と思い、オサムも頭上を見上げた。射すくめるような太陽が眩しかった。耐えかねて視線を戻すと、男とまともに目が合った。男は答えを待った。

いままで照明を消した薄暗いロビーにいたオサムは目をすがめ、この通りを真っすぐ行けば、左手にＪＲの駅が見える、朝市はその隣りにありますよ、と訊かれたことに答えた。

「電車に乗ればいいですか？」男は柔和に笑い、重ねて訊いた。オサムは焦れた。

乗るまでもないですよ、とオサムは言って、男の荷物が古臭

いリュックだけなのを見て取った。一人旅のようだった。歩いても十分くらいですから、と付け加えた。
男は愛想よく礼を述べ、自分は他県からの旅行者だと言った。オサムをホテルのスタッフだと早合点していた。ここが海峡望ホテルさんか、と男はエントランスの上のネオン看板をまた見上げた。直前までここに泊まろうか迷った、と見え透いたお世辞を言った。
男は駅の方へとすぐには歩きださず、オサムの行き先を窺うように間を置いた。薄いショルダーバッグを背負い直し、じゃあ、どうも、と会釈して、オサムは駅と反対方向へ向かった。こんなとき、サユリならどうするだろうか、とぼんやり考えていた。
昼下がりの陽光が全面ガラス張りのビルに鋭く跳ね返されて、普段よりも数の多い車やひとたちのなかへと吸い込まれていく。オサムは歩きながらしきりにまぶたをこすり、あくびを噛み殺した。まといつくような湿気は催眠ガスのようだった。この数日、よく眠れない日が続いた。
十字街の電停には行列ができていた。若いカップルや友だち同士のグループ、大声でしゃべる外国人のファミリー、はしゃぐ子供、はしゃぐ老人。どの顔も楽しげで、行列にも観光気分を損なわれていない。
目のくらむような夏の日差しは、小さな悩み事くらいなら乾かしてしまうのかもしれない、ふとそんなことをオサムは思った。朝露で湿った芝生や脱皮したばかりのセミの羽根のように。行き交うひとたちの表情に浮かぶ、どこかさっぱりした様子にそう思った。
誰もが夏を謳歌している、とオサムは感じた。交差点の角の暗い店内のショーウィンドウにぼんやり姿が映る。スーツのなかで熱がこもって、じわっと汗を掻いた。その姿はギラギラした街の夏にまるで相応しくなかった。
年代物の建築の向こうに山が見えた。観光シーズン特有の喧騒から逃れるように、オサムは坂を登った。汗がさらに噴きだした。指先で拭った汗を何度も摘まんでは離し、粘つきを確かめた。石のように硬かったはずの指先の皮膚は、もう石のようではなかった。
面接を担当したホテルの副支配人は、最後までオサムに興味を示さず、それを隠そうともせず、通りいっぺんの質問を済ませた後はホテルのことさえ話題にせずに、ひたすら自分の話ばかりした（自己アピールなんて求められるよりよっぽどマシだが）。最近、山麓の西側にある高層マンションの最上階に引っ越したという。不便がって入居者は少ないが、自分はまるで不便さを感じない、と男は笑った。その口調には、街に住む人間の感受性の乏しさを見下す調子が含まれていた。そのベランダから美しいサンセットが拝めるのだ、と副支配人は夢見るような目つきで言った。その昔、山の裏側に海水浴場があったんだ、白いヨットを数隻見かける、おれもあんなふうに舟遊びをしてみた

い、と思いつくまましゃべった。オサムは寒川のことを知っていた、祖父や父から聞いたことがあった。かつて、そこには集落があった。相づちのつもりでオサムはそれを口にしたが、副支配人は年齢のことで無礼なジョークを言うと、履歴書の証明写真を指さし、ルール違反を指摘した。

「こういうのは、基本的に三か月以内の写真じゃなきゃダメなんですよ。だいぶ前のでしょ？　これ」

その写真はアパートの机の引出しをかき回して出てきたものだった。ミリ単位でひびの入った脆い骨のような白い枠に一枚だけ残った証明写真は、子供のころに遊んだ、古いビデオゲームを想起させた。人型のゲームキャラクターでも『何人』とは言わず、『何機』と数える習わしがオサムには不思議だった。

――やべぇ、あと一機だ！

坂を登るオサムの耳に、子供らしい声がこだました。言葉とは裏腹にまるで切迫感のない声。顔も名前も忘れた小学校の同級生たち。

後日、連絡します、とは言ったが、目の前で不採用を告げる気まずさを嫌っただけだろう。そんなもんだ、とオサムは思った。逆の立場なら採用などしない。三十過ぎ（副支配人のほうが年下だった）で未経験者の不愛想な男では。そもそも職業安定所の職員に電話を掛けてもらった五日後に面接日が指定された時点で、先方が乗り気でないと予想していた。接客経験を訊かれ（それは職安の電話でも前述したし、履歴書にも記載してあることだった）、深夜のコンビニバイトをしている、とオサムが答えると、副支配人は鼻で笑った。

オサムはさらにネクタイをだらしなく緩めた。一本きりの、えんじ色のネクタイを最後に締めたのは保存したエクセルの履歴書によれば一年前の面接だが、ほとんど記憶にない。結び方のほうはギターコードの押さえ方のように、不思議と指先が忘れていなかった。

こめかみをつたう汗が顎の髭剃り跡をひりつかせて、スーツに落ちる。白く毛羽立つ濃紺の生地に吸い込まれるが、焼け付くような日に照らされ、瞬く間に蒸発する。スーツに棲みついたカビも干からびて死滅するはずだ。ざまあみろ、だ。

テーラーバッグに包んだだけのスーツはクリーニングしておらず、白癬菌のようなカビが生えていた。オサムは出掛けに手のひらでカビを払った。それで誤魔化しがきくことを知っていた。

急な坂道の途中に建つ家の風除室にオサムの姿が映った。明るい日差しのなかでその姿は虚ろだった。勾配のせいで前かがみになり、腕を少し突き出してよろぼう、かび臭いスーツを着た男。

まるでフランケンシュタインだ、とオサムは思った。ギターと録音機材の横に据えた、安っぽいワードローブにぶら下がる納体袋から取り出した身体と、いつ撮ったかも思い出せない顔。期限切れの若さで継ぎはぎした、途方に暮れるフランケンシュ

タイン。
歩きながらオサムは笑った。乾いて、まんざら陰気でもなかった。きっと夏のせいだ。
元気に遊ぶ子供たちの声が聞こえる。だるまさんがころんだ、をやっている。声は八幡宮の辺りから届く。社殿へ続く石畳の参道の両脇にきれいな芝生があるのを思い出した。
神社の脇の緩いカーブの坂道を上った。歩道は狭く、すぐ横を車が往来した。道路沿いの錆びた金網のフェンスになにかがぶら下がり、車が起こす風圧にぶらぶら揺れていた。よく見ると、それは小さなクマのぬいぐるみだった。冬眠中のように痩せ細っていた。誰かの落とし物らしいそれは、首元のストラップで吊られ、うなだれていた。
登山者用の駐車場が見えた。広くないスペースは満車だった。小学生のころ、家族で山に登るときはここに停めなかった。近くに路駐できる場所があるのだ。
登山ルートを案内する看板を見ていた老夫婦がスーツに革靴といういで立ちのオサムを一瞥した。耳まですっぽりと覆う帽子に包まれた顔に怪訝な色が、瞬間、よぎった。オサムはルートを確認もせずに、トチノキの実と砂利が混じる道に足を踏み入れた。表情にこそ表れていないものの、心の片隅では老夫婦以上に訝りながら。
オサムは登りはじめた。両脇を熊笹が茂る階段の道はきつい勾配ではないが、早くも目がくらみ、頭が少し痺れた。息が乱れる。パッキンが壊れた蛇口のように、喉や肺から息が漏れているかのようだ。山の空気は濃く、青々として新鮮だった。だが、オサムの肺はその新鮮さを拒むかのようだ。
膝と腰に手を添える姿勢でオサムは立ち止まった。肩越しに振り返ると最前の老夫婦の姿が見え、また歩きはじめた。ゆうべ降った雨のせいで土がやわらかい。革靴がぐにゃりと沈み、滑る。側溝を雨水が下っていく。
傾斜が急になった。頑丈そうな角材の階段を踏みしめると、小学校の廊下を思い出した。
大きな円柱形の構造物が見えた。コンクリート製で、割れ目からサンゴのような枝が伸び、上蓋には枯れ葉が積もっていた。灰色だったはずの表面は黒ずみ、周囲の自然にほとんど同化していた。確か、戦時中に造られた貯水槽だったはずだ。懐かしかった。そして、この山のそこかしこに戦争の名残り――たとえば、砲台跡とか――があることを思い出した。忘れていたわけではなく、思い出す機会がなかった。オサムは手首のボタンを外し、上着ごとワイシャツの袖をまくった。玉の汗が浮かぶ。手のひらをグッと押し付けて、腕の汗を振り拭った。滴がごつごつした石の上に落ちた。オサムは夏を素肌で感じた。それは夏のふりをしたまがい物――場違いにはしゃぐ春や秋――ではなく、夏そのものだった。
赤茶けたトタンの切妻屋根の小さな建物が見えた。軒先は地面に近く、まるで建物自体が陥没したかのようだ。水の音がす

る。湧き水だろうか、太い蛇口からとめどなく流れている。その蛇口のためだけにこんな構造物を建てたのだろうか。蛇口のそばには看板があり、飲料には適さないから飲んではいけない、と注意している。エキノコックス、という言葉が脳裏に浮かんだ。オサムが最初にその単語を知ったのは小学生のころだ。飲んではいけない、と担任が言った。オサムは飲まなかった。ただ逆らうために逆らうような、天邪鬼な子供ではなかった。

飲むな、という警句を目にした途端、喉の渇きと尿意を覚えた。全身に溜めこまれた水分は汗や尿となって次々に逃げ出していく、オサムは身内で繰り広げられている、そのせわしない遁走を意識した。渇きはまだそれほどひどくはないが、この暑さを思えば、すぐに口がカラカラに乾いてしまいそうだ。

その水は見た目にはきれいだった。飲んでみようか、という考えがよぎった。飲んですぐ症状が出るわけではなく、数年、ないし十年ほどの猶予があったはずだ。オサムは十年後の自分を想像しかけてやめた。

水飲み場がないか訊こう、とオサムは思い、赤い屋根の建物を通り過ぎた。

平たい石を敷いた急な階段を上ると車道に出た。ここからの道はわりと緩やかだとオサムは知っていた。記憶が次々によみがえる。小学生の自分は、あの貯水槽を見て土管を連想した。そんな他愛ないことさえ思い出した。

下山者とすれ違う。見ず知らずでも、こんにちは、と気安く声を掛け合う。蛍光色のウェアに身を包んだ女性二人組が口元を挨拶の形にしながら、オサムを凝視する。アルペンストック代わりにビニール傘を突く老人は、関心なさそうにヒョイと頷く。充血した目を新鮮な光と空気がチクチクと刺した。痒みを覚えて、まぶたを掻いた。余計な水分が抜け切ったのか、汗が止まった。首が攣りそうなほど高い杉を見上げると、水色の空があった。

無数の鳥とセミの鳴き声に、耳元で感じる血流と空気を伝わる息遣いが混じり、複雑なリズムを作る。足を速めながら、山の空気をオサムは深く吸い込み、たっぷり吐き出した。

黒のスパッツとショートパンツ、半袖のシャンブレーシャツを羽織った男が駆け上がってきた。無造作に見えるもじゃもじゃの髪の毛も髭も、そう見えるように整えられたものだった。まったく汗を掻いていない。オサムは立ち止まり、曖昧な笑顔をこしらえ、呼び止めた。だが、男はさっさと行ってしまった。

水たまりに革靴を突っ込まないように注意した。うつむきがちに歩いていたせいで、こんもりした物体に気がついたとき、ハッと息をのんだ。猫や狐の死骸のようにも、カラカラに干乾びた抜け殻のようにも見えた。だがそれは、腐って茶色くなった大きな葉だとわかった。ベンチを見つけたオサムは、少し休みたかったが、立ち止まるとたちまち耳元に蚊が寄ってきて諦めた。道は細くなり、右手の山肌にはネットが覆い、落石注意の警告があった。枝に止まるカラスに話しかけていた老人を追い

越し、つづら折りに山道を歩くと、上の方で、たくさんの声がした。その声はとても明るく、無邪気そうだった。変声期前の男の子が気味の悪い虫か、それとも実をつける植物を見つけたことを周りの友だちや大人に得意げに知らせているのが聞こえ、機械じみた――まったく感情が聞き取れない――金切り声が上がり、大人たちが口々になにか言い、笑った。オサムは自分の姿を意識した。ここまでに遭遇した怪訝や胡乱ならばどうということはなかった。それは無関心と同質のものだからだ。だが、いま頭上にある無邪気さにオサムはたじろいだ。それは見つかったが最後、いともたやすくオサムを貫くだろう。

オサムは歩を緩めた。道の片側は木々と草の茂る天然の壁で、その反対側にはここまで登ってきた道のりが見えるだけだった。

手持ち無沙汰のオサムに追いついたのは、老夫婦でもカラスと話す老人でもなく、カップルだった。大学生だろうか、そんな印象だ。こざっぱりした顔と服装の男が遠慮がちに、こんにちは、とオサムに声を掛けた。それからふたりは、こんな場所でなにをしているのか探すように、オサムの周囲を素早く見回した。なにかしている振りもできず、オサムは（唯一できる）聞こえない振りをした。カップルが顔を見合わせ、行き過ぎていった。

しばらく行って、大学生のカップルがいっせいに笑った。男はひそめた息を吐き出すように大げさに笑った。

カップルをあからさまに笑わせたのは、下山してきた少年だった。日焼けした、肥った少年は傾斜のせいでついた加速に抗おうともせず、一目散に歩いていた。連れがいるに違いない、とオサムは思った。少年が手ぶらだったからだ。家族だろうか？だが、一番にたどり着いて、お父さんやお母さんやお姉ちゃんに、すごい、と言わせたがっている顔には見えなかった。そういうとき、誰でも興奮を押し隠した表情をする。破顔一笑、はち切れる寸前の顔だ。子供なら隠そうともしないだろう。元気いっぱいに笑いながら、すごい、と言わせるための距離をできるだけ稼ごうとする。だが、少年の目にそういう輝きはなかった。肉づきの良い顔が無条件に備えているはずの愛嬌を山頂に置き忘れてきたような、憮然とした表情は、ただ、こう繰り返しているようだった、独りにしてくれ、もう放っておいてくれ、と。

大学生の男がドスンドスンと音がしそうな少年の足取りを真似た。男の腕を叩き、たしなめる女も顔は笑っていた。街の眩しさに過敏な人間もいる、と想像する必要のない顔。

オサムは引き返すのを諦めた。肥った少年の姿はもう見えなかった。にもかかわらず、すぐに追いついてしまうような気がした。

その小団体は十名くらいの小学生と引率の大人たちで、膨らんだカーブの、少し広くなった場所で小休止をとっていた。追い越すとき、母親の手を引っ張った小さな女の子がオサムに、バイバイ、と手を振った。オサムはぎこちなく手を挙げることしかできなかった。

日はやや西に傾き、山がちょうどよい日陰を作っていた。涼

しさを感じるほどだ。
大学生のカップルの後ろ姿が見えた。彼らもチラと振り返った。折りたたむように道は左にカーブする。右手にも道が見えた。目立たないが分かれ道のようだ。オサムはカップルの後ろを歩く気まずさを回避するため、そちらの隘路を選ぶつもりだった。ところが、カップルがそちらを行った。どこへどう通じる道なのか、ふたりとも知らないのは足取りを見ればわかる。気まぐれな冒険心からではなかった。いかにも仕方なく、といった口調でなにか言い合い、藪のなかへ消えていった。
さらに登ると、今度ははっきりした分岐点があった。あの小団体は千畳敷へ行くだろう、とオサムは思った。遠足のとき、そうだった。
空が近い。根元から見上げた背の高い木々の林冠はいつの間にか眼下にあった。
無造作風の髭と髪の男が、駆け上がったときと同じ勢いで下り、通り過ぎた。
山道が途切れ、アスファルトの道路に合流する直前で、寄りかかって街を見下ろすのにちょうどよい柵があり、そこでオサムはやっとひと息ついた。強い風がオサムをなぶった。暑さは相変わらずだが、空は薄く曇っていた。
オサムは柵に身体を預けた。山裾の向こうに広がる街の夏は、海から漂う霧が白く薄い膜のように覆っていた。この季節はいつもこうだ。いま、霧がかるあの海岸線を歩けば、潮の香りを強く感じるはずだ。駅前の辺りでは、のそのそ這う毛虫のように市電が行き、マチ針の頭のようなカラフルな点があるところではバラバラに、またあるところでは同じ目的を持って移動している。ここから見下ろす街は白い蚊帳に包まれているようだった。
赤茶色の四角い建物が目に入った。サユリが勤める市役所だ。そこからほど近い線路沿いに、面接を受けたホテルがある。なんだか、遠い昔のことのように思えた。競輪場が見分けられた、オサムが住む木造アパートはあの近くだ。右側の海岸線をたどり、両親の家を探してみたが、見つけられなかった。姉が嫁いだ都会は、さらにずっと向こう側にある。
朝市には迷わず着いただろうか？　あの時間に行っても開いている店は多くない、と教えてやってもよかった、とオサムは少しだけ後悔した。サユリならそうしただろう。
一緒に歩いていると、よく声を掛けられた。サユリの道案内は丁寧で、ときには、ついでだから、と嘘をついてまで案内した。大人なんだから道ぐらい歩けるさ、と言いつつオサムはつきあった。ちゃんと伝わったかな？　わたし説明下手だから、と心配しながら、サユリはいつまでも後ろ姿を見送ったものだ。
オサムの視線はまた、市役所に戻った。そして、せっせと蓄える蟻でもなく、さりとて刹那的な享楽に耽るキリギリスでもない、ただただ、くすぶる苛立ちで時間を空費する、怠惰な虫のことを思った。

＊2

サユリが投資に関心を持ちはじめた。いつからかはわからない。オサムが気づいたのは昨年末くらいだ。サユリがその話題を持ち出したことは一度もなかったが、一緒にいればなんとなく気づくものだ。

サユリの部屋でテレビを観ているとき、何気なく尋ねると、サユリはコピー用紙をホチキスで留めたパンフレットを出してきた。

『老後まで見据えた資産形成のための投資セミナー』

表題にはそうあった。そのセミナーは今年三月に単発で開催されたもので、再度の開催を望む声に応え、月一回のレギュラーに昇格したという。次回はその二回目で、サユリは単発のも含め、過去二回とも受講していた。

サユリはオサムの三つ年下だった。まだ若い身空で老後を見据えるのか、とオサムはからかい半分に言った。ましてや、公務員という安定した職業に就いてまで、と。オサムにしてみれば、現状が気に喰わないのに、老後もなにもあったものではなかった。

オサムはパンフレットを見るともなしにめくり、サユリに返した。サユリはなにも言わず受け取り、コインパーキングのレシートをしおり代わりに挟んだページに目を落とした。

「おれも行ってみようかな」テレビの画面を観ながら、オサムは言った。

「行こうよ。肩ひじ張らないお話し会っていう感じだから」そう言ってサユリが浮かれた。「講師のおじさんがね、講談師みたいで面白いの」

興味をそそられたわけではなかった。言えばサユリが喜ぶと思ったからでもない。行ってみようかな、などと口走ったのは、たぶん、行こう、と誘われなかったからだ。

セミナーの会場は、西部地区にある貸しビルの二階で、オサムの記憶によれば、確か不動産関係の会社か法律事務所がテナントで入っていたはずだ。表の通りから、窓ガラスに一文字ずつ貼った会社の名称を見た憶えがある。現在は多目的スペースとして利用されているらしく、ガラス窓の文字もきれいに剝がされていた。

ビルの外装はそれなりに新しいが、一歩中に入ると古臭かった。小さなエレベーターが一基あるだけで、乗り口の前では、四、五人が階数表示のランプを無言で見上げていた。オサムはとっとエレベーターの脇の階段へ向かい、サユリもついてきた。セミナーが開かれるのは、二階にふたつある貸会議室のうちの大きい方で、干した昆布を敷いたような年代物の階段――それはオサムが卒業した小学校の校舎を思わせた――の踊り場まで来ると受講者の談笑する声が聞こえた。学校みたいだ、とオサムはつぶやいた。

「え？」斜め後ろのサユリが訊いた。
オサムが振り返り、口を開く前に、あっ、とサユリが声を出し、手を振った。廊下にもひとの輪があり、ここで顔見知りになった女性を見つけたのだ。髪の短い、スポーティーな雰囲気の女性だった。
オサムは階段を上りきると、少し立ち止まり、サユリを先に行かせた。
いかにも女性らしい、まるで数十年ぶりの再会のように思える挨拶が終わるのをオサムは待った。
「うちの旦那です」と女性が紹介したのは、オサムと同年輩の男だった。
「どうも」と応じ、どう言うべきか迷い、オサムは結局、苗字だけを名乗った。
会議室の入り口で受付を済ませ、受講料の千円を支払った。講座はかなりの盛況のようだ。折りたたみの長机とパイプ椅子の受講席は五十人分以上もありそうだが、それが満席になるほどだ。気の合うもの同士集まって談笑するもの、開始までまだ十分もあるのに、着席して膝を揺するものなど様々だ。若者ばかりと思いきや、年寄りも少なくない。皆、堅実な感じで、黒い革のパンツに身体にぴったり張りついたTシャツを着ている手合いはほかにいなかった。
年配の女性がサユリに近づき、後ろから名前を呼んだ。サユリが疑問符と感嘆符が見えそうな声で相手の名前を呼び、嬉しそうに女性とハグした。お互い、SNSでは交流があったが、会うのは今日がはじめてらしかった。
講習開始の午後七時が過ぎた。だが、一向にはじまる気配がない。サユリの周りにひとが集まる。オサムは、新しく生えた爪に追いやられて剥離しかかった、赤黒い爪のようになった。チャイムが鳴り、ざわついて、しどけない時間に終止符を打つのを待った。もちろん、チャイムなど鳴るはずはなかった。
最後方にできていた人だかりにいた初老の男が、プロジェクターのスクリーンが下りた前方へゆっくり向かった。長机の間にできた通路に突っ立っていたオサムが道を譲った。
「じゃあ、そろそろはじめましょうか」と男は言った。オサムとサユリの席は横に三つ並んだ長椅子の中央、前から三列目だった。
「いやあ、すごい。回を追うごとに人数が増える」がやがやと席に着く騒音のなかで男が笑った。「それだけ関心をお持ちの方が多いということですね」と独り言のように言い、おもむろに――起立・礼・着席の号令もチャイムもなく――セミナーははじまった。
「今回、はじめて受講される方も多いですね。ちょっと、挙手していただけますか？」
オサムの前のふたり――最前列は薄緑色の作業服のつなぎを着た中年、すぐ前の席で脂肪のついた広い背中を見せているのは四十代の女性――は手を挙げなかった。オサムは目を伏せ、

肘を曲げて控えめに手を挙げた。
まだ二回目だからだろうか、具体的な金融商品の説明や資産運用のノウハウには触れず、男の身の上話を聞かされているような時間が続いた。男は妙なアクセントで、愛想の良い話し方をした。講談師には見えなかった。たとえ着物姿で扇子を持っていても、そんな印象を持つのは難しい。たぶん、サユリは漫談家と言いたかったのだろう。なるほどそんなふうに見えなくもないが、一番似ているのは、テレビに出てくるコンサルタントとかアドバイザーとかいった、専門家を自称する……
「胡散臭い、そう思われる方もいらっしゃるでしょう」
開始以後、ほとんどはじめてオサムは顔を上げ、講師の顔をまともに見た。男は眺め渡すように顔を巡らせたが、視線はオサムを射ているような、そんな気がした。
「わたしはこの街で生まれ育ちました。だから昔馴染みの友だちがたくさんいます。口さがない悪友たちはよくこう言います。『おい、おまえの言うことはよくわからないぞ。そんなにうまい話があるのなら、なんだってこんなちっぽけな街でうらぶれた生活をしているんだ』と」
男の沈んだような表情に、聴衆は静かになった。それから、間を置き、茶目っけたっぷりに、「友だちというのは、誠に有難いものです」と言うと、ふう、と息を吐くような笑いが起こった。オサムはまた目を伏せた。
講師の男は聴衆の反応をニコニコと受け入れてから、「いえいえ、決して皮肉からそう言うのではありませんよ。腹蔵ない意見は、自分が外からはどう見えているのか、明確にしてくれます」と言った。
「こんな仕事をしていると、さぞお金が好きなんだと思われますが、誓ってそれは誤解です。富豪になりたいなんて微塵も思いません」それから講師は自分の服装を強調した。コーデュロイのスーツもチョコレイト色の靴（オサムが踏んでしまった靴だ）も、それほど高価ではないとひと目でわかる。
「でも、お金のことであれこれ思い悩んだり、なにかを諦めるなんてのは嫌です、それは皆さんも同じだと思います。そうでしょう？　だから、ここにいらっしゃる」
同意を示すうめき声が不揃いに上がった。
「いろいろ苦労しました。勉強もたくさんしました。でなければ、皆さんにこうやってお話などできません（そこで言葉を切ると、受講生に配布された冊子を宣誓する右手のように掲げた）。わたしには妻とふたりの子供がいますが、おかげで何不自由なく暮らしています。誓って本当です。子供たちはわたしがよそのお宅の旦那さんみたいに、毎朝、出社しないことを不思議がりもしません、まあ、父親に興味がないだけかもしれませんが」聴衆からまた笑いが起こった。「そうなるまでに費やした苦労や努力は妻しか知りません。ひけらかすようなものではありませんからね、苦労というものは。それでも、さも当然のように思われると、つまらないと思うときもあります。そういうと

き、悪くないな、と思うわけです」
——失礼ですけどお子さんは？　と講師の男は訊いた。顔を上げると、訊かれているのはオサムだった。
「いえ……まだ」
「夫婦というのはなかなか味わい深いものですよ」しみじみした口調で講師は言った。視線が集まり、また答えを求められたような気がした。「でも、お若いですからね、まだ」講師はそう言い、オサムを開放した。ぎくしゃくした笑いが気まずい沈黙を掃いた。講師は立場を愉しんでいた。
「皆さんは花や野菜を育てたことがありますか？　わたしは小さな菜園を持っています。うちの食卓に並ぶトマトやキュウリは全部、わたしがこさえたものです。種を植えれば放っておいても育つわけではありませんね？　お金もじつはそういうものなんです。預けておいても育ちません。それどころか、気づかぬうちに枯れてしまうかもしれない。わたしがここでご説明するのは、難しいことでも、特別なことでも、じつはなんでもないんです。虫がつかないようにしたり、成長に合わせて栄養を与える、言わばそういうことです」
オサムは閉じたままの冊子を見つめていた。表紙には若い家族の団欒のイメージが、境界線をぼかしたハート型に縁どられている。講師のカラー版でなくとも、それが醸さんとする幸福感はうっとおしいほど伝わってくる。高い天井、後背には折れ階段が見え、大きな窓から白い陽光が差し込む明るいリビングにいるのは、溌溂とした父親と優しげな母親、父親の首元に抱きつく男の子と、母親の隣りにちょこんと座る女の子。子供たちは両親の恵まれた外見を受け継ぐこと請け合いだ。
ささやか、と講師の男は言った。だが、オサムには、さも当然のような顔をしているこんな暮らしが実在するとは思えなかった。
出ていこう、とオサムは決めた。こんな場所、さっさと出ていこう。
また質問がくるだろう、できれば答えて出ていきたかった。そして案の定、当てられたが、答えようとする自分を唾棄した。
「わかりません。用があるので帰ります」
慌てて荷物をしまうサユリを制した。独りで帰る、そう言ってオサムは席を立った。
だが、教室の扉が開かずにまごついた。いまさら席に戻れず、手の甲に玉の汗が浮かんだ。助けに来たのはサユリだった。ごめんね、とサユリは小さく言った。ここ、オートロックで開け方が独特なんだ、と言い足した。

＊3

その日の夜遅く、サユリからラインが届いていた。ヘッドホンのせいで、オサムは翌日の昼まで気づかなかった。読んでみると、昨夜のセミナーには不自然なほど触れていなかった。オ

サムは返信しなかった。それから、オサムの誕生日を祝うメッセージにも返信せず、サユリの誕生日にも連絡しなかった。付き合ってからずっと見物に行っていた港祭りの花火も終わった。三、四日おきにサユリから届くラインに、オサムは一度も返信しなかった。そして、連絡が途絶えたのがわかると、オサムは職安に足を運んだ。

花火を見逃したことはどうでもよかった。もともと人混みが嫌いなオサムには、わざわざ見物に行く心境がわからなかった。サユリにもそう話した。言わなくてもよさそうなことをわざと言ったのは、サユリがせがんだからだ。オサムの話を聞きたい、とサユリはよく言ったものだ。

札幌の大学に通っていたころ、オサムは大通の楽器店でアルバイトをしていた。閉店後、大きな川の河川敷を歩いて南平岸のアパートまで帰る道すがら、いつもよりたくさんのひとにすれ違った。浴衣姿が多かった。そのうち後方で、ドン、と花火が打ち上がり、歓声がそれに続いた。オサムはすれ違う群衆をかわしながら、ときどき振り返って花火を見た。

それで充分だ、とオサムは思う。持て余してしまう時間の気まずさが苦手だった。

時計の針はオサムが目を向けたときだけ、なに食わぬ顔で進む。目を盗んでサボったり、帳尻合わせにまとめて進んだりしている。ときどき、そんなふうに思う。別にそれで構わない、好きにすればいい。おれもそうする。

見逃した花火なんてどうでもいい、すると、あらゆることがどうでもいいことに思えた。

つつじ山駐車場に車は一台だけで、がらんとしていた。向こうに白っぽい建物が見え、それが公衆トイレだと気づくと尿意がぶり返した。トイレの前に女がいて、近寄るオサムを胡乱げに窺った。男子用のトイレから男が出てきた。トイレの横には車両通行止めのゲートがあった。徒歩で侵入できるらしい。

暗い道に、まるで漫画の吹き出しのように大小の水たまりがいくつも点在していて、濃い泥水がそこに溜まっていた。分厚い雲が空一面にのしかかっている。西のほうでその雲は薄く途切れ、まばらに残照を透かしている。それは滲んだ光の雲のようだった。鉄灰色の空に浮かぶ光の雲、あべこべな空だった。

セミの声が近い。あたかも耳元で鳴いているようだ。汚れた革靴のつま先で地面を払うと、茶色い物体が転がった。空蟬だ。幾重にも枝葉が折り重なった日陰に目を凝らした。

どいつもこいつも地中で七年間過ごした後、土から這い出て、木に登り、ああして一週間かそこら鳴きつづけるのか、と思うと不思議な気持ちになった。全部が全部、成虫になれるわけでもないのに。一匹くらい、慣れ親しんだ地中で終えようと思わないのだろうか？

オサムは貯水槽のことを思った。あのキャラクターは――やべぇ、あと一機だ――土管の上でしゃがむと、地下世界へ移動するのだ。

足元で黒いものが動いた。蛇だろうか、側溝を下る雨水のようにそれは素早く消えた。

オサムは来た道を振り返った。だるまさんがころんだ、の途中で不格好に固まっているようなねじくれた大きな木々は、堪りかねていまにも動き出しそうだった。風が吹き抜け、枝葉をカサカサと揺すり、聞き取れない密談を交わし、笑っているかのようだった。

セミの声がいっそう耳障りになった。それは鼓膜を突き破り、オサムの脳にキリのように刺さった。乾いた身体にまた汗を掻いた。

オサムは駆けだした。

キラッとなにかが光り、オサムの気を引いた。それはカーブミラーだった。雨だれで黒ずみ、鏡面には大小の凹み（落石のせいか、あるいは子供が石投げの的にしたのか）がいくつもあった。欝蒼と茂る草木の奥に隠れ、昼間の空に浮かぶ月のようだった。カーブミラーの庇の部分はぐにゃりとひしゃげていた。欠けた月、それは十三夜の月を思わせた。

足もとで道が崩れた。大きな土くれが、ごそっと。木の根がぶちぶち千切れる音がした。焦って体勢を立て直そうとしたが、太ももが強張り、筋肉痛の兆候を表していた。革靴の踵は踏ん張りが効かず、空しく宙を蹴った。

＊4

なだらかな牛の背を思わせる表の顔とは打って変わって、山の裏側は懸崖ともいうべき様相を呈している。黒い乱杭歯だらけの下顎のような巨大な岩壁が背景を成し、すぐ前方にはタールのような海がねっとり広がる。南極のようだ、それは真っ黒い南極。黒く不気味な輝きを放つ岸壁が、溶けだす海氷のように轟音を立て、いまにも崩れ落ちそうだった。

オサムはいま、顔をしかめて首を逸らし、どこから落ちたか見定めようとしていた。だが、目を凝らしても稜線は影絵のようではっきりしない。そして、オサムは暗闇に取り巻かれていることに気づいた。照りつける太陽はとっくにあの暗い海で窒息していた。身体が痛んだ。首筋をさすると手のひらが沁みた。空には月も星も見当たらず、煤煙のような雲がたなびいている。それで、容赦なくオサムを濡らしている雨に気づいた。雨は音もなく降りしきるかのようだが、それは騒がしく唸る風と波に掻き消されているせいだった。

岩壁には手の切れそうな亀裂が走っている。オサムは泥の詰まった爪をその窪みにそっと這わせた。指先を引っかけ、弾みをつけて身体を引き上げようと試みたが、それはいかにも気乗りしない、戯れのような動作だった。全身の筋肉に力を込めるのが怖かった。本気で取り組んだ途端に無数の裂け目は、這いあがろうという無駄な足掻きが刻んだ、断末魔の爪痕に変わってしまいそうだった。

歩けないほどではないが、足を挫いたらしい、といまの動作で覚った。切り立った断崖に左手をついて身体を支え、痛む足をかばいながら、オサムはとぼとぼ歩いた。

水を吸ったスーツは重くのしかかる影のようだった。細い川筋があった。束ねた黒髪からほつれた、ひと筋の銀髪のようなそれを跨ぎ越した。踏み込むたびに汗と雨を染み出させては、また吸い込む不快な革靴を我慢した。

そうして、どのくらい歩いただろう。一向に風景は変わらず、要した時間を推し測ることは難しい。岩壁は湾曲しており、小さな曲がり角をいくつも作る。そこを折れるたびに、楽観的な考えはひとつ、またひとつと熄んだ。

安易な侵入を拒む場所は、一旦足を踏み入れたものを簡単に返すものだろうか？

いつもならそんな消極的な考えは、押し返すまでもなく、なにか別のもっとくだらない考えが上書きしてしまうはずなのに。

やがて、ひと際大きな、まるで足の親指みたいに海に突き出た岩に出くわした。オサムは足首の痛みを堪え、急いだ。ぐるりと回り込めば、なにか突破口があるはずだ。

――あと一機だ！

オサムは呆然とした。ひとを喰ったようなゲームオーバーのＢＧＭが聞こえた気がした。

オサムはびしょ濡れで泣いていた。骨の髄まで絶望が浸み込んでくるようだった。そして、はじめてサユリを知った日を思い出した。それは、あの証明写真を撮った日でもあった。

夏だった、今日のように暑い日だった。昼間だった。窓の外で芝刈り機の騒音がした。咳き込むようなエンジン音は一定の間隔ではなく、不規則な間を開けていた。操作する誰かが退屈しのぎに音頭を取っているらしかった。オサムは天井を見つめ、自分勝手なリズムを近隣に押し付ける誰かに腹を立てた。

いまの部屋よりずっと狭かったサユリのアパート。いまもあるコーヒーテーブルの上の、サユリの文房具と、いい加減な志望動機の履歴書。たった二十数年、それでも自分なりにもがき、悩み続けた時間のすべてはこんな紙切れ一枚に過ぎないのだ、そう思うと情けなくなった。わずか数行で言い尽くされた人生と頼りないセルフポートレイト。職務経歴欄の「汚れ」はまだ皆無だった。

就職するつもりなどさらさらないくせに（サユリがそう望んだわけでさえないのに）、あてつけがましく振る舞い、傷つけた。衝動的で、野良猫みたいに自分勝手なオサムに、それでもサユリは肌を許してくれた。

サユリの小さな手が肩と背中を優しくさすると、いつも曖昧な――ときに、周りから不可視なのかもしれない、という馬鹿げた妄想を信じかけるほど――自分の輪郭線がなぞられたようで、ざらついた気持ちが落ち着いた。

だが、自分はサユリになにをしてやれたのだろうか？

短大進学のために他県から越してきたサユリは、この山に登

ったことがなかった。そのうち登ってみよう、とオサムは傍らのサユリに言った。ゆっくり登っても一時間も掛からない、と。そして、言ったそばから忘れた。

「いっぱいルートがあるんだね。どのルートにする?」数日後、サユリが言った。数週間後か、もしかして数時間後だったかもしれない。オサムにはなんの話かわからなかった。

「登山だよ、函館山」

しばらくポカンと見つめ合った。

「違った? わたし、また変なこと言った?」慌ててスマホを取り出し、登山ルートを確認した。そんなやり取りがざらだった。

真剣な表情で指先を行ったり来たりさせるサユリの長いまつ毛をオサムは見つめた。オサムの気まぐれを、サユリはいつも真剣に受け止め、真剣に受け止め過ぎておかしなタイミングで返した。だから宇宙人って言われるんだ、とオサムはいつでも茶化した。それは美点なんだ、と言ってあげたことはなかった。

本当の孤独に直面して、オサムは気づいた。どうなったって構うもんか、とうそぶいていられたのは、サユリがいてくれたからだと。

雨はいっそう勢いを増す。もはや横殴りともいえず、リンチのようだ。

不気味な音が響く。それは調子っぱずれの口笛のようだとオサムは思い、そうするとあの仄暗い洞窟がすぼめた口のように思えた。

オサムは、岸壁から掘り出したような手すりも側桁もない欠けた石段を登った。それは後ろ足をたたんで座る灰色の老犬のトルソーのようだった。その先には吊り橋があった。

そこに誰かいるのか? オサムは叫んだ。オサムの前には不揃いの橋板が並び、橋の向こうに老人がいた。そっちへ渡りたいんだ!

老人はじっとオサムを見つめ、手ぶりで追い払った。その後方には灯が揺らめいていた。

オサムはなおも叫んだ。当たり前なんかじゃなかった、そう認めるのが怖くて、わざと優しさを粗雑に扱った、それでもサユリはそばにいてくれた、遠のいていくものがいくつあっても、なにも言わずに、でも手遅れだ、いまはただ、あの灯のそばで眠りたい。

だが老人は無表情で、引き返せ、と言う。

どこまで戻ればいい? しょっぱい雨を飲んで、むせた。こんなところまで来てしまった。どこで間違えたのかもわからないのに?

わかっとらんな、タフな現実を生き抜いた者だけが持つまなざしが言った。

どこだろうと関係ない。たとえ、それが昨日でも、過去をやり直すことなどできない。街へ帰れ、そしてひと眠りして、目が覚めたらそこから始めろ。

あんた、誰なんだ？
そう訊いたとき、高波が起こり、オサムは両手で顔をかばった。視界が戻ると老人の姿は消えていた。

気がつくとオサムは、カーブミラー下のガードレールに背をもたせ、両足を道に投げだす格好でへたり込んでいた。すでに日は高く昇っていた。ショルダーバッグの肩紐がガードレールの角に引っ掛かっていた。
ようやくアパートに帰り着いたオサムは、最後の力を振り絞って泥だらけのスーツを脱ぎ捨てると、素っ裸でベッドに倒れ込んだ。空蟬のようだ、と皺くちゃの衣服を見て思い、あとは泥のように眠った。

＊5

それから何度か会ったけれど、結局、別れた。でも、きちんと話し合って決めた。
一年半が過ぎた。
先日、サユリが結婚したことをインスタの投稿で知った。知りたくはなかったけれど、いつかこんな日が来ることはわかっていた。幸せそうだった。オサムはフォローを外した。
秋の連休の最終日、オサムは両親を誘い、函館山に登った。ふたりに合わせて、ゆっくり歩いた。山頂へは向かわず、つつじ山駐車場を通り、公衆トイレ脇のゲートを抜けた。
高い空はどこまでも青く澄んでいた。
木々の間から山の裏側に広がる海が見えた。
穴澗の吊り橋はあの岩の辺りだろうか、とオサムは指し示し、訊いた。
眩しそうに小手をかざした父は、そうだ、けど吊り橋はもうない、と言った。

（了）

小説　佳作

逃げる

畠田　農

わたしが小学校の教員になったのは、昭和四十二年の春だった。

僻地五級の山深いところにある小学校で、行き方がわからずなん度も電話して、ようやくわかった。

そこはバスの終点から四キロメートルも、上り坂を歩かなくてはならないという。しかも、バスは一日に一回より行かないという。

四月に入ったというのに、まだ雪が積もっていて歩けないので、当日はバスの終点まで馬ソリで迎えに行くので、心配しないで来てくださいということだった。

バスの始発の町から、終点まで三時間はかかるという。

出発した時は、乗客が十五人ほどいたが、山道にかかるころには客は、わたし一人になった。道の両側には家はほとんど見えない。道幅もバス一台がやっと通るくらいだ。道路脇には除雪した雪が、窓の近くまで積み上がっている。覚悟はしていたものの、さすがに心細くなってきて、外ばかり気にしていると運転手が声をかけてきた。

「お客さん、初めてみたいだけど、どこに行くのかい」

「谷山小学校に。バスの終点からだいぶ歩くと聞いてますけど……」

「それは大変だわ、ひとりではね。だれか迎えに来てるの」

「馬ソリが来てるはずです」

「それはよかった」

会話はこれで途切れた。

しばらくして、前方に人が二人うごめいているのが見えてきた。

「ああ、来てる、来てるよ。これなら、安心だ」

運転手がいった。

お礼をいって、バスから降りると、

「ご苦労さんでした。校長の島田です。疲れたでしょう。」

笑顔で近寄ってきた。

「小林です、お世話になります」

と、挨拶をすると、校長は隣の頬かぶりした背の高い人を、

「川浪さん。うちの学校の会長さん。今日は馬ソリを用意してもらいました」

「ありがとうございます。お世話になります」

それから、校長は、
「学校宛のあなたの荷物が、ここで止められていたので受け取って、もうソリに積んであります」
というので、荷物を確かめてから、ソリに乗った。前から会長さん、荷物、わたし、校長の順に座った。
平坦で、道があるのかないのか、はっきりしない谷間をソリは進んで行く。どうやら五十メートルぐらいの間隔で木が立っているのを、目当てにして馬は進んでいるみたい。
「吹きっさらしだから、一度通ってもすぐ跡が消えてしまうんでね。先生はどちらの学校からですか」
会長が振り向いて聞いた。それを受けて校長がいう。
「先生は、東京からですよね。この三月、大学卒業したばかりですか」
「いいえ、勤めていました」
「どんな仕事？」
「いろいろと……」
大学で事務の仕事をしていたとは、いえなかった。いろいろ詮索されるのが嫌だった。
「そしたら、教員の仕事は初めてですね」
なんだか、校長のいい方が、思惑が外れたような雰囲気に聞こえたので、しばらく沈黙していた。
馬ソリは黙々と進んでいる。
「ここでの生活は、東京とはあまりにも違い過ぎるからね。来た早々驚かせてすまないけど、覚悟してください」
校長はこういった。また、沈黙……。
「東京」「教員は初めて」校長は心配になっているようだ。
手綱を取っている会長は、ときどき振り向く。しばらく馬の鈴の音を聞いてソリに揺られていた。
「あそこの出っ張ってる裾を回ると、もうすぐです……」
振り向くと、校長は指さしている。
「すぐ」ということばは、さっきから二、三回は聞いているが、裾らしいところを過ぎても、行きつくところは、まだ先のようだ。
「……どうしてまた、東京からこんな不便なところに……」
校長がいった。なにもいえなかった。
沈黙を破るように、
「去年の秋、ここにもようやく電気がついてね。前より便利にはなったとはいえ、冬は雪で車が通れなくなるから、馬ソリに頼るしかない……」
また、ことばが途切れた。
「どうしてまた、東京からこんな辺鄙なところに……」
「教育委員会も、もう少し……」
こう呟いたが、あとは聞こえない。
わたしのことで、心配はつきないようだ。
危うく、
「ここを希望したのは、わたしです」

と、いいそうになったが、ことばを呑み込んだ。
バスの終点から雪の曲がりくねった四キロメートルの上り坂を、二時間半も過ぎたころ、右手に細長いこんもりした雪山らしいものが見え、突き出ている筒先から、黒い煙が立ち上っているのが見えた。家らしいものはまだ見えない。
しばらくすると、ゆく手の雪の上に、人らしいものが見える。近づいて行くと、頬かぶりをした女の人だった。
ソリはその人の側で止まった。
「ここです。びっくりしたでしょ」
校長がこういってソリから降りると「家内です」と、いった。続けて
「こんど来た小林先生。東京から来たんだって」
といった。
早速、荷物を下ろして住宅に運んだ。住宅といっても雪に埋まっていて、家の形がわからない。通路だけ除雪されていて、その先が玄関らしく、穴の中に入って行くみたい。
「ここでは屋根から雪を下ろすのでなくて、屋根から堀り上げるんだよ。そうでもしないと、家が雪の重みで潰れるからね」
校長が笑いながらいっている。部屋はストーブが焚かれていて暖かかった。
少ない荷物が運び終わると、校長が会長さんに
「忙しいところ、ありがとうございました」
深々と頭を下げた。わたしも、それにならった。
「落ち着くまで、大変でしょうけど、なにかあったら、いってください」
といってから、手綱をグイッと引いた。ソリはギシッと音を立てて滑り出した。
曲がりくねった坂道を上って行った。ちょっとの間、見送ってから住宅に入ったが、ソリの鈴の音がしばらく耳に残った。
「雪が消えるのは、いつごろでしょうか」
「五月の連休ごろまであるよね。びっくりしたでしょう」
奥さんがいうと、そばで校長も笑って頷いている。
「家内と相談したいことできたから、ひとまず帰るから、またすぐ来るけど。それまで荷解きしたり配置なんか考えておいたら」
校長が、こういってから、
「おい、急いで急いで」
と、奥さんを促すと
「なにさ、こんなときに」
といいながら、後をついて行った。
荷物といっても、夜具や衣類に数冊の本、それにキッチン道具ぐらいだった。
荷解きをして壁側に置くと、腰を下ろしてひと息入れた。
急に不安になってきた。望んだこととはいえ、こんなところで暮らしていけるのだろうか。
なにをおいても食べることだけど、バスの終点からここまで、

家さえ見ることがなかったのだから……。

一時間ほどすると校長と奥さんが来た。

「東京では自炊生活してたの」

奥さんが聞いた。

「ここでは何もかも一人で作って食べるのは無理だと思うんだ。来たばかりで、まだ考えられないと思うけど。なんたって一番は食べることだ。自炊するといっても、生鮮食料品が手に入らない。隣の高橋さんは店をやってるけど、生鮮食料は置いてないんだ。早速で悪いけど、そこで家内と考えたんだ。一日三食のうち、夕食だけでも隣りの高橋さんに頼んで、食べさせてもらったらどうかと思ってね」

校長がいった。

あまりにも急なことでまだ、そこまでは考えていなかった。なんと応えたらいいのか、どぎまぎした。

「そうした方がいいと思うけど」

校長がいうと、奥さんは

「そうしなさい、そうしなさい。わたしたちも安心だし。高橋さんでは一週間に一度は、下に買い物に行ってるから。そうできたら、楽になると思うよ。電気もきてるし。朝は電気炊飯器でご飯を炊いて。おかずは缶詰とか、味噌汁とか作って食べればいい」

校長が続けた。

「昼は学校で子どもたちと給食を食べる。給食といっても、乾パンに脱脂粉乳だけだけど」

せっかくの厚意に反対する理由はなかった。校長も奥さんも察してくれたようだった。

「東京では朝はどうしてたの」

奥さんが聞いた。

「朝はパンと牛乳で間に合わせていました。それも食べたり、食べなかったり……」

駅の売店で、牛乳だけで済ませたことも多いが、それはいえなかった。

「急がせて悪いけど、これから三人で行って、高橋さんに頼もう。これは少しでも早い方がいいから」

奥さんがいった。二人の後をついていった。

こんなことは、ついさっきまで考えてもいなかった。

挨拶を済ませると、さっそく要件に入った。

話しぶりでは、校長と奥さんが急いで帰った時、高橋さんに話を通してあったような気がした。

早速、今日の夕食からお世話になることになった。

高橋さんでは、生鮮食料品以外は置いてあるので、ご飯さえ炊けば、味噌汁を作って、あとは缶詰をおかずに簡単な食事ができそうだ。

奥さんの話だと、住宅の前に前任の先生が作った小さな菜園があって、雪が解けたらネギぐらいは生えてくるそうだ。

それにしても、学校や子どもたちのことはなんにも、わからないうちに、わたしの食べることを優先してしまった。
いろいろお世話になって、わたしのような者がここに来たことで、校長夫婦をはじめ高橋さんにまで迷惑をかけることになって、申し訳ない気持ちになっている。でも、今となってはどうすることもできない。
まったく、わたしは教員の初心者というより、人生の初心者というべきか。
高橋さんから出て、校長住宅に誘われた。そこで学校や子どもたちの話になった。校長の話だと、今年度は一年生は一人入学して、全校児童八人ということだった。

翌日の朝、早々と校長が来た。もう作業衣姿で、大きなスコップを二丁持っていた。
「初出勤早々で悪いんだけど、子どもたちが来る前に、学校までの道づくりを手伝ってもらおうと思ってね」
急いで身支度をしてゴム長靴を履いて外に出た。
きのう馬ソリが上って行った細い道の左手七、八十メートル先に、雪の積もった小山が見え、その下に板をはった窓らしいものがわずかに見える。どうやらそこが学校らしい。
そこまで木が十本くらい立っている。校長がそれを指さしていった。
「あれ、なんだと思います」
「さあ……。校舎に向かって真っすぐに立ってますね、なんですか」
「いまにわかる……」
こういって笑っている。
「ここは、雪はどれぐらい積もりますか」
「ほら、向こうに棒が立ってるだろ」
指さす方を見た。
「あそこがグランドの端なんだ。あの棒は二メートルある。それにさらに一メートルの棒を付け足したから、三メートルくらいかな」
「そんなに積もるんですか……」
「雪が降らなければ、ここはいいとこなんだけどね」
校長は黙々と雪除けをしながらいった。
「木の向こう端が、学校の玄関につながっているんだ」
「玄関が見えませんけど……」
「玄関までいってから、戸を開けるのが大変なんだ。雪の重しがかかってるから」
除雪をして、最初の木を倒したが、まだ地面まで雪がだいぶありそうだ。
冬のはじめ、雪が降ったら、集めて小山を作る。そこに木を立てるというのだ。
ようやく、玄関先までたどり着いた。
今度は玄関戸の前を掘った。ある程度掘ると二人で玄関の戸

を開けた。そして、玄関の中に雪を押し込んでから、中に入った。
それから、中に押し込んだ雪を外に出して、それを固めながら玄関先に階段を作った。
雪は水分を含んでいるので、ひと晩おくと凍って固くなるそうだ。
学校に入るには、雪の穴に降りていくような感じになった。こんなに雪が積もっているのを見たのは、初めてだった。ここで暮らしている人たちは、想像もできない苦労があることだろうと思う。そして、まだ見ぬ子どもたちはどんなだろうと思いがはやった。

わたしは七人の子どもたちの担任になった（三年生一人・四年生二人・五年生二人・六年生三人）。入学したての一年生は校長が職員室で教えた。

雪は五月の連休までグランドに残っていた。すっかり雪が消えると、校長は校区内を案内してくれた。児童は総数で八人だが、保護者は四人だった。
林の中に茶色い紙袋のようなものが、積み上っているのが目についた。
「あれはセメントの袋みたいですけど」
「石灰、石灰だよ。畑の土を改良するために使うんだ。ここはね、北海道の計画では、もう大きな農業団地になっているそうなんだ」
それなのに、屋根や壁が剥がれて、朽ちかけた家がなん軒もあった。
校長の話だと、ここは戦後、サハリンからの引揚げの人達が入植したという。十月の下旬には雪が降り出し、五月の連休まで雪が残っていては、どんなにしても農作物が育たない。それで、酪農に切り替えたらしい。
知らせるべきか、どうしようかと悩んだすえ、一学期の終わるころになって前の職場に教員をやっているという内容の手紙を書いた。
二学期が始まって間もなく、一年生の孝男が、学校に来なくなった。
姉の直美に聞くと
「学校に行きたくない」
といってるそうだ。
理由を聞いてみると、
「ひとりで勉強するのは嫌だ」
といっているという。校長先生は勉強を教えた後、すぐ背中を向けて、何かしているのでつまらないし、みんなと一緒に勉強したいというのだ。この気持ちがよくわかった。校長に話して、教室でみんなと一緒に勉強することになった。
二年生はいないにしても、一時限の間に五学年の教科書を開

くだけでも、煩わしい。ベテランの先生なら、効率のよい教え方を考え着くのだろうけど……。

ようやく孝男のことが落ち着いたころ、前の職場から付箋付きの封書が回送されてきた。差出人の名前も住所も、全く覚えがなかったが、あて名はわたしに違いがなかったので、封を開けた。

「この九月末に大学を卒業しました。卒業式が終わって、ひとことお礼をいいたくて、試験係の窓口に行きましたが、あなたに会えませんでした。窓口で女性の方に尋ねたところ、『三月のいっぱいで退職しました』と教えてくれました。あなたの名前だけ聞くことができました。忙しそうにしていたので、住所は聞けませんでした。

そこで、大学の試験係の、いまはいないあなた宛てに、手紙を出したら、きっと回送してくれることを念じて、卒業したことだけでもお知らせしたいと思って手紙を書きました。」

こういう内容だった。

また、「わたしは五十歳で通信教育部に入学しました。短大卒で小学校の教員をしながらの勉強でしたが、卒業まで六年もかかってしまいました」とも書かれていた。子育ても終わり、大学に入学したのだそうだ。

「夏のスクーリングでのドイツ語の試験で、カンニングをしました」「扇子に試験に出そうなことをドイツ語と日本語で書いてあったのが、見つかりました」

とも書かれていた。

ここを読んで、あの時のことを鮮明に思い出した。

すぐ手紙を書いた。

「卒業おめでとう。長い間ご苦労様でした。あの時のことを気になさっていたのですね。わたしはすっかり忘れていました。あなたも悩んだのでしょうから、もう忘れて仕事に励んでください」と。

せっかく手紙をくれたのに、短い手紙だった。申し訳ないと思ったが、わたしの母くらいの年齢の方に、どんなことばを書いたらよいのだろう。

よく覚えている。実は、あの時のことがあってわたしはいま、ここにいるといってもいい。あの女性のカンニングを見逃してさえいなければ、まだ大学にいたと思う。

あれ以来、片時も頭からはなれたことはなかった。またしても、あの女性(ひと)だ。冷静に冷静に冷静に……。

当時わたしはM大学の事務員をしていた。それもなじみのない通信教育部という部署だった。

配属は教務課の試験係だった。初め、どんな仕事をするのか、皆目見当もつかなかった。

あの事件は、就職して四か月目のことであった。

夏のスクーリング期間の前期、(四十日間の半分)の講義も終

わり、単位習得試験の時のことだった。
一般教養科目のドイツ語の試験である。八十人入る講義室に、半数の四十人の学生がいた。
わたしは、まだ試験監督の見習いで、先輩が注意事項を告げたあと、問題と解答用紙を配布した。
「始め！」
の合図で、鉛筆の走るかすかな音がしていた。
三十分も過ぎたころ、真ん中あたりの女性が扇子を開いて、ゆっくり仰ぎ始めた。初めは暑いから無理もないと思っていたが、涼を求めるにしては、仰ぎ方がいやに緩慢だった。それに時々手の動きが止まって、扇子を凝視しているようなので、後ろからゆっくりと近づいていった。
女性は気配を感じたのか突然扇子を閉じ、机の天板の下にある狭い棚のようなところに投げた。扇子は勢いあまって通路の、しかもわたしのつま先の前に落ちた。扇子は半開きになっている。
拾い上げて開くと、扇子の折り目のすき間に、ドイツ語と日本語が小さい文字で、びっしりと書かれていた。あわてた。咄嗟に扇子を開いて手早く二、三度仰いでから、
「暑いですね」
といって、机の下の狭い棚めがけて投げた。扇子は運よく机の下の棚に収まった。
たった、それだけのことだった。
後ろにもどって、学生たちを見ていた。正面にいる先輩も、窓側と廊下側にいるアルバイトの学生も、気づいていないようだ。なにごともなかったようで、ほっとしていた。
ところが、時間の経過につれて、なにか自分がカンニングしたような気持ちになって、落ち着かない。
どうしてあんな対応をしてしまったのだろう。あまりにも咄嗟な行動で、自分でもよくわからない。
試験は終わった。
前に先輩たちから、カンニングをして、退学させられた人もいたことや、勤務先に報告されて、免職になった（特に教員は）人もいることを聞いていたことを思い出した。それなのに……。
あのときから、もう三日も過ぎている。上司に報告すべきだったのではないか……。いまごろ気づいても遅い。あの女性の名前も学生番号も、なにも確認していない。
カンニング行為がないよう見ている。これがわたしの仕事だった。見逃しは真面目に試験を受ける学生から見れば、不公平きわまりない。
当時、通信教育を実施している大学は、六大学あった。
学生たちがいってるのを耳にしたことであるが、大学によってはレポートの提出だけで（科目によるだろうが）単位を認定してくれるところがあるという。

また、試験に、テキストを持ち込んでもいいところもあるらしい。

わたしの勤務する大学では考えられないことである。

また、特に厳しいといわれている大学は、二大学あるという。その二大学の中にわたしの勤務する大学が入っているという。名誉なことであるが、いまのわたしには心の痛いことである。

時間がたつにつれて、カンニングの見逃しは二重・三重にも自分が不正行為をしているように思われてきた。

あの女性が自責の念から、申し出をしたらどういうことになるだろう。結果的にわたしが見逃しているということが、はっきりする。

こう考えると……、次第に心に重くのしかかってきた。

当時、東京、神奈川、千葉。それに愛知県などは、小学校の教員免許を持ってる人が足りなくて、中学校や高校教諭の免許を持っている人を、小学校の助教諭として採用し、一定の期間に小学校教諭の二級免許を取ることで、本採用になるというところがあった。

なかでも愛知県は、期限付き採用の助教諭を、県からの委託生として集団で入学させていた。

大学では教授が県の方へ出張し、講義をしたり、科目試験を実施していた。

わたしも試験係として、配送係の人たちと車に大量のテキストを積んで、出張したことがある。

期限付きの助教諭は、生活がかかっているだけに、巧妙なことをするので、気をつけてほしいとまでいわれていたのだった。

試験係の仕事は、全国の主要都市や離島など行われる科目試験（単位習得試験）の問題を担当教授への依頼から始まる。その問題を収集する。依頼も収集も手落ちがないよう厳しいチェックの中で行われる。

収集した問題は、A群（９：００～１０：３０）・B群（１０：４０～１２：３０）・C群（１：３０～３：００）に分け、科目番号順に三枚の問題用紙に編集し（当時の開講科目は２５０を超えていた）、大学内の印刷部に依頼する。

試験期日は年間計画ですでに決まっているので、問題の依頼も印刷の終了も期限付きの日程の中で進行する。

問題の印刷当日は、試験係全員が印刷部に行き、試験地毎の封筒（あらかじめ封筒に試験地と掌握した受験者数が書いてある）部数も必ずチェックして封筒に入れ、その場で封をする。

また、印刷部での「試し刷り」の印刷物等は必ず持ち帰って、すぐ焼却処分する。

封筒に入った問題は、鍵つきのロッカーに保管される。

というように、試験問題の取り扱いは、厳正にされている。

科目試験が終了し、試験監督の出張者の帰りを待って、解答用紙を受領など、厳しいチェックの中でやっている。また、離島などは試験監督を依頼するので、郵送されてくるのを待つ。

全試験地から（郵送分も含めて）収集できたところで、解答用紙を科目別に分け、確認してから、担当教授に採点を依頼する。研究室に行って手渡すものや、書留速達便で郵送するものもある。また、他大学の教授に依頼するものもある。どれもチェック、チェックの連続である。

採点後の答案も必ず枚数と、担当教授をチェックする。採点後は、合否を受験票に記載した後、記帳係にまわす。

記帳が終わって受験票が試験係に戻ると、受験者に合否通知票を送付する。

これが試験係の一連の仕事の内容である。

科目試験は、地方の主要都市では年に三回ほどある。また離島では、受講者数にもよるが、年に一、二度は実施している。このほか大学では毎月科目試験がある。

事務の仕事は手違いやミスがないように、厳格にやるにつれて、わたしのカンニング見逃しの、罪の意識が次第に強くなってきて、ついには、仕事を続けていくことに、耐えられなくなってきた。

できれば東京を離れて、できるだけ遠くに行きたかった。

でも、なにをするかは思い当たらない。

教員の免許を持っていたので、採用試験を受けようと思った。それで職場に内緒で、北海道の試験を東京会場で受けた。

三月いっぱいで通信教育部の勤めを辞めた。

上司や同僚たちから、やめて何をするのかいろいろ訊かれたが、何もいえなかった。

ここに来たことも、目立たないところでひっそり暮らしたいと思った。

一学期も終わりになって、教員になったことを前の職場の上司や友人たちに知らせた。

「そんな僻地にいるなら帰ってきなさい、どうしても教員がしたいのなら、学院には幼稚園から、高校まであるのだから、どこにでも好きなところに入れてやるから、帰ってきなさい」

事務長の手紙には、こんなことが書かれていた。学院には戻ろうとは思わなかった。帰っても、罪の意識は癒されることはない。

それから一週間ほどして、孝男が学校に来なくなった。そのわけを姉に聞くと、

「校長先生と、二人だけなら、学校に行きたくない。みんなと一緒に勉強したい」

と姉がいう。

そこで、全校児童八人を教えることになった。

ところが、十月の中頃になると、こんどは姉妹弟の三人が、そろって学校に来なくなった。どうしたのかと思っていたが、三日もたってしまった。
子どもたちに聞いても、わからないので校長にいった。
「いって見てきます」
「そうしてくれないか。家族みんな風邪でも引いたのかな」
なんて、呑気なことを二人でいっていた。場所は春の家庭訪問でわかっていた。

道々、前のことを思い出していた。
三人の家は、山の中腹の林を抜けると、開けた土地があって、牧場で牛が放牧されていた。あの時は牛が二十頭ほどいて、のんびり草を食んでいた。
家に行くには、広い牧場の半分ぐらいを遠回りしなくてはならないので、柵をくぐって牧場を横切ろうとしたのだったが、半分ぐらい進むと牛が侵入者と思ったのか、近寄ってきた。初めはゆっくりとした歩みだったのに速足になってきた。
進むにつれて、牛が増してくる。怖くなって早足になる。
遠くにいた牛たちも集まってきた。怖くなって走ると、牛たちも走る。どんどん迫ってくる。
さっきまで柵にもたれて見ていた子どもたちは、わたしの慌てぶりに手を振ってはしゃいでいる。こっちの気も知らないで。
とうとう「助けてー」と、叫んでしまった。
ようやく柵の下を潜り出て、ほっとしたものの、子どもたちの笑いが収まらない。
ところが、その牛たちが見えない。一頭もいない。ひっそりと静まりかえっている。
どうしたというのだろう。家に近づくと、玄関にはバッテン印に、板が打ち付けていた。
家の中も見えないように、隙間なく板を打ち付けてあった。
聞いてみるにしても、近所には家もない。これは、ただごとではない。
急いで帰って、校長に報告した。
「夜逃げしたんだわ」
校長は落ち着いている。
「えっ、夜逃げですか……」
そうしなくてはならないようなことがあったのだろうか。
「あちこちに空き家、あるだろ。あれがみんな、夜逃げだといわれている」
「いまの時代、どこに逃げても、すぐわかってしまいますよね」
「それでも、そうしなくちゃならない。ここの人は、みんな借金抱えて暮らしてる」
「どこから借りてるんですか」
「国だよ」
「国ですか……」

「ここに入植させたのは国だ。ほとんどの住人は、戦後サハリンから入植したそうだ。ここは十月の末には雪が降り始めるし、五月の連休のときまで雪がある。雪の量は半端じゃない。寒い期間が長いから、作物は育たない。それで、多額の借金をして、農作物から酪農に切り替えたそうだ。でも、いくら牛乳を搾っても、冬の間、車が通らない。これでは……」

校長の話はここで途切れた。ここまで聞いて、夜逃げの理由がわかるような気がした。

「子供たちの学校のこともあるから、困っていませんかね。山ひとつ越えた滝の沢の方に母方のおじさんとおばあさんがいると、子どもたちがいってましたから。行って聞いてみましょうか」

「行っても、なにもいわないと思うよ。しばらく黙っていた方がいい。そのうちに入ったら学校から、何かいってくるから」

校長は呑気というか、落ち着いているように見える。

三月になっても、なんの連絡もない。

いまの時代、子供が学校に行ってないということは考えにくいから、きっと学校に事情を話して、しばらくは書類の請求もしないでいるのだろう。

作物の不作と借金にがんじがらめの暮らしの中で、三人の子どもたちの将来のことを考えたことだろう。

ここにいては、子どもたちはどうなるのだろう。なん度もなん度も考えた結論は、夜逃げだったに違いない。でも、これは間違いなく不正行為になる。

借金は、子たちにはなんの責任もない。飼っていた牛を売り、家財を運び、戸や玄関に板を打ちつけ、誰にも気づかれないように、去っていった。

姉の直美さんは、来年は中学生だ。家から、中学校に通うには、一度小学校まで出て、そこから中学校までは下り道だが、二キロメートルある。

小学校から中学校までは、雪のないときは車で行くこともできるが、雪が降ってからは徒歩である。雪の時期は長い。どう考えても子どものひとり歩きは危険すぎる。

きっと塚本さんは、そんなことも考えて、やむなく決断したのだろう。

雪のときは、いつだってお父さんが、学校から家まで馬ソリを往復させて道を固めていたという。

子どもたちは毎日のように

「直美ちゃんは、どうしてるかな」

「雅美ちゃんは……」

「孝男は……」

などといっている。

みんなにとっても、さよならをしなかったことが、気になっているようだ。

あの三人の子どもたちは、いまどうしているだろうか。

もう、いなくなってから二か月がたつ。転校先の学校から、なにか連絡があってもよさそうなのに、それもない。まだ学校に行っていないということは考えらえられない。

おそらく、校長のいうように、

「親から『しばらくは前の学校に連絡をしないで』」

と、頼まれているのだろう。

ここの暮らしより知らない、あの子たちに友達はできただろうか。学校の大きさや、子どもたちの多さに、戸惑っているに違いない。心に傷が残らなければと願うだけである。

人は、今がうまくいっていないと、どうしても過ぎ去ったことに、心が向いてしまう。

あの時、ああしておけばよかったとか、あのことさえなかったら、こうはなっていなかったと、あれこれと考えてしまうことが多い。

嫌なことは忘れて、未来に向かって、精一杯暮らしていってほしいと願う。

ここまできて、はたと気づいたことがある。

これは、逃げてきた自分がいえることではないと。

あの子たちのことを思っているうちに、わたしの心にくすぶっていた、もやもやしたものが、動き始めたような気がする。

いまの自分は、過去の考えや行いの結果として、ここにいるのは確かなことだ。自分こそ、過ぎたことは早く、切りをつけなくてはならない。

それを、あの子たちに気づかせてもらったような気がする。

そういう意味で、ここでの生活はわずか一年だったが、意味があるような気がする。

あの子たちがいなくなって、児童数が五人になった。来年の三月には六年生の二人が卒業するので、子どもは三人になる。それで早々と廃校が決まった。

残った三人の子どもたちは、四月には四キロメートル下の学校へ行くことになった。

通学については、村で考えてくれるらしいので安心したと、校長はいっていた。

新年度のわたしは、新しい気持ちになって任地に向かうことができそうだ。

終わり

文芸評論　佳作

啄木の娘・石川京子の診断書

水関　清

第一節　はじめに

石川啄木の長女・京子（戸籍名は京）が誕生したのは、明治三九（一九〇六）年一二月二九日のことであった。翌一二月三〇日の日記には、以下のように綴られている（「明治三九年　渋民日記　八十日間の記」）。なお、文中の「トキ」とは「堀合（ほりあい）トキ」のこと、啄木の妻・節子の母親である。

「朝電報来る　イマブジオミナヲウム○トキ（二十九日午后三時四十分発）」

「予はこの電報を握つて臥床の中より躍り起きぬ。ああ盛岡なるせつ子、こひしきせつ子が、無事女の児――可愛き京子を生み落したるなり。予が「若きお父さん」となりたるなり。天地に充つるは愛なり。

予は此日の心地を、いかなる語を以ても表はす事能はず。嬉しさに立つても臥ても居られぬ様なりき。心の底がうすから痒（か）ゆき様なりき。喜びの知らせのハガキ十五枚かきぬ。

ああ明治三九年十二月三十日、石川啄木は京子の父となりぬ。」

さらに、三月五日の日記には、こうある（「明治四十丁未歳日誌」）。

「午后四時、せつ子と京ちやんとは、母者人に伴はれて盛岡から帰つて来た。妻の顔を見ぬこと百余日、京子生れて六十余日。今初めて我児を抱いた此身の心はどうであらうか。二十二歳の春三月五日、父上が家出された其日に、予は生れて初めて、父の心といふものを知った。

この可愛さつたらない。皆はお父さんに似て居るといふ。美事に肥つた、クリクリシタ其さま。喰ひつきたい程可愛いとは此事であらう。」

一見すると、新米の父親として実際に京子を抱いた喜びの大きさが目に付くが、その喜びに並べて、自らの父親である一禎が、一家の生活苦のために家出した重大事を書くという感覚にも驚く。それほどの生活苦の中で、新しく授かった娘をどう育てていくのか、という一家の長としての責任の重さに、喜び半分の中で、気を引き締めそうなものだが、啄木の場合はそうではない。その要因を探るために、ここまでの経歴について小括しておきたい。

明治一九（一八八六）年二月二〇日、僧侶の父と高齢出産の母の間の第三子、そしてはじめての男の子として生まれた石川啄木（当時は石川一）は、両親の溺愛と二人の姉の献身を受けて、寺の坊ちゃんとして何不自由なく育つ中で、幼弱性と総括される、依存的・自己中心的・観念的な生活傾向を深めていった。一方で、明治二八（一八九五）年に入学した盛岡高等小学校、および明治三一（一八九八）年に入学した盛岡中学校での成績は優秀で、提示された課題に取り組む際の徹底性や欲求の高さなどから、神経質者としての性格傾向を合わせ持っていた。盛岡中学校の自由な校風のなかで、石川一の個性は花開いて行った。中学三年生を終えようとする頃、高山樗牛の「文明批評家としての文学者」を読んで「天才」という観念に魅かれ、四年生に進級後は、新詩社の機関紙『明星』に出会って耽読、文学への傾斜をはじめた。明治三五（一九〇二）年・満一六歳の夏には、三年来の恋人であった堀合節子との恋が成就し、ついに一〇月末には中学を退学してしまった。樗牛のいう「大詩人」になる夢をいだいて、直ぐに上京するも、あえなく挫折して渋民に戻り、父・一禎のもとで再起を期した。節子との逢瀬に触発されて書いた五編の詩文が、雑誌「明星」の一二月号に「愁調」と題して掲載され（筆名・石川啄木）、自らの詩的天才を自任する出来事となった。これに勢いを得て明治三七（一九〇三）年一月に節子との婚約成立後に、父・一禎から、住職罷免（失業）が近いことを知らされた啄木は、「詩的天才」らしく、生活資金を得ようとして、いっそう詩作に励むという道を選んだ。社会に出て働くことで生活基盤を築く、ということにはならなかったのである。

京子誕生後の段階でも、本来なら一人の社会人として、自分が置かれている状況をありのままに捉え、自らの責任を果たすためになすべきことを総合的に判断し、着手可能なものから取り組んでいく中で、家庭生活を維持していくことに励むことになりそうなものだが、そうはならず、啄木の独善的な生活態度は、家族全体に影を落としていくことになる。

第二節　明治四一（一九〇八）年までの京子

渋民尋常高等小学校を免職となった啄木が函館の短歌結社・苜宿社の同人たちとの間で親交を結び、離散していた家族を呼び寄せて函館で一家を構えたのは、京子が満七ケ月の時のことであった。啄木は、それから北海道を漂泊した後、「文学的運命を極度まで試験する」決心のもとで上京した、明治四一（一九〇八）年（京子・満二歳）までの出来事を、父・啄木と母・節子の動向を織り交ぜつつ、以下にその概略を示してみたい。

明治四〇（一九〇七）年四月二二日、父・啄木が渋民尋常高等小学校を免職となったことにともない、五月四日、母・節子とともに盛岡の実家へ。七月七日、節子に連れられて函館着、啄木とともに青柳町一八の借家へ。八月二五日の函館大火の後、九月一三日、啄木は札幌へ。九月一六日、小樽の山本千三郎（啄木の

姉・トラの婚家）宅へ。一〇月二日、小樽区花園町一四・西沢善太郎方に間借り。一一月六日、小樽区花園町畑一四の借家（家主・秋野音次郎）へ転居。一二月一二日、啄木、勤務先の『小樽日報』を退社。

明治四一（一九〇八）年一月一九日、啄木、小樽を離れ、『釧路新聞』に就職するために釧路へ。一月二七日、小樽区花園町一四の星川丑七方に間借り。四月五日、啄木、『釧路新聞』を退社し、四月七日函館へ。四月一九日小樽発、四月二〇日函館着、栄町二三三鈴木弥吉宅へ。四月二四日、啄木は、「文学的運命を極度まで試験する決心」にて函館から横浜を経由して、四月二八日千駄ヶ谷の新詩社へ。五月四日、本郷区菊坂の赤心館に下宿。九月六日、故郷の先輩・金田一京助の厚意により、本郷区森川の蓋平館別荘に移る。一〇月一六日、節子、函館区立宝尋常高等小学校代用教員。

啄木は、明治四一（一九〇八）年四月に上京した後も、函館に来て親交を深めた宮崎大四郎（郁雨）や、節子からの音信のおかげで、京子の動静についてきめ細かく知ることが出来た。結果的に啄木にとって最後の上京となった、明治四一年四月以降の出来事を綴った日記の中に、「京子」の文字が初めて現れるのは、五月二四日のことであった（「明治四十一年日誌　其二」から要所抜粋、ゴシック・筆者）。

「起きると宮崎君から至急といふ手紙。ああ。京子が熱が出るので医者に見せたら、奥歯が生えるのだと云つたと云ふ事は、一昨日の手紙にもあつたが、何としてもよくないので大条といふ別の医者に見せると、初期では大分重いのださうな。昏睡！ ああ、予の頭は氷つた様な気がした。予の頭は氷を浴びせられた！　京子の昏睡！　然し、打電しようと云つたのを、医者が其必要がないと打消したと云ふのと、此手紙を書いた朝には、昏睡からさめて、物を言つたと云ふので、漸く心を安めた。せつ子の心と友の情だけでも屹度癒る。さうだ、友は〝屹度なほす〟と書いてよこした。ああ二百里外の父は！　不取敢せつ子へ手紙をかいた。そしてかの断片と手紙を持つて金田一君へ行つた。色々話して、京子は決して死なぬと心をきめた。決して死なぬと信じた！！！」

明治四一年と近接した時期に発刊され、現存している医師名簿として、「函館事業者便覧」（明治二七（一八九四）年一一月発行）が知られている。そこには、五一名の医師が掲載されているが、その中に、内外科　大条龍太郎（相生町七）の名がみえる。当時の京子の住まいは栄町。相生町までは、現在の交通事情ならすぐの場所であるが、当時は馬車鉄道時代の時代。昏睡が疑われる状態の京子のところまでは、往診があったのだろうか。

五月二五日には続報がある。「帰つたら宮崎君から葉書。二三日には京子大分よくて、乳は充分のむ」

さらに、五月二六日。「せつ子からの手紙、京子は余程よく、二四日夕刻医者が来た時、軽いヂフテリヤだと云つて血清注射

をやつたとの事。」

四月の上京以来、啄木は小説創作に挑んでいた。ゴーリキーを手本とした「菊池君」、田山花袋を手本に「病院の窓」、国木田独歩を念頭に置いて書いた「二筋の血」、そして、創作と思われる「天鵞絨」であるが、いずれも売り込みに失敗した。その一方で、六月中旬から下旬にかけて、植木貞子との関係が深まり、筑紫の歌人菅原芳子との文通にも熱が入っていた。そこに加わった、京子が病気という報せに心を乱し、その回復という吉報に安堵する中で、勃然として歌興が湧き起って、「頭がすっかり歌にな」り、「何を見ても何を聞いても皆歌だ」という状態になって、奔流してくる短歌に、苦悩をまぎらす。六月二三日夜から二五日までの間に歌稿ノート「暇ナ時」に書きつけられた二五〇首ほどの歌は、翌月の「明星」七月号に「石破集」と題して載ることになる。原稿が売れない以上、下宿代の督促はますます急を告げ、啄木は、思い屈することしばしばとなる。

七月七日の日記には、こうある。

「十二時に目をさました。枕辺に三通の消息。

その一つは、京子がどうも優れぬので、小児科専門の藤野といふ医師に見せると、心臓腸胃が悪くなつてる、が、長くかかるけれども危険はないとの妻からの葉書。その二は、岩崎君からの初めての手紙。その此頃の心境、なつかしくこれも繰返した。その三は、筑紫なる菅原よし子からの長いたより。いろいろとその身の上の事から歌の事から書いてある。兄弟もなき商家の一人娘、詩歌は幼き時から好きであつたと。若し兄弟のあらば早速東京に出て門弟になりたいと。」

冒頭にある「小児科専門の藤野といふ医師」の名も、先に示した「函館事業者便覧」の中に、藤野常治としてみえる。住所は恵美須町七となっている。

その後、夕方に金田一を訪ね、自室に戻っての述懐が、以下のようなものである。

「二階に来ると、どうしたのか芳子の事のみ胸に往来する。小説の稿もつぎたくない。本を読んでも五六行で妄想になる。遂にペンを取つて消息を認めた。ペンを置いた時は二時。

ああ、奇妙な事もあるものだ。今夜の自分は殆んど恋をする人の様な落付かぬ心地であつた。無論これは今夜だけの事で、この心地は永くつづかぬであらうけれども、我ながら妙な夜ではあつた。……散文の自由な国土にゐると、時として詩歌の故さとが恋しくなる。あまりに現実の圧迫をうけてゐる自分が、今、夢にだも逢つた事のない人を思つたのは、矢張自分のロマンチツクだ。歌を作るのと同じ事だ。」

昼頃に起き出して、娘の病状にちょっとドキッとしたものの、五月の時のように深刻な状況にないとみるや、小説も書かず、弟子入り志願の女性歌人・菅原芳子への手紙を、深夜までかかって書きあげたのである。月末までに払えなかった下宿代の督促を「現実の圧迫」、売れない小説を書くことを「散文の自由な国土」、六月末の短歌の奔流を「詩歌の故さと」という布石を打

ったうえで、芳子への想いを「自分のロマンチツク」と総括し、それを、「歌を作るのと同じ」とまで言い切っているのである。「石破集」のもととなった短歌の奔流によって啄木は、短歌の韻律を自在に操れる自信を得たことに加えて、小説が書けないことから生じるストレスをしばし逸らすことにも成功するという、貴重な体験をしたのであろうが、最も大切なことは、妻子らを函館に残して上京してきた時の初志である「(自らの文学的運命を極めることと見定めた) 小説を書くことによって、生活の糧となる資金を得ること」のはずである。それがいまなお達成されないという現実 (散文の自由な国土) から目をそむけ、妻以外の女性との交流を、六月の短歌の奔流によって得られたカタルシスの快さと同質のものであると強弁しているのである。

この危うさは、翌・七月八日の日記で一層明らかになる。

「九時並木君に起された。話題は凡て女に関した事許り。何故此頃予は恁う女の事ばかり云ふ様になつたかと怪しまれる位である。日のくれるのを待つて金田一君と共に好き歩き。予は九時過まで歩いた。何といふ事もなく気が浮いて、急がしく目をくばつて歩いてると、数しれぬ美しい女、何といふ事もなく、目が眩しい様で、耳が鳴る様で、妙な圧迫が頭の中に起つた。四辺の華やかさを見れば見る程、淋しさが益々深くなる。一寸立つて見廻すと、数限りなき美しき人がゾロゾロと向ふから来る。妙な怒りが体中に伝つた。我ながら唯一人ウロツいてゐる自分が見すぼらしい。絶望と憤怒とが一緒になつて、鋭どく自分を嘲る。」

小説執筆に行きづまり、懸命に逃げ道を探す啄木の姿ばかりが目に付く記載である。日記の中で、次に「京子」の文字が見えるのは、十月十日である。

「十一時頃まで緩りと寝た。頭が瞢乎としてゐる。せつ子から宝小学校へ入つてもよいかと言つて来た。京子は光子に看させて置いて代用教員になり、米炭の料を得んとするのだ。噫！同意の旨を返事した。」

(啄木が仕送りをしてくれないので) 生活費が増高する冬を前に、妻・節子が働きに出たい、という申し出に対する啄木の所感は、「噫！」それだけである。啄木の脳裏にあるのは、自己の文学的・思想的行き詰まりのことばかりで、本来ならその目的であるはずの、家族扶養のための生活基盤の構築は、念頭から消え去ったかのような表現である。以降の日記には、京子の消息についての記載は見られなくなる。

第三節　父・啄木が逝去するまでの京子

啄木が逝去したのは、京子が満五歳三ケ月のことである。前節以降の出来事についてまとめてみたい。

明治四二（一九〇九）年三月一日、父・啄木、東京朝日新聞社入社。六月二日、母・節子、函館区立宝尋常高等小学校退職。啄木の就職の報を聞いた、啄木の母・カツの強い願いで、一家は東京で同居することになり、六月七日、函館発、六月一六日、本郷

区本郷弓町の新井コウ宅（喜之床）に間借り。一〇月二日、母・節子に連れられ盛岡の母の実家へ。一〇月二六日、喜之床へ戻る。以降、父・啄木の執筆活動は盛んになる。

明治四三（一九一〇）年九月一五日、朝日新聞紙上に「朝日歌壇」新設され、父・啄木、選者就任。一〇月四日、弟・真一誕生、「一〇月二十七日夜十二時過ぐる数分」死去。一二月一日、父・啄木、歌集『一握の砂』発刊。

明治四四（一九一一）年二月四日、父・啄木、東大病院青山内科入院。三月一五日午後退院し、自宅療養に移行。六月初め、母・節子の実家との間で確執起こる。八月七日、小石川区久堅町七四に転居。九月、父・啄木、親友・宮崎郁雨と義絶。

明治四五（一九一二）年三月七日、祖母・カツ死去。四月一三日、父・啄木死去。

ここまで、五年あまりの間に、京子は計九回もの転居を強いられている。その原因をつくったのは、啄木その人であったが、その中身がよくない。

この時期の啄木は、自己の文学的・思想的行き詰まりの憂さを晴らすために、釧路では耽溺的生活を送る一方で、京子や母・カツの面倒はもちろんのこと、生活の苦労を妻の肩に背負わせた。妻子と老母を宮崎大四郎（郁雨）に預けて上京した後も、文学上の苦悩から逃避するために仕送りもせず、自分は浅草で放蕩。郁雨に連れられて妻子老母が上京すれば、邪魔者扱い。妻の家出という衝撃を受けて、ようやく生活の基盤としての仕事の大切さに目覚めたが、金銭感覚は変わらず、恒常的な給与の前借りと、不足分の質屋での捻出を任される、妻・節子の負担は重い。念願の歌集『一握の砂』発刊後は、それまでの無理がたたって、慢性腹膜炎に倒れてしまった。

京子が父・啄木と同居していた期間は、ここまでで二年半ほどに過ぎないが、明治四四（一九一一）年の春先から一年余の期間には、自宅で療養する啄木との間で、共有する時間が増えていったようである。ものごころのついた年齢での京子との同居は、啄木のほうでも、多忙なそれまでの毎日を離れて、自宅で親としてわが子・京子と接する機会が訪れた時期であった。啄木は、博文館の「文章世界」からの注文に応えて、六月一二日から一五日までの間に、京子とともに過ごした日々を題材として、十首詠んだ。そしてそれらに「五歳の子」という総題を付して、同誌の明治四四年七月号に掲載した（のちに、『悲しき玩具』の、一五三首めから一六二首めの間にも収載された。便宜的に冒頭からの歌順を、歌頭に附記する。■は、語頭の一字下げ表記の箇所を示す）。

153　病みて四月――／■その間にも、猶、目に見えて、／■わが子の背丈のびしかなしみ。

154　すこやかに、／背丈のびゆく子を見つつ、／■われの日毎にさびしきは何ぞ。

155　まくら辺に子を坐らせて、／まじまじとその顔を見れば、

／■逃げてゆきしかな。

156　いつも、子を／■うるさきものと思ひゐし間に、／その子、五歳になれり。

157　その親にも、／■親の親にも似るなかれ――／かく汝が父は思へるぞ、子よ。

158　かなしきは、／■（われもしかりき）／■叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

159　「労働者」「革命」などといふ言葉を／■聞きおぼえたる／■五歳の子かな。

160　時として、／■あらん限りの声を出し、／唱歌をうたふ子をほめてみる。

161　■何思ひけむ――／玩具（おもちゃ）をすてて、おとなしく、／わが側に来て子の坐りたる。

162　お菓子貰ふ時も忘れて、／■二階より／■町の往来を眺むる子かな。

これらの十首を通覧してみると、奇妙な特徴のあることに気づく。153から157には「子」、158には「児」、そして159から162には「子」と、十首すべてに「子」または「児」の文字が詠み込まれているのである。「子」が含まれた最初の五首には、背丈の伸び・恥じらいという、子どもの姿かたちや所作などによってその成長してゆく姿を再認識する一方で、最後の四首には、（聞き覚えの）言葉・唱歌・玩具・お菓子という、子どもなりの世界の中のありふれた道具立てを介在させて、その成長のありさまを定着させているのである。これらにはさまれた一首（158）のみに「児」の字が用いられているのは、何故だろうか。

一般的に、「子」は「年齢を特定しない親子関係における子」の意味で用いられるのに対して、「児」は「幼児期から児童期の年代に当たる幼い子供」だけを意味しているとされる。啄木がこの一首にだけ「児」の字を採用し、かつ「児の心」という表現にした理由について考えてみたい。啄木の回想によれば京子は、「毎日隣近所へ遊びに行っては喧嘩をし……」、家に帰ってきてからも、啄木に「今日も泣いたナ」と聞かれると、「泣かないと強情をは」るような子であったという。「叱れども、打てども」という親の行動を誘った直接の原因は定かではないが、そういう目に遭っても、ものごころがついた京子が、性根を据えて「泣かぬ」「児」であることを発見して、そ「の心」を詠い込んだ一首なのである。そのような心を、（われ＝啄木）自身が備えており、娘も自分も同じなのだと啄木が認識するということは、「かなし」い（＝哀（かな）しくて、愛（かな）しい）ことなのである。

この158に呼応するようにして、「悲しき玩具」にはもうひとつ目を引く歌・177がある。

177　五歳（いつつ）になる子に、何故ともなく、／ソニヤといふ露西亜名をつけて、／■呼びてはよろこぶ。

ソニヤとは、ロシア皇帝アレクサンドル二世暗殺を指揮した

とされるソフィア・リヴォーヴナ・ペロフスカヤ（一八五三―一八八一）の愛称であり、啄木が自らの短歌の中で、ロシアの女性革命家に擬して、京子に「ソニア」と呼びかけたものである。これは、「毎日隣近所へ遊びに行つては喧嘩をして泣かされても、泣かないと強情をはる」京子の姿を、文学への志なかばで倒れようとしている、自らの現在の姿に重ね合わせて苦笑する、父親としての啄木の眼差しそのものである。その脳裏には、京子誕生の喜びにひたったのも束の間、故郷の渋民村を離れ、食を需めて北海道を回り、小説家を目指して上京するも果たせず、新聞社勤めの中で歌を詠み、渾身の力を込めて初めての歌集『一握の砂』を上梓したものの、慢性腹膜炎に倒れて療養に至った、詠唱当時までの自らの姿がありありと甦っていたはずである。

さらに前掲の157「その親にも、・・・・・」と並べて鑑賞すると、自らの文学立志を目指して奮闘した啄木の日々と、いたずら盛りで気の強い娘・京子の成長の日々とは、合わせ鏡のようにして、啄木の人生を照らし出していたことがよく分かる。あわせて、健やかに開かれた未来を感じさせる側面をも併せ持つ京子の将来にまで思いを馳せれば、「父親である自分にそっくりなところのある（強情っぱりの）京子のことだから、素直にいうことを聞かないだろうが、かといって祖父・一禎のように周囲の状況次第で変幻自在な生き方をしてもらっても、ちょっと・・・・・」という、啄木なりのユーモアを込めた二首なのである。

第四節　母・節子の逝去から、須見正雄氏と結婚するまでの京子

明治四五（一九一二）年五月二日、母・節子と千葉県北条町へ。六月一四日、妹・房江誕生。

大正元（一九一二）年八月一五日、北条町発。九月四日、母と妹とともに函館の青柳町三二へ転居。

大正二（一九一三）年一月、母の函館・豊川病院入院にともなって、祖父・堀合忠操のもとに、妹とともに引き取られる。四月、弥生尋常小学校入学。五月五日、母・節子死去。

大正三（一九一四）年一二月二八日付け、富岡町六の祖父・堀合忠操方寄留の届け出。

大正八（一九一九）年三月小学校卒業（入学後の学区変更で函館女子小学校と推測）。四月函館女子高等小学校入学。一二月一一日、祖母・堀合トキ死去。

大正九（一九二〇）年三月、函館女子高等小学校一年修了。四月、遺愛女学校入学。一年A組。八月、新潮社から、父・啄木の遺稿集として、（1）小説（2）詩歌（3）書簡・感想とを合わせた三巻組の構成の『啄木全集』が出版され、好調な売れ行きを示す。年度末の成績は平均八五点、一一〇名中の一四番。

大正一〇（一九二一）年、二年A組。

大正一一（一九二二）年、三年B組。八月、節子の妹・ろく子と、宮崎郁雨の娘・孝子とともに盛岡訪問。さらに啄木研究家

吉田孤羊の案内で、北上川のほとりの啄木歌碑や宝徳寺などを見学。この頃、堀合家に保管されていた啄木日記数冊を読みふけるなど、父・啄木への関心を深める。年度末の成績は平均七六点。

大正一二（一九二三）年、四年Ａ組。四月二四日、その後に夫となる須見正雄氏と初デート。年度末の成績は平均七三点。

大正一三（一九二四）年、五年Ａ組。五月から休学。

大正一四（一九二五）年、四月復学、五年Ｂ組。六月中途退学。

大正一五（一九二六）年四月一七日、須見正雄氏と結婚し、須見氏は石川姓を名乗る。

啄木の死後、当時妊娠中だった母・節子は、五歳の京子を抱えて身の振り方に悩んだ。存命であった石川家の親族は、義父・一禎と義妹・光子の二人だったが、一禎は義姉夫婦宅に寄寓中、光子は学生の身であった。節子の実家である堀合家とは、前年に啄木が義絶していたため、節子は、石川・堀合両家に頼ることができない、という苦衷の中にあったのである。

進退窮まった節子に手を差しのべたのは、房州の北条で〝自給宣教師〟として、キリスト教伝道と結核療養者の施療活動を行っているコルバン医師の夫人であった（粕谷常吉編『房州に光を掲げた人々』）。

明治四五（一九一二）年五月二日、妊娠八カ月の節子は、五歳四ケ月の京子をつれて、療養のために房州北条へ行く。節子親子が間借りしたのは、片山カノ宅の離れだった。場所は、現在の「館山シーサイドホテル」の真裏方向にあり、敷地は母屋も入れて約五〇〇坪。海岸に近く、周囲は松林に囲まれており、空気もよく、病身の節子にとっては恵まれた環境であった。コルバン夫人は、節子ら母子に牛乳・スープ・医薬品を供与し、片山宅の部屋代まで工面したという。

片山カノの孫にあたる、成瀬政男の回想によれば、「・・ときどき、京子ちゃんをつれ勉強のあいまに海岸に遊びにいった。門を出て、畑のあいだにある細い道をとおっていくと、太い松のある林のなかにでる。」・・松林を過ぎ、波打ち際に出ると、京子ちゃんは小石を拾い集めたり、波の子を拾ったり、防風の根をほったりして遊ぶ。帰ろうと言うと京子ちゃんはあばれだす。・・　」とあり、前節でふれた啄木の回想通り、京子はやんちゃだったようだ（『石川啄木の遺族につながる思い出』）。

六月一四日、節子は、ここ北条で女の子を授かった。房江と名づけられた女児はすくすく育ち、周囲のすすめでお宮参りをすることになった。その模様は、「・・八幡では子供が生まれて三十日をすぎ、背中におぶうことができるようになると、氏神さまにお宮まいりをする習慣があった。・・私は背に房江ちゃんをおぶわせられた。節子夫人は京子ちゃんの手をとり、しずかに足をはこぶ。祖母はご供物を風呂敷づつみにいれ、私の背の房江ちゃんを見守りながら、ともに歩いていった。ゆくさきは通

称、八幡の八幡さまといわれるお宮である。・・」(『石川啄木の遺族につながる思い出』)

しかし、北条の海岸で、産後の病躯を養う暮らしは、コルバン夫妻の軽井沢への転勤によって断ち切られることになり、節子ら三人は、函館の実家に頼る以外の道はなくなった。八月一六日に北条を発ち、東京を経て盛岡に二週間ほど滞在後の九月四日、函館に着いた。生前の啄木が一方的に義絶を通告していたという経過があるため、堀合家では、三人を温かく迎え入れてくれた。

函館で忠操は、樺太建網漁業水産組合連合会事務所にある役宅に住み込んでいた。事務所が狭いため、三人は青柳町の借家に落ち着いたが、その年末に節子は豊川病院に入院し、大正二(一九一三)年五月五日逝去した。京子、房江の姉妹は、忠操の一家とともに育てられることになった。

大正一一(一九二二)年、女学校三年の時、盛岡や渋民村を訪問し、啄木への関心を深めていった。

大正一二(一九二三)年、女学校四年生の時、京子の住む事務所役宅の向かい側にある、北海タイムス社の記者・須見正雄を知り、一途に恋い慕い、祖父・忠操に結婚の許可を迫った。啄木を熱愛した節子の記憶がなお鮮やかな忠操が、京子のことで受けた衝撃と困惑は痛ましいほどであった。その際、忠操が、故・啄木の父である石川一禎に送った、京子の状況を報告する手紙の中で、京子を評して、「学業には極めて熱心」だが「女子の最も大切なる裁縫、洗濯、炊事清掃」を嫌い、「閑さへあれば寝転んで新聞雑誌を」読んでいる「空骨病み」と嘆いている。遺愛女学校入学時には平均八五点だった成績も、四年時には七三点と下降傾向になっていた。

大正一四(一九二四)年に五年生に進級した京子は、五月から休学し、翌年四月に五年生として復学したものの、六月には遺愛女学校を退学してしまった。順調なら、卒業まで九ヶ月という時期であるが、勉学継続と須見氏との結婚の間で揺れ動いた末の決断だったことだろう。

このような京子の恋愛模様を見て、直ちに連想されるのは、父・啄木が、盛岡中学を卒業する半年前の、五年生の秋に退学したことである。啄木自身は、自らの文学的才能をもって上京すれば、節子との結婚生活を維持するだけの生活の糧を得ることはさほど困難なことではないと豪語しているが、当時のエリートコースであった盛岡中学を中途で退学した以上、客観的にみて、確たる生計のあてがあったわけではないと思われる。

京子の場合は、一家の世帯主として結婚するわけではなく、事情がやや異なる。須見と結婚したのは、退学の翌年の大正一五(一九二六)年四月一七日のこと、京子が満一九歳の時である。その際に、須見が石川姓を名乗ったことで、忠操の「石川家再興に関しては一日も念頭を離れたることなき」煩悶は、ひとまず解消され、京子夫婦によって石川家は再興されたのである。

遺愛女学校時代に二年先輩だった友人・常野テルは、京子の

没後に、夫・正雄が編集する『呼子と口笛』に、「ソニヤさん左様なら」という一文を寄せている。その中で、京子が女学校一・二年生の時に、「ソニア」という、父・啄木ゆかりのペン・ネームを用いて詠んだ短歌を、のちに京子と正雄と結婚する際、常野に手渡していたという。常野は文中で、京子のペン・ネームについて触れ、「亡きお父さんが好んでソニヤと呼んだからだ。」と記している。

第五節　結婚から逝去するまでの京子

祖父・忠操が念願した石川家の再興は、京子の結婚によってある程度満たされたものと思われる。以降の京子の動向は、正雄のそれと深くかかわるもののため、両者について一体的にまとめていく。

大正一五（一九二六）年四月一七日、結婚した須見氏は、石川正雄を名乗る。四月二九日、蓬莱町五へ転居。六月一三日から、頭痛のため約四〇日間入院。八月中旬、谷地頭九八へ転居。正雄は、不規則な記者生活を送り、帰宅が深夜に及ぶこともしばしばであった。十一月七日頃、妊娠に気付く。

昭和二（一九二七）年二月二〇日、父・啄木方の祖父・一禎死去。四月、正雄は支局長への不満を募らせるなどして、北海タイムス社を退社。四月一二日、長女・晴子誕生（命名は、祖父・忠操）。その後正雄は、函館毎日新聞社に入社。一〇月、春日町四五へ転居。

昭和三（一九二八）年、一月「今月こそはと、つめて生活してもどうしても月末には予算超過（京子・談）」という、「生き生きとした（正雄・談）」生活を送る。

昭和四（一九二九）年一月二二日、長男・玲児誕生（この命名も、祖父・忠操）。正雄、函館からの脱出の前段階として支那行きを考え、この頃から支那語学習を始める。その後、竹内という同伴者を得たことで、行き先をフランスに変更。七月一七日、演劇修行（正雄・談）を目的にフランスへ。

昭和五（一九三〇）年三月、正雄帰国し、東京で吉田孤羊の出迎えを受ける。孤羊は、啄木の研究誌を共同で出すことを提案し、正雄はこれに同意。一七日、正雄、函館に戻る。

正雄の帰国とともに、函館から東京への転居の話が、急展開する。

四月二七日、正雄・京子・晴子・玲児の一家は、京子の妹・房江を連れて上京。京子ら四人は豊島郡高田町大原一五三八へ、体調の思わしくなかった房江は茅ケ崎にあった療養所・南湖院へ。

九月、正雄は啄木研究雑誌『呼子と口笛』を創刊。以降、自宅での編集、印刷所との交渉、販売店との折衝などで、多忙を極める。この頃から、京子は作歌を始める。

一二月五日、当時、臨月であった京子は、午後一一時頃から、『呼子と口笛』新年号の編集に没頭する正雄の傍らで過ごし、一二月六日、午前二時頃に就寝。夜明け頃から、呼吸困難出

現。午前八時頃、医師往診し、処置。軽快することなく、内科医、産科医、助産婦、看護婦らによって、娩出された男児は死産。注射、酸素吸入など行うも症状は緩和されず、午後十時八分、急性肺炎のため死去。一二月一九日、妹・房江死去。

一九三一（昭和六）年四月一三日、立待岬の石川一（はじめ）一族の墓に合葬される。

結婚後の動向について、京子自身が書き残したものには、「京子の歌」と「家庭日記―昭和五年の日記帳より―」のふたつがある。ともに、京子の没後、夫の正雄が遺品整理の過程で見出したものである。さらに京子が死去する前日である一二月五日から、逝去当日の六日までの経過は、正雄が詳しく書き残している（「骨を抱いて―臨終記―」）。これら三点の記事は、一九三一（昭和六）年一月に、石川京子追悼号として刊行された『呼子と口笛』第二巻第一号に一括して収録されている。ほかに、京子没後二九年後の昭和三四（一九五九）年から翌年にかけて正雄は、「思い出による再構成―伊東酔果兄へ―」と題した計八回の連載記事を、雑誌「海峡」の五六号から六四号にかけて発表しているが、その第二回以降は、専ら新婚時代以降の京子との思い出話となっている。

以上のように現存する資料のなかでも、正雄によって、京子が死去するまでの経過をほぼ時系列で書き残された「臨終記」は、医学的観点からの検証にも十分に耐え得るものと考えられる。これをもとに、京子の死因についても検討してみたい。

まず、正雄の記録から、京子の経過をまとめてみたい。深夜二時頃まで和やかに話していた、臨月の二四歳女性が、夜明け頃になって急に呼吸困難を訴え、注射や酸素吸入によっても軽快せず、男児を死産後に、全経過がおよそ一六時間ほどで逝去したこと、およびその死因は急性肺炎とされたことの二点であるが、現代の医学的知識からみると、後者には疑問が残る。肺炎にしては、経過が急すぎるのである。さらに、発熱や咳、痰などといった前駆症状の記載に乏しく、逝去前日の午後一一時頃に子どもを寝かしつけた後にわざわざ起き出してきて、正雄の作業をみたり、雑談をして就寝までの三時間を過ごしているのである。

死因推定のカギは、この急変が起きた時期が妊娠中で、それも臨月だったことにある。そのことを念頭に置きながら、考えてみたい。

妊娠中の女性が急に呼吸困難をきたす疾患に、「羊水塞栓症」という病態がある。これは、母体に流入した羊水によって惹き起こされる、一種のアレルギー反応と考えられており、子宮や肺を中心に急激に血管透過性が亢進して肺水腫の状態になって、呼吸困難が生じる疾患である。ほかに、臨月の女性の状態が急変する疾患としては胎盤早期剥離にも注意しなければならないが、この場合には性器出血や子宮増大による腹痛が前景に立つことが多い。京子の場合には、これらの症状についての記載が

まったくないことから、この疾患は考えづらい。羊水塞栓症は、発症が急速で症状の進展も早いことが多く、現代の整えられた救急医療体制の中にあっても、救命がしばしば困難になる、深刻な病態なのである。ここに謹んで京子のご冥福を祈りたい。

第六節　まとめ

満六歳になるまでに計一一回の転居、そして父との死別。小学校入学後すぐの七歳で、母とも死別。その窮状を救った、祖父・堀合忠操らの献身的な養育のなかで、京子は、持ち前の勝ち気さを秘めた学生生活を送った。そして思春期を迎えた大正時代中期には、「啄木」の知名度が上昇し、その名を誰もが知るようになるなかで、啄木の作品を繰り返し読んでは己のものとしたはずである。

すなわち、自らが肉親として接した記憶に、母・節子から聞かされた物語が加わり、祖父・忠操宅に身を寄せてからは彼らの語りが重ね合わされ、さらに、啄木と親交のあった宮崎郁雨らの語りが啄木像に独特の光をあてた、という多層構造の上を、世間の見る歌人としての啄木観の評価の高まりが覆うという、親族ならではの独特な環境の中で、京子の啄木への理解が深まっていったものと思われる。そのようにして自らの中に、啄木譲りの歌作の才を感じ取って、女学校時代から歌作に馴染んでいったのである。

京子が、本格的に短歌に取り組んだのは、夫である正雄が渡欧中の時期である。なかでも、以下の二首には、啄木の翳が濃厚に感じ取れる。

何がなしふと悲しさの／■せまり來て兒等のむれより／■目をそむけたり

何となきうれひ心にひろごりて／■この二三日／■わが楽しまぬかな

啄木の歌にある「何となく」「何がなしに」といえば、啄木の冴えわたる意識が、日常生活の中から掬い上げた「自分のいのちの一瞬の姿」を題材とした『一握の砂』冒頭の、「我を愛する歌」が直ちに連想される。京子の手による両歌においても、夫が不在時の家庭を、女手一つで守るという「責任ある緊張感」と、それと表裏をなす「やるせなさ」という、複雑に入り組む感情を、歌の形としてきちんと定着させていることのなかに、その努力がうかがわれる。

最後に、母・節子と、啄木の無二の親友のひとりであった宮崎郁雨の歌から、京子の姿をしのんでおきたい（堀合了輔『啄木の妻　節子』より引用）。

京子京子お前の髪は何故かうも厚いのかとてむしりし父よ（節子）

日に幾度、反逆しては母泣かす／あはれ、あはれ汝（なれ）／

啄木の子よ　（郁雨）

選評

和田　裕

今回から小説・評論部門の選評を担当させていただく。書き手の真摯な筆の運びを注意深く読み解きたい。

小説の応募数は六篇。

山本大『寒川②』

〈就職する気などさらさらないのに就職面接を受けてみたり、自分の話に真剣に耳を傾けてくれた恋人を裏切ったり〉と、〈衝動的で、野良猫みたいに自分勝手な生き方〉をしてきたと自問自答する青年の心の揺れ動きを丹念に描いています。面接を受けてきたそのままの格好で山を登り、暗闇の中を下山していくその舞台は寒川地区のある函館山。道すがら出会う人々とのやり取りや、足場の悪い険しい山道で悪戦苦闘する姿からは緊迫感が伝わり読ませる。〈過去をやり直すことなどできない。街へ帰れ〉と老人に突き放されて、アパートで泥のように眠るラストの描写は深く印象に残る。それだけに、題名の付け方や、冒頭の詩の引用にはいささか注文する部分があるが、確かな筆の運びを評価して入選とした。

畠田農『逃げる』

大学の事務職員として試験監督に当たっていた〈私〉は、受験生の不正行為を見逃してしまう。その一件が心の傷となり、〈目立たないところでひっそり暮らしたい〉と考え、雪深い僻地五級の小学校に新任教師として赴任する。その村は農作物の育たない程荒れた土地で、サハリンからの引揚者である住民は止む無く酪農を営んでいるがそれとても簡単にはいかない。ある日、突然、クラスの三人の姉妹弟が登校しなくなる。酪農の仕事に行き詰った末に借金を作り、揚句の〈夜逃げ〉であることを知り、一家の悲惨な姿が、逃げて来た自分と重なっていく描写はしみじみとした情感を誘う。結末の〈過ぎたことは早く切を付けなくてはならない〉という私の決意は些か急いだ感もあるが、深刻な題材を平明な筆致で描いた筆力を評価して佳作とした。

外山聖武『私の家族（うちのひと）』は、語り口が手際よく、ユーモアのあるストーリーの運びには老練な筆さばきを感じる。世相や家族の人間模様にもう少し諧謔を利かせて、物語に深みを出したい。**上原美佳子『永遠のサヨナラ』**はそれぞれの元カレ・元カノの存在を通して、互いの愛の深さと危うさを会話中心に描いて読ませるが、地の文でも心の動きを書き込んでほしい。**水関清『「函館港春夜光景」異聞』**は宮沢賢治が修学旅行生の引率で訪れた当時の函館の様子や、賢治の人となりについて詳しく調べたノンフイクション的作品として、**葛西詠実『霧山（ガスやま）』**は一編の詩的作品として、それぞれ興味をそそるものがあった。

評論は一編。

水関清『啄木の娘・石川京子の診断書』は、彼女を巡る人々の視点から生き方を診断する、という独自な趣向で書かれている。中盤までほぼ父親石川啄木について紙幅を割いているが、幼い京子が発熱したのを診断した医者を推測する資料、困窮する節子親子に手を差し伸べた宣教師コルバン医師夫人たちの対応、成瀬政男の回想する京子の気の強い性格など、多角的に、また丁寧に調べ上げ、彼女の人となりに迫っている点を評価し、佳作とした。

ノンフィクション　入選

『話すように読む』

佐藤　健

「受賞おめでとうございます」

二〇二三年六月中旬、所属のボランティア団体の代表からメールが届き、その三日後に公益財団法人鉄道弘済会北海道支部から『朗読録音奉仕奨励賞』の決定通知書が郵送されて来ました。九月七日に札幌で表彰式が行われることが記載してありました。『奨励賞』は、朗読録音活動を始めて五年以内の者が選考対象です。ほかに、『朗読録音奉仕者』と『校正奉仕者』の表彰があり、それぞれに先輩団員が選考されました。

私の所属するボランティア団体は、『青い鳥朗読奉仕団』(以下「青い鳥」という。)といい、視覚障害者のためのデイジー図書を製作する活動をしています。

ＤＡＩＳＹとはDigital Accessible Information Systemの略で、国際標準規格によるデジタル録音図書です。パソコンを用いて録音、編集されたデータを専用の再生機で聴くことができます。

私が青い鳥に入団したのは、二〇一九年六月のことです。その二か月前、時代が平成から令和に変わろうとしている時でした。本を借りに行った湯川図書室の掲示板に『朗読講座』のポスターを見つけたのです。六〇歳になったら何か社会貢献活動に参加したいと考えていたこともあり、早速申し込みの電話を入れたのでした。

講座は五月と六月の水曜日の全八回、十八時～十九時三〇分で、場所は函館市総合福祉センターです。時間と場所が仕事終わりで帰宅経路の途中だったことも決断の大きな理由でした。講座の受講者は十五人程で、そのうち私を含めた三人が男性でした。

○朗読ボランティア養成講座

第一回（二〇一九年五月八日）

・音訳と朗読の違いについて

講師の先生が最初に言ったのです。

「読み聞かせではなく、音訳の講座です」

聞いた瞬間、私を含めたおそらく全員の頭の上に？マークが浮かんだに違いありません。講師の先生が続けます。

「毎回、勘違いして受講する方がいます」

私もすっかり勘違いして参加した一人でした。『函館野外劇』に参加している私は、読み聞かせの知識が、演技や表現力の向

上に繋がることを期待していたのでした。
初めて聞いた『音訳』とは、文字を音声に変換することでした。であれば『音訳講座』とすべきではないかと思いましたが、音訳では意味が通じず、文章を声に出して読むという意味ではどちらも同じことだと納得したのでした。しかし、音訳と朗読は全く異なるものでした。

・函館視覚障害者図書館について

函館市総合福祉センター（函館市若松町）の一階にある施設で、デイジー図書や点字図書が収蔵されています。青い鳥のほか、『きつつき点訳奉仕団』、『パソコン点訳グループアイネット』の二団体もここを拠点に活動しています。

デイジーデータは、視覚障害者情報総合ネットワーク（サピエ図書館）に登録され、データをダウンロードすることで、全国どこでも利用可能です。著作権法によって、利用は視覚障害者に限られます。

第二回（五月十五日）

・発声、発音

講師の先生が言いました。

「音訳に声の良し悪しは関係ありません」

そして、さらに続けます。

「聞く人によっては、声の好き嫌いはあります。ただ、三分間聞き続ければ、慣れるとも言われていますので安心してください」

声は、演劇や合唱のように大きく口を開ける必要はありませんが、滑舌は大事で、適度な声量と明瞭な発音が必要です。

「パラピリプルペレポロ」

呪文のような言葉を繰り返して、舌の動きを滑らかにしてから読み始めます。

・アクセント、イントネーション

アクセントは、頭高（あたまだか）、中高（なかだか）、尾高（おだか）、平板（へいばん）の四つの型があり、音の高さがどの位置に来るかで決まります。

『頭高』＝箸、赤、亀、春、景色、など

『中高』＝ウグイス、大学院、体育館、など

『尾高』＝霜、アブク、座敷、など

『平板』＝電話が、公式に、愛着を、など

地域によって、方言とは別に特有のアクセントやイントネーションがあります。例えば函館の場合、「佐藤（サトウ）」さんを呼ぶとき、「ト」を高くする中高で発音することが多いですが、「サ」を高くする頭高の発音が一般的です。

普段の話し方が正しいアクセントかどうかは、アクセント辞典を引いて確認します。テレビのアナウンサーやドラマのセリフのアクセントが気になり出すのは、音訳者アルアルです。でも、アクセントは画一的なものでなく、時代によって変化し、どちらも可という場合も多くあります。

第三回（五月二二日）

・朗読してみよう（小説）
　読み聞かせとは違って、できるだけ感情を込めないようにして読むことが求められます。視覚障害者の目の代わりなので、文章から得るべき喜怒哀楽の感情を聞き手から奪ってはなりません。会話の部分は、ついつい感情を込めてしまいそうになるので注意が必要です。
　最後に講師の先生が言いました。
「音訳は、話すように読むのが基本です」
・朗読してみよう（随筆）
　文章を正確に読まなければなりません。その上で内容も正確に伝わらなければなりません。読点（、）は作者によって打つ頻度が異なりますが、それに固執することなく意味がわかりやすい箇所で切って読みます。
　第四回（五月二九日）
・朗読してみよう（広報）
　青い鳥では、函館市の『市政はこだて』や『議会だより』などの音声データを作成しており、市のホームページで聴けるほか、ＣＤに記録して必要な人に発送しています。
・朗読してみよう（雑誌）
　小説や随筆に限らず、あらゆる活字を音訳します。デイジー図書製作のほか、利用者のリクエストがあれば何でも音訳します。『新聞小説』や『新聞コラム』も希望する視覚障害者に提供しています。
　第五回（六月五日）
・音訳と校正
　読む人は、自分でも確認しながら文章を正確に、かつ、アクセントに注意しながら読みます。しかし、自分での確認には限界があります。思いがけないところに読みやアクセントの間違いがあります。校正は、読んだデータを聞き直して『校正表』に修正か所のページと行、読み始めからのタイム、語句を記録します。違う二人で順番に二回行います。
　第六回（六月十二日）
・青い鳥朗読奉仕団の活動
　青い鳥の発足は、一九六六（昭和四一）年です。現在、五六名が所属し、男性は私を含めて三名です。
・音訳図書の制作過程
　デイジー図書は、音訳、校正、デイジー編集、デイジー校正の順に異なる五人の作業を経て完成します。一冊の完成までには半年から一年を要します。
　第七回（六月十九日）
・音訳環境
　音訳は、各自の自宅で雑音が入らないように部屋を閉め切ってマイクに向かいます。音が反響しないように壁に毛布などの布を下げたりします。一日の家事を終えた夜の時間に活動している人もいます。夜は、外の騒音は軽減しますが、防音がない部屋からは読む声が漏れるので、家族の理解と協力が

必要です。

・パソコンを使って読む

パソコンで『Sound it』というフリーソフトを使って録音します。音声データを簡単にコピー、切り貼り、消去、間の挿入が可能な優れモノです。

カセットテープを使っていた時代と比較したら格段の便利さです。カセットテープは、切り貼りができないので、部分的な挿入時には、ずいぶん前の文から少し早口で読んで挿入スペースを確保したそうです。先輩の皆さんのご苦労がうかがえる話です。

第八回（六月二六日）

・音訳図書製作に必要なこと

音訳、校正、デイジー編集のスキルは大事ですが、何よりも大事なことは利用する視覚障害者のための活動だということです。

ボランティアだから、自分の空いた好きな時間に活動すればいいというわけではなく、デイジー図書を待っている人がいて、それを皆で完成させる活動であることを理解して、責任感を強く意識しました。

・視覚障害者を知ろう

視力や視野に何らかの障害がある人を『視覚障害者』といい、先天性と病気や怪我などで視力を失う中途視覚障害者がいます。私は視覚障害の方は全員点字が読めるものと思っていましたが、大人になってからでは指の感覚が鈍くなっていて点字は読めないそうです。だからこそ、耳から情報を得るためのデイジー図書が必要になります。

八回の講座を受講し終えましたが、回を重ねるたびに受講者が欠けていき、最後まで受講したときは半数になっていました。そのうち、青い鳥に入団したのは、私を含めて三人でした。こうして、私の音訳ボランティア活動が始まったのです。

○例会、講習会、発送作業

・開催日　毎週水曜日

・時　間　十八時～十九時

・場　所　函館市総合福祉センター集会室

週一回集まって、情報共有、クラス別講習会や音訳データＣＤの発送作業を行います。デイジー図書のＣＤやケースに書名と著者名を点字で表記するため、点字の講習会も開かれ、団員は点字製作キットを持っています。

団員が集まると、あちらこちらで、「読み方はどうか」とか「アクセントがどうの」といった話題が持ち上がります。その声は次第に大音量となって部屋中に充満します。

「すみませーん、六時になりました」

と誰かが言って、例会が始まります。皆さんお元気で、そこにいるだけでパワーをもらえます。また、入団以来、皆さんから「けんさん」と呼ばれ、有名な俳優になったようで心地よい空間でもあります。

○『名古屋ＹＷＣＡアートな美』による講習
・講　師　同団体の堀尾さん
・実施日　二〇一九年九月十一日
　同団体は、視覚障害者と共に美術館や博物館などを訪れ、対話を通して美術作品を鑑賞するガイドヘルパーの活動をするボランティア団体です。絵画、彫刻などの芸術作品の説明の仕方を教えていただきました。
　特に印象に残ったのは、色についての話でした。中途視覚障害者の場合は理解できますが、生まれつきの先天盲の人にはどのようにして色の説明をするのか不思議でした。
「自分なりの色のイメージを持っています」
　説明によれば過去の経験や知識、視覚以外の感覚、触覚や温度などと結びつけて、各自で色のイメージを持っているとのことです。それは、同じ赤でもボタンの花の赤や夕焼けの赤、朝焼けの赤など、それぞれの微妙に違うイメージまであるといいます。一つの絵の前で、半日が過ぎることもあるそうです。
○新型コロナウイルス感染症拡大
　クラス別講習で音訳の基礎を学び、先輩団員の皆さんの指導を受けながら週一回の集まりを楽しみにしていました。
　年が明けた二〇二〇年、コロナ禍の世界が始まりました。今となっては忘れがちですが、三密（密閉、密集、密接）の回避とマスク着用が求められました。そのため、四月から八月までの例会や講習会が取り止めになりました。ただ、音訳や校正、デイジー編集は、自宅のパソコンで行うため、デイジー図書の製作への影響は限定的です。しかし、入団して一年の私にとっては、勉強の場が失われたことは残念なことでした。そんな状況が、まさか三年も続くとは思っていませんでした。
　九月になってようやく人数を制限して例会が再開されました。そんな中で、辛抱強く音訳の戦力となる日を待つ日々でした。
○北海道新聞、新聞コラム『卓上四季』
・二〇二一年三月二八日～四月三日の分
・録音時間　１６分５４秒
　初めての音訳がこのコラムでした。二人一組の十一組が一週間ずつ輪番で担当し、同じ組の二人が交互に音訳と校正を担当します。
　ベテランと新人が組むことで、読む音量や速度、間の取り方を実践で学ぶことができる貴重な機会になります。著作権法によって、例え団員であってもその音声データの音訳者、校正者、デイジー編集者以外の人は聴くことができないからです。
　コラムの内容は、多岐に渡っているため、アクセントを始め、人名、地名など、調べることはたくさんあります。
　日曜日から土曜日までの分を音訳しますが、毎日コツコツ読む人と、一週間分をまとめて読む人に分かれます。私は初めてのこの時、毎日読むことにしました。ところが、録音された声の調子が毎日変わっているように感じたのです。声は、朝と

夕方でも違います。結局、土曜日の午前中いっぱいかけて七日分を読み直しました。校正者に話したところ、第三者が聴いた場合、本人が感じるほどの違和感はないとのことでした。現在は、水曜日と土曜日の二回に分けて読んでいます。

・二〇二一年四月三日

この日のコラムは、私の好きだったＴＶドラマ『北の国から』で黒板五郎を演じた田中邦衛さんの訃報に関するものでした。この物語は長い間シリーズ化されて欠かさず視たものでした。この記事を私が読むことになった巡り合わせに感謝し、哀悼の意を込めて読ませていただきました。

新聞コラムのメンバーとして、現在も継続中です。

○北海道新聞、朝刊小説『かたばみ』

・木内　昇　著

・伊波　二郎　画

・二〇二一年十一月十六日～三〇日の分

・録音時間　５０分５４秒

・校正担当

朝刊小説の音訳は、六人が輪番で十五日分を読み、次の人が校正して次の十五日分の読みを担当します。これを一年間継続します。

この時『音訳ノート』が作成され、登場人物の名前の読みやアクセントなどを記録して次の人に引き継ぎます。私も最初は大先輩の音訳の校正から始まりました。三回聴き直した校正結果は、次の通りです。

『豊島』＝「としま」を「とよしま」

『見渡す』＝「みわたす」を「みまわす」

『悠然』＝「ゆうぜん」を「せいぜん」

『批難』＝「ひなん」を「ひはん」

と読むなど、１４か所の修正がありました。他の人の読みを聴くことと校正することは、大いに勉強になります。

・二〇二一年十二月一日～十六日の分

・録音時間　４８分３３秒

・音訳担当

校正表を受け取った時は、正直、自分でも驚きました。修正か所５４か所、読み間違いはなかったものの、アクセントの指摘が１０か所、その他は雑音の指摘でした。ややもすると、「これくらいは」と思ってしまう自分を戒め、あえて厳しく指摘した校正者に敬意を払うことに決めました。

○ＳＴＡＲ　ＷＡＲＳ～スカイウォーカーの夜明け

・レイ　カーソン　著

・デレク　コノリー　原作

・稲村　広香　訳

・４４１ページ（新書版）

・二〇二一年十二月～二〇二二年二月　製作

・録音時間　１１時間３６分

コロナ禍二年目のクリスマスが過ぎた頃、団員でもある函

館視覚障害者図書館の森田館長から音訳の機会をいただきました。

デイジー図書の製作は、青い鳥が購入した本を読むのが基本ですが、視覚障害者からリクエストされた本を読むこともあります。今回はこのリクエストです。題材がＳＦで男子向きだったことと普段は仕事をしている私が、年末年始の休み中に取り組めると判断されたのだと思います。

音訳の開始時に、『音訳着手書』を視覚障害者図書館に提出します。それには、書名、著者名、訳者、出版社、出版年、本体価格、ＩＳＢＮと内容抄録のほか、完成予定月日を記載します。六月末日と記入しました。

私には、初めて一人で小説を音訳するプレッシャーがありましたが、完成を待っている人がいるという思いが、音訳の原動力となって一月末までに読み上げました。でも、その道のりは非常に困難なものでした。

この本は、映画のノベライズ本です。一九七八年に初公開された『スターウォーズ』シリーズは、『遠い昔、遥か彼方の銀河系』の物語で、宇宙を舞台にした冒険活劇です。若い頃は、そのスケールに魅了されて映画館に足を運んだものでした。だから、登場人物や相関図は理解しており、再びあの世界観に浸れるワクワク感でページをめくったのです。

読み進めるにしたがって、どんどん物語の世界に引き込まれていくはずでした。しかし、文字の羅列を音にしている作業にしか感じられなかったのです。いくら読み進めても、ルビの読み方、アクセントに注意がいって物語の内容が頭に入ってきません。

『残丘』＝ビュート
『沼地』＝フェン
『ゴミあさり』＝スカベンジャー

物語に集中できないのです。私は近くのレンタルビデオ店に走って、本の原作となった映画のＤＶＤを借りて見ることにしました。映画を楽しむというより、ストーリー展開を確認する作業でした。

読みを再開すると、本は忠実に映画を活字にしていました。今見たばかりのシーンと文章がシンクロします。戦闘シーンでの会話が次々に繰り出されて緊迫感が高まります。読む速度も次第に加速されていきますが、そこで気付きます。「」書きの会話文は、発言者をしっかりと区別できるように、会話と会話に間を空けなければなりません。

・第一校正　２１２か所

最初の校正は、青い鳥の黒丸代表に担当してもらいました。音訳は正確性が絶対で読み間違いは許されません。２１２か所の指摘が多いか少ないかはわかりませんが、自分でも慎重に確認した結果がこれです。自分の間違いを自分で見つけることの難しさを痛感しました。

『屹立』＝「きつりつ」を「きりつ」

『興隆』＝「こうりゅう」を「こうこう」
と読み間違えていました。辞書を引いて確認すれば良かったものです。
アクセントについては、初めてを考慮して多少甘めの校正だったかも知れません。
・第二校正　５２か所
森田館長にも校正してもらいました。出来具合を心配したのだと思います。
繰り返し指摘されたのは、間の短さでした。会話と会話の間、会話と地の文の間、物語の展開が変わる段落と段落の間です。注意して読んだつもりでしたが、足りませんでした。
講習会での先生の言葉が思い出されます。
「多くの指摘を受け入れられず、途中で音訳から離れて行く人もいます」
確かに校正表を最初に受け取った時の素直な感想は、「まさか、こんなに」でした。
そこから、気持ちを切り替えて、修正か所を確認して読み直すには少し時間を要しました。森田館長が、校正表に記した次のコメントにも力をいただきました。
「サピエ登録第一作としては、すばらしい早さと正確さでした。この調子で、どんどんいろいろな本を音声化してください」
どうやら、青い鳥は『褒めて伸ばす』方針のようです。
・デイジー編集
校正の指摘か所を読み直して、デイジー編集者に手渡します。リクエスト案件であるため最優先で対応していただき、読み始めから二か月で完成させることができました。それぞれの連携の賜物でした。
○誰も知らないとっておきの世界遺産ベスト１００
・小林　克己　著
・２６３ページ（新書版）
・二〇二二年三月～九月　製作
・録音時間　７時間３８分
次に黒丸代表から手渡されたのは、観光ガイドブックです。小説に限らず様々なジャンルの本を音訳しています。自分では絶対に選ばないような本との出会いも楽しみの一つで新鮮です。
読む上で一番苦労したのは、ルビのない韓国や中国の地名の読み方でした。加えて、英語を始め、掲載国のアルファベット表記の発音をネットで検索しながら読み進めました。また、写真や表の説明も必要でした。とにかく書いてあるものを全部読むことが基本です。
・第一校正　１９２か所
この校正も黒丸代表に担当してもらいました。そして、外国の地名は鼻濁音ではなく濁音で読むことの指導を受けました。『ビガン』『サンミゲル』『ムンガイ』など写真や表の読み方も丁寧に校正表に書いてもらいました。

・第二校正　５５か所
　第二校正者には、アクセントを中心に指摘してもらいました。一つひとつアクセント辞典で確認して校正表に記録しています。また、次のような読み方のアドバイスも書かれてありました。
「文の語尾が下がっていないところがありました」
　文の読みは、上から下に向かってピッチを下げるのが基本です。
・デイジー編集時の校正　３８か所
　デイジー編集者からは、中国の地名を中国読みに修正してもらいました。
『香檀（こうだん）』＝ヒャンダン
『書百堂（しょひゃくどう）』＝ソベッダン
　校正は、音訳以上に集中力と根気が必要な作業です。校正者に感謝です。
○豪球復活
・河合　莞爾　著
・４１３ページ（単行本）
・二〇二二年九月～二〇二三年三月　製作
・録音時間　１４時間５７分
　三冊目の音訳は、プロ野球の世界を題材にしたミステリーでした。それほど野球に興味のない私が自分で手にする可能性が低い本です。おそらく黒丸代表は、男性はみんな野球が好きだと思って選んでくれたのだと思います。でも、ミステリーは好きです。ミステリーの醍醐味は、謎が解明されていくワクワク感だと思います。
　でも、私の場合は少し違います。結果を知った上で読むことに何の不都合も感じないのです。だから、物語の序章の次に最終章を読んだりします。そうすることで、伏線やミスリードの部分がわかったりして別の楽しみや安心感があります。それは、テレビの二時間サスペンスドラマも同じです。録画で見ることが多く、先に見た妻から犯人と結末を聞いたりします。
　今年のパリオリンピックも同じようなことがありました。深夜から未明にかけての放映を録画して、早朝ニュースで結果を知った上で帰宅後に再生しました。特に、柔道や卓球はそれで安心して見ることができたのです。
　もしかしたら、視覚障害者の中にも私と同じ考えの人がいるかもしれません。だからと言って、伏線の部分を強調して読むことはしませんし、そんな技量もありません。
　不思議なことの理由を知った上で、安心して読むことができました。
・第一校正　２２６か所
　第一校正を今回も黒丸代表に担当してもらいました。２００を超える指摘の中でも、次のような、少し注意するだけで回避できるものもありました。『投球フォーム』＝「フォーム」を「ホーム」と読んでいました。この修正が２４か所ありまし

た。校正者に対し、申し訳ない気持ちが湧いてきます。
・第二校正　１５か所
　指摘の中に次のものがありました。
『沢本（さわもと）』＝「さ」の発音不明瞭
　沢本は、主要な登場人物です。読んでいて指摘のとおり、「さ」の発音が不明瞭になりやすい、正確にはマイクが拾い難いことを自分でも気付いていました。だから、意識して「さ」を強めに発音していたのですが、２か所について指摘を受けたのです。校正者の耳の確かさに納得しました。
○結界（上）
・津谷　一　著
・３５６ページ（単行本）
・二〇二三年四月～十二月　製作
・録音時間　１２時間３１分
　この本は、四月に渡されていましたが、完成予定が翌年三月で余裕があることと、七月までは『函館野外劇』に専念しようと考えたことから、八月から読み始める計画でした。
　ところが、この年の夏は暑い日が続いたのです。国連のグテーレス事務総長が「地球沸騰化の時代が到来した」と警鐘を鳴らしたように、函館も例外ではありませんでした。我が家は、居間にはエアコンがありますが、音訳で使用する二階の部屋にはありません。窓とドアを締め切った部屋は、夜になっても五分と居られない状況でした。「これは命に関わる暑さだ」と自分に言い訳して、音訳は手つかずのまま時間が過ぎました。そんな状況の中で冒頭の表彰の話が伝えられたのです。
　九月七日に奨励賞の表彰を受けながら、
「ちゃんと音訳に取り組んでくださいよ」
　と言われているように感じました。以降、九月の残暑もまだまだ厳しい中でしたが、平日、祝日を問わず毎日の積み重ねで一〇月末までに読み上げることができました。
　でも、順調だったわけではありません。物語に『堀田慶子』という大学院生が登場します。ルビがなかったので「ほった」と読むか「ほりた」と読むか悩んだ末、「ほりた」と読むことに決めて読み進めました。ところが、終盤になったころ、彼女と電話で話した相手がメモを残す場面があり、そのメモには『ホッタ』と記されていたのです。あまり詳しく書けば、もしこの本を読んでみたいと思った人にネタばれになる可能性がありますが、かなりの場面で登場しています。
　彼女が登場するページを探して「ほりた」と読んだか所を「ほった」と読み直さなければなりませんでした。
・第一校正　５７２か所
　校正者やデイジー編集者が誰になるかは音訳者にはわかりません。青い鳥には、研修部、校正部、デイジー編集部のグループがあり、作業と研鑽の場になっています。掛け持ちの団員もいます。また、音訳と校正はほとんどの団員が兼務しています。読みながら、他の人が読んだデータを校正しているのです。

今回の校正者は、校正部会の中から選ばれた厳しいことで定評のある人でした。アクセント辞典に忠実に校正する人です。

『間違いない』＝「ち」にアクセントを置いて読みましたが、「ちが」にアクセントを付けるのが正しい読みです。この指摘が５３か所ありました。

『ＳＳ-８』＝「エスエスエート」と読みましたが、「エスエスエイト」に修正されました。この指摘が７６か所です。

『堀田』＝「ほった」と漏れのないように読み直したつもりでしたが、直しきれていないものが８か所ありました。

ずいぶん前のページに出ていた語句とのアクセントの違いも指摘され、読み方の整合性を求められます。細かなところまで、校正者はきっちりと指摘してくれました。しかも、一か月で校正を終えています。何度もページをめくっては何度も聴き直して、それを校正表に書き出す苦労を思うと謙虚に受けなければならない気持ちになります。

・第二校正　２１か所

今回も黒丸代表に校正してもらいました。５００以上の修正か所を指摘された上で、これ以上の読み間違いはないと思いたいのですが、やはりあるものです。

『左腕』＝「ひだりて」と読んでいました。

『郊外』＝「きんこう」と読んでいました。

『委員長』＝「いんちょう」と読んでいました。

『危急』＝「きき」と読んでいました。

○結界（下）

・３１６ページ（単行本）

・二〇一三年十一月～二〇一四年三月　製作

・録音時間　１０時間４７分

上巻の校正表を受け取るとき、「早くつづきを読みたいから頑張ってね」と言われ、私としてはプレッシャーでした。

上巻を校正に出した直後に校正者から「間違いない」のアクセントの指摘をもらっていました。まさか５０以上もの修正になるとは、その時には想像できませんでした。

途中、ハングル文字での記述があり、読み方に迷った私は、対象か所を、

「ハングル文字の記述があります」

と読みました。

何とか年末年始を利用して、年明け最初の例会の一月初旬に、上巻をデイジー編集へ、下巻を校正に手渡すことができました。

・第一校正　３２９か所

下巻の校正で、次の特殊な例がありました。『思わななかった』＝「おもわなかった」と読んだのですが、活字どおりに「おもわななかった」と読むように指摘されました。

これは、「な」がひとつ多く、明らかに誤植だと思いますが、誤植でもそのまま読むのが原則だからです。

『ご多聞にもれず』＝「聞」は「分」の誤植だと思いますが、「ごたもん」と読みました。
校正者、デイジー編集者と協議した結果、「ごたぶん」と読むことになりました。
『間違いない』＝「チガイナ」にアクセントを付けて読んでいました。上巻で指摘されたアクセントが直し切れていませんでした。その指摘が３０か所です。
『ハングル文字』＝校正者が知り合いの韓国の方から教えてもらい、カタカナでルビを書いてくれました。お手数をおかけし、頭が下がります。
・第二校正　２８か所
黒丸代表から、
『間違いない』＝一校で指摘されたアクセントを『許容範囲』と判断してもらいました。
○魔王の島
・ジェローム　ルブリ　著
・坂田　雪子　監訳
・青木　智美　訳
・４７５ページ（文庫本）
・二〇二四年二月～一〇月（予定）　製作
・録音時間　１６時間４分
初めての文庫本で字が小さく、特に、カタカナのルビは、「パ」か「バ」か判別がつかないため、拡大鏡で確認しながら読みました。
去年の夏の暑さの教訓から六月末までには読み終えたいと、ミステリーの本場フランスの行き先不明のストーリーを、はやる気持ちを抑えて読むことに集中しました。最後の最後に、「そういうことだったのか」と自分の想像が及ばない結末に、ミステリーの正当な読み方も良いものだと思いました。
フランス語の記述は、黒丸代表に調べてもらって読むことができました。
・第一校正　２４７か所
「まちがいも本当に少なくて拍手」
大先輩からのコメントに恐縮します。
『ファビアン』＝「ファビン」と読んでいました。その数１９回です。どうしたらこんなに間違えられるのか自分でも不思議です。思わず、暑さのせいにしてしまいそうです。
・第二校正　４９か所
二校は、校正部会チーフにやってもらい、指摘とアドバイスをもらいました。
『愛想』＝「あいそ」を「あいそう」と読んでいました。
『ルビと語句』＝ルビを先に読むのが基本
『傍点（文字の右につける点）の読み』＝強調なのでゆっくり読む
そして、コメントが添えてありました。
「とても長い作品なのに誤読が少なかったですね」

私はこれまで、他の人が読んだ本の校正をしたことがないので、どれくらいの数の修正があるものなのか知りません。いずれの校正者のコメントも、おそらく、私が気落ちしないための励ましであり気遣いだと思います。

一か月に満たない超特急で校正してもらい、お盆休みで読み直して八月下旬の例会でデイジー編集者に手渡すことができました。完成は一〇月になる予定です。

○継続の先に見えて来るもの

こうして、これまでの『校正表』を改めて読み直すと、本の内容よりも音訳当時の、何と読むか、どう読むかを悩んだことが蘇ります。この校正表は、校正者が時間をかけて作成してくれた大事な参考書なのです。校正者、デイジー編集者に改めて感謝します。

イベントなどで視覚障害者と関わることがあります。その時、声を聞いた方に、「〇〇の音訳をされた方ですね」と声を聞き分けてお礼を言われることがあるそうです。初対面同士の距離が一気に近くなる瞬間です。

この活動に参加していなかったら、知り得なかった知識や経験が多くあります。

ＡＩの自動音声が、テレビのニュースを読む時代です。正確性は申し分ないのですが、そこに人の声が持つ温もりはありません。講座で教えられた「話すように読む」ことのヒントがそこにあるのかもしれません。力まず誇張せず自然体で読むこと。相手に話しかける気持ちで読むことかもしれません。

音訳を続け、いつの日か体現したいと思います。『話すように読む』ことを。

ノンフィクション　入選

ワシを見る

竹中　亜弥

冬になると、血が騒ぎます。冬と一括りにせずに細かく言いますと、川に鮭が遡上し始めてから生き物たちがほっちゃれを食べつくすまでの間です。川に鮭がきはじめると、やってくるのです。寒いシベリアから、オホーツク海沿岸やカムチャッカあたりから、大きな翼で空をかけ、オオワシ、オジロワシが。

初めてワシを見に行ったのはもう何年も前の２０２０年１月中頃でした。どうやら道南でも大きなワシがみられるらしいとＳＮＳへ書いている人を見つけたのが最初でした。休日になると夫と二人で大沼にバードウォッチングに行くのを趣味にしていたのですが、そこでみられる小鳥とはレベルが違う大型の鳥がみられるといいます。

私たちは一度オジロワシに出会ったことがありました。流氷を見に行った網走の流氷観光砕氷船、オーロラ号の船上からその悠然とした姿を見たのです。ガイドさんの話によると、そのオジロワシは幼鳥だといいます。

え！？子どもであんなに大きいのか。その時はただただ衝撃でした。

私が道南でワシがみられると情報を得た、その場所は八雲でした。八雲の、遊楽部川。一眼レフのスペアの電池をフル充電し、その見た目から「大砲」と呼ばれる大きなレンズをセットし、双眼鏡のレンズを磨き、車に乗り込みました。どうやら２月は時期的には少し遅いらしいですが、まだ見られる可能性はあるといいます。一番厚いダウンコートに手袋なども重装備で、体が冷えても帰りに温泉で温められるようにお風呂セットも持って出掛けました。

八雲に到着し、遊楽部川の河口へ向かいます。遊楽部大橋から川を遡るつもりで、そこを目指します。遊楽部大橋付近まで来て車の窓から空を見上げた私は固まりました。いた。

上空を舞う黒い影がありました。当時はわからなかったのですが、今思うとオジロワシだったと思います。広げると２ｍを超える大きな翼を広げ、こちらを見ていました。オジロワシと目が合いました。「ギロッ」と効果音が聞こえそうなくらいの迫力で、睨まれました。ワシは大きいので、このくらいの距離だと眼球までよく見えます。その眼球が私をとらえ、明らか

に睨んだのです。
「いた」
かろうじて夫にそう伝え、私は睨まれながら金縛りにあったように硬直していました。野生の生き物に直に睨まれ、目が合った状態で動けなくなってしまったのです。
夫は運転しているので、わき見はできません。そのまま、川を遡ります。清流建岩橋のあたりまで来て、車を道のわきに停めました。車を降り、周囲に目を光らせます。知っていたわけではないのですが、清流建岩橋のあたりはワシ観測のいいスポットでした。橋の周囲は川の流れがあり、川の中には鮭がいて、川のわきには大きな樹木が生い茂っていました。鳥のいる条件は水辺、エサ、樹木。すべてが揃っていました。
周辺の木の中に目を凝らすと、川向かいの木の枝の中に子犬ほどの黒い塊が見えました。目を凝らします。ワシです。普段観測している小鳥はちょこまかと動きますが、ワシはなかなか動きません。木の上に鎮座し、横を向いて落ち着き払っています。双眼鏡も持ってきましたが、肉眼でもしっかり見えるほどにワシは大きいのです。こちらに気付いているのでしょうが、まったく動じません。木の上で、王者の風格を漂わせています。
恐る恐るカメラを向けます。嫌がられるかと思ったのですが、ワシは全く意にも介さないといった雰囲気です。寒さで手が震えるのを止め、息も止めてシャッターを切ります。息を吸って、もう一枚。さらにもう一枚、そして何枚も。嘴は白っぽく、尾羽が白。体は濃茶色です。これは、オジロワシです。ずっと横を向いています。と、その視線をたどると先にもう1羽のオジロワシを発見しました。つがいでしょうか？親子でしょうか。大きさはそう変わらず、こちらのワシも動きません。じっと、木の上に置きもののようにとまっています。
ワシが動かないのをいいことに、写真をたくさん撮りました。ワシは、威風堂々と美しかったです。
さらに川を遡ってみます。セイヨウベツ橋のあたりまで来て、再度車を停めました。セイヨウベツ橋の辺りから今来た道のわきの樹木に目を凝らすと、先ほど同様木の枝の中に子犬ほどの塊がいました。オジロワシでした。
この日は鮭誕橋の辺りまで行き、何羽かのオジロワシの観察に成功しました。鮭誕橋の先にはサケマス孵化場がありました。ワシが来るためには餌になる鮭がいなくてはなりません。その鮭がいるのは、このサケマス孵化場のおかげなのでしょう。この近くには、間近の距離に白鳥の群れも漂っていました。
試しにサケマス孵化場より上にもあがってみましたが、ワシは見つけられませんでした。外でのワシ観測は予想通り体が冷えました。帰りには温泉の日帰り入浴で体を温めて帰宅しました。帰りに、野田生川を通った時に、「この川にもいそうだよね」と言って川辺の大木を見ました。いた。瞬時のこと

で車を停めることはできませんでしたが、あれは間違いなくワシでした。そういう目で見ると割といるんだね、そんな話をしながら帰途につきました。

次にワシを探しに行ったのは1年飛んで２０２２年の1月のお正月休みの間でした。同じく遊楽部川を遡って支流のセイヨウベツ川方へ行く、前回と同じルートをたどりました。この時、初回と大きく違ったのはオオワシにも出会えたことでした。体の色がはっきり黒く、肩口に白い模様があります。尾羽が白いのはオジロワシと一緒で、足や嘴は色濃く黄色、嘴の形もオジロワシとは微妙に違います。いる場所やたたずまいは変わらないのですが、オオワシのほうが一回り大きい感じがしたことと、色合いがオジロワシよりはっきりしているのでオジロワシに輪をかけて存在感がありました。

この時もサケマス孵化場より上にも行ってみたのですが、やはりワシはいませんでした。ここで私たちは考えました。サケマス孵化場がなければワシはいません。逆を言うと、川があり、サケマス孵化場があり、木があれば八雲でなくともワシはいるのでしょうか。

この考えは私をかなりわくわくさせました。八雲以外にも、道南でワシを見られるかもしれないのです！

帰宅し、夫と道南の鮭がのぼる川や、サケマス孵化場について調べてみました。その中で、我々が目を付けたのは茂辺地の茂辺地川と、知内の知内川でした。私たちが次にカメラとお風呂セットをもって車に乗り込んだのは、それから3日後のことでした。

茂辺地川は、海沿いの道のそばから山に向かって伸びています。函館から茂辺地へ向かい、茂辺地川を渡ってすぐに、車で入っていける幅の小道があります。そこを入って川沿いに少し進むと、左手には「さけ公園」の看板が見えます。公園や施設自体は雪に埋もれて見えませんが、鮭の管理をしているようです。その向かい辺りに下へ降りる道があり、川のすぐわきに駐車スペースがあります。ここは冬の間は雪捨て場としても使われているようなので、雪捨ての邪魔にならない場所を選んで駐車します。

まずは川をのぞき込んでみます。鮭がいます。ほっちゃれですが、餌になるものがあります。遡上の季節から時間は経っていますが、これだけ餌があればワシがいる可能性があると思えました。また、河口付近には悠々とした白鳥の群れもいました。八雲で見た白鳥を思い出しました。

次に木を見ます。このころには私たちは「ハンノキ」という木の名前を憶えていました。一般には花粉症の原因となる木なので、あまりいい印象を持たれていない木かもしれません。しかし、ワシはなぜかこのハンノキが好きだと思われます。理由はわかりませんが、私が見た限りワシはハンノキによくとまっています。茂辺地川の付近手前側にはハンノキが、奥にはもっと大きな針葉樹が見えました。

条件は揃いました。車を停めたのは河口付近、車道近くなので少し山側に歩いてみることにします。幸いなことに、真冬なのでクマに出くわす可能性は低いでしょう。安心して歩き進めます。奥に赤っぽい橋が見え、名前を調べると鮭見橋という名前だといいます。そこまで行ってみよう、そう話し合いました。

と、その時。ちょうどその鮭見橋の奥の川面から、大きな鳥が飛びあがりました。真っ白い大きなそれは、シラサギでした。たぶんダイサギではないかと思われます。白いサギは、一般にシラサギと呼ばれますが、シラサギという種類のサギはいません。シラサギとひとくくりにされる中に、ダイサギやチュウサギ、コサギなどが存在してます。今回のシラサギは判断材料となる目元などは見えませんでしたが、大きかったのでダイサギではないかと判断しました。黒っぽい川面と樹木の背景に、ぱっと大きな白い花が咲いたかのようにサギが飛び立ちます。と、サギに触発されるかのようにその後ろの木の上から黒っぽい大きな鳥が飛び立ち、山側に消えていきました。間違いない、今のはおそらく…。

トンビなのか、チュウヒなのか、ノスリなのか、ミサゴなのか、私には厳密な見分けがまだできない鳥が上空を舞っています。「いる気配」がプンプンする中、やっと見つけました。川の向こうのハンノキに、オジロワシがとまっていました。

そこからは面白いようにワシを見つけました。オジロワシも、オオワシも。ハンノキの上だけでなく、奥の針葉樹の中にも隠れていました。おおらかに空を横断していく姿も見られました。

スペース的には、茂辺地川付近は八雲と比べてかなり狭いです。その狭い中に、濃ゆい自然が詰まっていました。夢中でシャッターを切り、たくさんの写真を撮らせていただきました。

この日はこれで終わらず、そこから知内に走りました。目指すは知内川です。川沿いに北島三郎さんのご実家の前の道へ入り、北島さん宅の前を抜け、元町町内会館の駐車場へ入ります。ここはちょうど川側に向けて開けており、川辺の大きな樹木がそばに見える場所なのです。車を入れた瞬間、目の前の大木からワシが飛び立ちました。瞬間しか見えませんでしたが、あれは間違いなくオオワシでした。少しの間呆けるようにワシの飛び立った木の上を眺めてから気を取り直し、さらに奥へ向かいます。少し行くと、山スキーのリフト乗り場があり、皆がその駐車場代わりに使っている川側を見下ろせる広い場所へ出ます。車を降り、川を見下ろします。川辺の木の上を、丁寧に目でなぞっていきます。

「ワシのなる木がある」

思わず声が出ました。川辺の一本の木に、3羽のワシが止まっていたのです。オジロワシ1羽に、オオワシ2羽。一本に二種類が一緒にとまっているとは、なんと珍しいことでしょう。

しかも、いつもは動かないワシがその木の上ではもぞもぞ動いていました。ワシたちの鳥らしい動きをはじめてみたのはこの時でした。

その後さらに川を遡り、川にかかる向上雷橋に行きました。道のわきに車を停め、橋を歩きます。橋の上から、周囲の木の上を凝視します。向上雷橋からは川面を見下ろす形になるので、木の上のほうも見やすく、その中に子犬ほどの塊はないか探します。お、いるいる！橋の上から上流側にも下流側にも、ワシの姿が見られました。橋の上からなので、割と近くにワシが見られます。その時から、この場所は私たちのお気に入りワシ観察スポットになりました。

それより上に遡ると、サケマス孵化場を越えてしまい、例によってワシの姿は見られなくなりました。道も川からそれていくので、向上雷橋までが知内でのワシが観測できる場所だということのようでした。

その後車でスポットを探して往来していると、川面に積もった雪からワシが飛び立ちました。川の真ん中あたりです。橋の上から見たその光景は、本当に美しいものでした。

この日も写真をたくさん撮って、帰りは知内温泉で体を温め、帰宅しました。充実した一日を過ごしました。

そこから1週間後の成人の日の辺りには、また八雲へ出かけています。この日は以前の場所からオジロワシ・オオワシともに観察することができ、また八雲の町に近い遊楽部公園の辺りからワシを観測することに成功しました。遊楽部公園の駐車場に車を置き、長い長い遊楽部橋を、木の上に黒い塊がいないか確認しながらゆっくり歩きます。と、意外とこのあたりにもワシはいて、奥に小さく見えたものも含めるとこの場所で5羽ほども出会うことができました。

この年は、八雲も八雲以外の新しい場所も、たくさんのワシに出会え、その後の私の冬の過ごし方に影響を及ぼすこととなった転機の年だったと思います。この年を機に、これ以降は毎年冬になるとワシを見に行く習慣がつきましたから。

翌年２０２３年は、2月の頭に八雲へ行っています。このあたりから、だんだん成鳥と幼鳥の区別がつくようになってきます。私がオーロラ号の船上からはじめてオジロワシを見た時、なんて大きいんだろう、そしてこれでもまだ子どもだなんて、と思ったのですが、どうやらワシの仲間は子どものときのほうが羽毛がふかふかしていて大きいことがあるようです。また、オオワシにもオジロワシにも模様がありますが、模様の境目がぼんやりしてはっきりしないものは幼鳥だということもわかってきました。逆に、年齢を重ねて年配のワシは頭が白っぽくなっていくようでした。ハクトウワシという、頭が白いワシもいるようですが、道南には来ないそうです。

同じ年の１２月１日、知内へ再訪し、オジロワシとオオワシを見ました。知内は八雲よりも近くにワシを見られるのでお気に入りの場所になっていました。

その５日後、新しい観察スポットを求めて豊浦へ出かけました。豊浦にはインディアン水車公園というのがあり、そこを流れる貫気別川からインディアン水車で鮭を捕獲し、孵化場へ運んでいます。その貫気別川に今度は狙いを定めました。

公園ですので、いつもは悩む駐車場問題も解決です。車を停め、まずはインディアン水車を見学しました。１２月なので期待はしていませんでしたが、なんとその時期にまだ鮭を見ることができました。

その後、川辺に行きました。川の上の大きな木に２羽のオジロワシをすぐに見つけました。こういう場合、私たちはすぐ「つがいかな」と思ってしまうのですが、そうばかりではなく親子のこともあるそうです。いまだに、私にはつがいなのか親子なのかの見分けはつきません。

２０２４年のはじめには、私の２人の妹を連れて知内にワシを見に行っています。私たちの撮ってくる写真を見て、実物を見てみたいと思ったそうで、この日は主にオジロワシが大量でした。

この日に気づいたのですが、１月、２月にワシを見に行くとオジロワシに出会える数が多く、それより早い時期だとオオワシに出会える数が多い傾向があるようです。オジロワシとオオワシについては、オオワシには群れる習性がありオジロワシにはそれがないですとか、産卵場所が違うなど様々な違いがあるようですが、それらが道南に来る時期に何らかの影響を与えているのでしょうか。

こうしてワシを観察していると、生態について知りたくなることが多々あります。そのたびに図書館へ行きワシについての本を探すのですが、知床のワシの本やワシの写真集はたくさんあります。しかし、道南でのワシの生態を解説してくれる本はありません。そんな中先日古書店で、古い資料を見つけました。八雲で昔ワシの調査を大きく行った時の記録資料です。即決で購入し、読み込んでいる最中です。近い将来これらの資料をもとにワシのことをもっと深く理解したいと勉強中です。

さて、先シーズン最後、２０２４年の初めの冬の終わりに、もう何度目かにはなりますが八雲に行ってきました。そこで、衝撃的なものを目にしました。一番はじめに八雲でワシを見た思い出のある当たりの景色が、大きく変わってしまっていたのです。

原因は、新幹線延伸に伴う工事です。山は削られ、川の流れは変わり、木がなくなっていました。工事車両の音が響き、これでは静かさを好むワシは来られません。遊楽部川では、最近鮭を見ません。これだけ川が変われば、鮭も来られません。

新幹線は好きです。乗り物に乗って旅をすることも好きです。だから、それについてとやかく言えるわけではありません。ですが、この工事を計画した人はここが貴重なワシの居場所だとご存じなのでしょうか。オオワシ・オジロワシは絶滅危惧

種です。どうしてもあの場所でなければいけなかったのでしょうか。

全体を見ずに、自分の見える範囲だけを見てものをいうことは間違っています。私は偶然ワシが好きだからそういうだけかもしれません。しかし、本当に正しいのかな、と思ってしまうのです。

その日、川の河口に近いほう、遊楽部公園側の町のほうで、何羽かワシを見ることができました。町側でもワシが見られるようになったのは、山が失われてきたからだと気づきました。

それでもたくましく町側で魚をつかんでカラスと戦っているワシを見ると、なんだか勇気づけられます。工事が終わって、また何事もなかったように鮭やワシがあの川、山に戻ってくることを祈っています。

そろそろ夏が終わります。寒くなったら、今年も私はワシを見に行きます。今年も、悠々としたあの美しい姿がたくさん見られますように。

《完》

ノンフィクション　佳作

テリー・ファンクの追悼とプロレスの現在

高橋剛治

1　プロローグ

そこに置いてあったのは「テリー・ファンク追悼号」とタイトル印字され、若きテリーの雄姿を表紙にしたプロレス雑誌だった。

それは昨年（令和五年）の夏の事で、八月の終りになっても函館の外気温はまだまだ暑い日が続いていて、これも温暖化の影響なのか、東京と変わらないじゃないか、来年以降も更に暑さは継続されるのか、等と心配な気分になっていました。それでも九月に入り、幾らかは過ごしやすくなったので、コロナウイルス流行の余韻もあって外出を控えてはいましたが、街に出る事にしました。久々に入ったデパートの本屋にはまだ冷房が入っていて、その涼しさで、ふらふらと売り場を巡っていた時に、その追悼本を眼にしたのです。

一昨年（令和四年）にアントニオ猪木が亡くなった時にも多くの追悼本が出されていた記憶がありますが、外国人プロレスラーとしては、過去にはない異例な扱いだと思いました。アメリカ人のプロレスラー、テリー・ファンクは、「テキサス・ブロンコ」「テキサスの荒馬」等の異名で活躍。ベビーフェイス（善玉）のレスラーとして日本での人気は高い物がありましたが、八月の二十三日に病気の為、七十九歳で、地元の医療施設で亡くなったと言うニュースに驚くと共に、感慨深い物を感じました。人気漫画（キン肉マン）の超人キャラクターであるテリーマンのモデルでもあり、個人的にもよくプロレスを見ていた時期のスター選手でしたので、雑誌を買うと共に、プロレスについて少し考えてみたいと思ったのです。

それと言うのも日本のプロレス界は現在、長期に渡る混迷の中にあると思えるからなのです。その原因を含め、テリーの事まで述べたいと思うのですが、前提とするスタンスとして以下の事をまず記したいと思います。新しいプロレスについて考えて行くには、それを明示する事が重要だと思うからです。

まずプロレスについての前提認識なのですが、プロレスとはリアル・ファイトのスポーツではないと言う点です。プロレスの試合とは、あらかじめ勝敗の決められたスポーツ・パフォー

マンスだと言う事です。リアル・ファイトでない以上、よく聞く「プロレスは八百長」の雑言は当てはまら無いのです。あるいはこれについては、今更と思う方も多いかと思います。日本のプロレスでは三十年程前から、その事柄を公表した多くの書籍が刊行され、公然の事実と思われてはいますが、この件についての公式発表はされていません。

一方、アメリカでは一番大きなプロレス組織であるＷＷＥによって、一九八九年に「エンターテイメント宣言」がされています。つまりプロレスとは勝敗を競う形式を取るが、あらかじめ作られた台本に則って行われている「ショー・ビジネス」であると言う事を裁判記録上で公表しているのです。それまではアメリカでもプロレスは日本同様に、競技として曖昧な状態で存在していました。けれど多くのスポーツ競技の勝敗が「賭け」の対象となる国で、そこから除外されている事実からも、プロレスの立ち位置は明白でした。しかし公式の発表はこの時が初めてで、公表の理由としては、プロスポーツにおける筋肉増強剤等の薬物使用の問題が裁判にもなり、その批判を避けると言う事が根底にはありましたが、プロレスがスポーツ団体として州で登録するよりも興行（娯楽）として登録する方が、保険料が低く済み経費削減に繋がる点や株式上場の際の経営透明化という観点から、正確な業務内容を公開する必要があった為です。いわば赤字に陥っていた企業の苦し紛れのカミングアウトであった物が、企業全体で「情報公開」に取組んだ事により、超一流の娯楽運営企業に脱皮、一九九九年秋には株式の上場にも成功し、企業として大きく発展して行きます。

一方、前述の様に日本におけるプロレス界は、これについて曖昧なまま、中途半端なまま推移しています。

かつて私が少年時代に、プロレスを見ていた頃、プロレスは大人達から八百長と呼ばれていました。確かにプロレスの派手な技は両者の合意がなければ、あんなにも綺麗に決まる物ではないでしょう。又、当時年間何百試合も行われていたハード・ワークな試合の全てがリアル・ファイトであっては体がもたないのも事実なのでしょう。更に、一般新聞にその勝敗の結果が記載されていないのは不信でしたが、「インチキ」と同義語の八百長のレッテルは悲しい物がありました。けれどエンターテイメントである、と言う事を公表すれば、八百長と言う侮蔑からは解放されますが、勝敗結果が決まっていると言う事実については、力道山に始まる日本のプロレスの方向にとっては、当時はまだ公表しづらい物だったのかもしれません。当時、後の直木賞作家である村松友視のエッセイ「私、プロレスの味方です」がベストセラーになり、続編も書かれましたが、今読み返すと決定的な認識の違和感で痛い感じがします。時代は進みました。いつまでも「曖昧なまま」で良いはずがありません。

確かに猛練習や日々の鍛錬や訓練によって体を鍛えたレスラーは、腕力も運動機能にも優れ、強いのは事実です。又、あの破天荒な技を受ける耐久力、長時間戦うスタミナも常人を超えて

います。その為プロレスラーはその力を過信していた面があり、世の中のプロレス競技への懐疑的視線から、一時期多くのプロレスラーが総合格闘技に挑み、惨敗するケースが多く出て、「プロレスは死んだ」とまで言われましたが、これはサッカーの選手がバレーやラグビーに挑む様に、同じ球技と言っても、そもそも種目が違うのです。

一九七六年に開催されたプロボクシングのモハメド・アリとプロレスのアントニオ猪木が、お互いに有利な様にしようと半端なルールになり、膠着したリアル・ファイトになったのは当然の事と言えます。

当時のバーリ・トゥードと呼ばれた総合格闘技がグレイシー柔術に席巻されていたのは、七十年以上に渡り対ボクシング、空手、対柔道、レスリング等の競技への綿密な戦術が用意されていたからでした。現在では当たり前の総合格闘技におけるガード・ポジションをとる攻防を、当時は多くの者が知りませんでした。ガード・ポジションでは、下になった選手が上にいる相手を両足でコントロールして、上の選手からの打撃を回避するテクニックです。ですから実力を過信していたプロレスラーが、そのルールに無知で、慣れない総合格闘技のリング上で惨敗を繰り返したのも必然でした。

後に総合格闘技に熟知したプロレスラーである桜庭和志が、総合格闘技の主役に躍り出て、「プロレスラーは、本当は強いんです」と発言し、プロレスファンを狂喜乱舞させたのですが、そもそも観客の熱狂を呼ぶプロレスとそれは別な種目なのです。総合格闘技を制する為にはその競技に特化した技術と訓練が必要で、それは現在も進化していて、二十一世紀の総合格闘技のトーナメントでは、昔の様に、グレイシー柔術だけで勝ち抜く事はできません。プラスでボクシングの打撃、キック空手の蹴り、レスリングのタックル、柔道の関節技等に精通したハイブリッドな選手でなければ勝ち進めないのです。

一方、プロレスはスポーツ芸術であり、観衆を楽します為、鍛えられたアスリートによる世界最強の芝居なのです。命を懸けたサーカスや奇想天外で優れたマジック、台本のある映画に近い物です。それらを見るのと同様にプロレスは見てほしい物なのです。

2　プロレスの歴史

さて、そもそもレスリングの歴史はどこから始まるのでしょうか？イメージとしては男性同士が素手で戦う古代ギリシア時代のパンクラチオン競技が思い起されますが、パンクラチオンは、レスリングやボクシングだけでなく、蹴り技、固め技、関節技、絞め技、抑え込み技等の技術も網羅した現代の総合格闘技に似た競技でした。これは戦争等での実戦における戦闘術から派生した物で、古代ギリシア語で「全て」を意味するパンと「力、強さ」を意味するクラチオンに由来し、「全ての力」あるいは「あ

らゆる強さ」の意味になります。古代オリンピックには紀元前六四八年から正式競技として加わっています。死傷者が多く出る過激な競技でした。後にここからボクシングやレスリングの原型とされる物が、それぞれ紀元前三百年頃には競技として成立し、パンクラチオンや古代ギリシアのボクシング等、死傷者が当然のように出る他の格闘競技に比べると、組み合って抑え込む古代レスリングは、安全であった様で、体育としても奨励されていたと言う説もあります。けれども、古代ギリシア世界の崩壊と共に、これらの競技は忘れられてしまいます。

同じ様に世界各地の民族の中でも、格闘技は原初的な物から、ルールある競技へと発達して行きました。例えば日本の相撲も、殴る蹴るのある闘技であった事が、古事記や日本書紀の記述の中に見られます。

そして近代において、日本における野球やサッカーの様に一般的なスポーツは全て、アマチュアの競技とその組織から、プロ競技とその組織が発生した様に思われがちですが、レスリングは違いました。近代においてプロレスリングの歴史は、アマチュア・レスリングの歴史よりも古いのです。つまりプロレスのほうが先に存在していて、後からアマレスが生まれたのです。レスリングにおけるプロアマの「分離」は、一八九六年のアテネでの第一回の近代オリンピックからなのです。

このプロレスとアマレスの関係は、日本の伝統的レスリングと言える大相撲と学生相撲の関係を考えれば分かりやすいと思います。当たり前ですが、大相撲の歴史は学生相撲のそれよりも遥かに古く、また学生相撲（アマチュア）が発展して大相撲（プロ）が出来たわけでもありません。

近代になり、プロレスの興行が始まったのは一八三〇年頃の七月王政期のフランスでした。〔プロレス巡業〕の原型で、それは競技レスリングとショーマンシップを組み合わせた物でした。初期のプロレスラーはザ・スティル・イーター（鉄を食う男）、ザボーン・レッカー（骨折魔）、ザ・オックス・オブ・ジ・アルプス（アルプス山脈の雄牛）等と言ったいかにもフリーク的なリングネームを名乗っていました。そしてプロレスラーの集団は、動物の曲芸や綱渡りなどを披露するサーカス、奇人変人やフリークスを見せ物にする小屋等と共に地方巡業を回り、「誰の挑戦でも受ける。この大男を投げ飛ばすことができた者には賞金五百フラン」といった賞金マッチの類をおこなっていた様です。

この巡業スタイルの〔プロレス一座〕で一番有名だったのはジーン・エクスブロヤという人物で、一八四八年に南フランスに設立したサーカス団で、エクスブロヤは伝統的なフランス式レスリングの流れを汲み、腰下から下への攻撃を禁止し、上半身のみを使って闘うレスリングを「フラット・ハンド・レスリング」と命名し、この新しいスタイルを〔プロレス一座〕の統一ルールとして採用し、最初の近代レスリングのサーカス団を結成しました。エクスブロヤが商品化したレスリングはその後、「フ

レンチ・レスリング」「クラシック・レスリング」といった名称でフランスからオーストリア・ハンガリー帝国、ロシア、イタリア、デンマーク等に普及しましたが、一八七〇年の普仏戦争でドイツ帝国が大勝、敗れたフランスが第二帝政から第三共和政へ移行すると「フレンチ・レスリング」という名称は使われなくなります。やがて「レスリング起源は古代ローマにある」と言うイタリア人レスラーのバシリオ・バルトーリの主張から、これを「グレコローマン・レスリング」と呼称し、これが現在のグレコローマン・レスリングのルーツになります。つまりグレコローマン・レスリングはその名称とは違い、古代ギリシア、ローマには関係なく、一九世紀後半の創作だったのですが、グレコローマン・レスリングそのものは一八六〇年代から一九〇〇年代までの約四〇年間、ヨーロッパのプロレス興行の主流としてその地位を確立します。そして一八九八年に、フランス人レスラーのポール・ポンズが初代世界グレコローマン王者に認定されると、ヨーロッパのプロレスのメッカはパリに移り、フォリー・ベルジェール、カジノ・ド・パリといった由緒ある劇場が、プロレス興行の舞台となり、発展して行きました。一八七三年にはパリのトーナメントにプロレス史上最初のマスクマンのレスラーが登場しています。この時代にプロレス興行のショービジネス化に拍車がかかり、ここから二十世紀初頭にかけて、多くの八百長疑惑が社会問題化し、不透明な試合結果、選手のプロフィール詐称等「プロレスが二十世紀的なショーの様式を整えていくプロセス」の中でプロレスの信用は失墜し、パリでの興業が一時禁止となったりします。

一方、アマのレスリングは、近代オリンピックの第一回大会（アテネ、一八九六年）で登場しますが、その時の正式種目は陸上、ボート、自転車、フェンシング、体操、重量挙げ、水泳、射撃、テニスとレスリングの十競技でした。「オリンピックの父」ピエール・ド・クーベルタン男爵は、当時のフランスにおけるプロレスの人気とその功罪を認識し、レスリングをオリンピックの正式種目とすることに、それほど積極的ではなかったと言われています。そしてその第一回大会ではアマチュア・レスリングとして競技ルール化される以前のアマチュアのレスリングの試合が行われましたが、それはフランスのプロフェッショナル・レスリング（グレコローマン・スタイル）に準じたルールを適用し、時間無制限、ウェート階級制なし、ポイント制も審判による判定もなしという設定で開催されたトーナメント戦で、これにはレスリング以外の種目の代表選手が出場。ドイツの陸上競技選手がイギリスの重量挙げ選手を下し、初代オリンピック王者となっています。

四年後のパリ大会ではレスリングは正式種目には含まれず、さらに四年後のセントルイス大会ではグレコローマン・スタイルが姿を消し、アメリカ代表選手のみによる全七階級によるフリー・スタイルのトーナメント戦が開催されています。

この時点ではヨーロッパのプロレスリングの主流はあくまで

もフランス発祥のグレコローマン・スタイルでしたが、アメリカのそれはイギリス流のレスリングの流れを汲むフリー・スタイルでした。これは十九世紀後半に米国と英国で普及したプロレスの近代的なスタイルで、このレスリングはキャッチと呼ばれ、グレコローマンとは異なっていました。このキャッチの起源はイギリスのランカシャー地方で十二世紀頃から伝わる「ランカシャーレスリング（キャッチ・アズ・キャッチ・キャン）」にあると言われていて、十八世紀にはベアナックル（素手）ボクシングと共にイギリスで興行も開始され、有名な「プライズ・ファイター」（現在のボクサー）ジェームス・フィグが素手、蹴り技、投げ技、締め技、噛み付き、目潰し、髪の毛つかみのある当時のプロボクシング競技の王者であると共に、プロレスリングでもスター選手でした。

グレコローマンは腰の下をつかむことを厳しく禁止していますが、キャッチレスリングはレッググリップを含め腰の上下のホールドを認めていました。その後キャッチレスリングとグレコローマンは共に人気が上がり、共にまだ競技性のあるプロのスポーツだった様です。ここから十九世紀後半以降キャッチレスリングのサブセクションが現在の「プロレス」として知られているスポーツエンターテイメントにゆっくりと変化し、その演劇性とエンターテイメント性はレスリングの能力と同等に認められてゆきます。

さてアメリカでは南北戦争（一八六一年から六五年）前後から本格的なプロレス巡業が始まっていました。勝者に懸賞金が与えられるという興行が伝えられ、キャッチ・アズ・キャッチ・キャンとグレコローマンのミックス・マッチ（三本勝負で混ぜる）や更に腰から下へのキックを認めるというような変則的なルールが各地、各試合毎に行われました。

そして現在のプロレスに直接つながって来るのは、このすぐ後の十九世紀後半にアメリカで広まったカーニバル・レスリングとされています。カーニバル・レスリングは、前記したフランスの興行形態と同じく、いわゆるサーカスの出し物の一つとして行われ、その中で、レスラーは観客の挑戦を受けて試合を行い、あるいはボクサーとの模範試合等を披露していました。この頃はレスラー同士の試合数が限られていた為、レスリングを職業として生活するには、この様なカーニバル・レスリングに参加するか、一人で旅芸人として巡業する必要があった様です。そして一八六七年一月、ニュージャージー州ニューアークでジェームス・H・マクラフリンがルイス・アインズワースを退け、プロレス最古のタイトルと言われるアメリカン・カラー＆エルボー王座を獲得しています。又、マクラフリンのライバルで同時代を生きたホーマー・レーン、ジョン・マクマホンといったレスラー達も〈チャンピオン〉を名乗って全米各地を転戦していた事が判明しています。

一八八〇年代には人気レスラーであり警察官でもあったウィリアム・マルドゥーンが警察を退職、専業という意味での最初

のプロレスラーとなっています。彼は劇場などの常設施設で行われるレスリング・ショーの発展に努力して後に「アメリカ・レスリングの父」とも呼ばれるようになります。マクラフリンもこのマルドゥーンもアマレスというものがまだ存在しなかった時代のアメリカのプロレスラーでした。この時代のアメリカのプロフェッショナル・レスリングがリアル・ファイトであったのかショーであったのかは不明です。時代的に試合映像が存在していないからですが、この二人の歩んだプロレスラーとしての功績を調べる為には数カットだけ残されているモノクロの写真、当時の新聞記事や古い文献だけで、その闘い方は、現代の我々が想像するプロレスというよりも、総合格闘技に近いものである様に見えます。

そして所謂アマレスはヨーロッパでもアメリカでも二十世紀に出現したものでしたが、アメリカではオリンピック・ムーブメントとは関係なく、アマレスが組織化され始めたのは、一八七六年にＮＡＡＡＡという団体がアマチュア・スポーツのルールに作りに着手、レスリングの二つの異なるスタイルであるグレコローマンとキャッチ・アズ・キャッチ・キャン（フリースタイル）の公式ルールを作製しましたが、ルールそのものはヨーロッパとアメリカ国内で既に行なわれていたプロレスの様式を踏襲した物でした。

一八七八年にはニューヨーク・アスレチック・クラブというアマチュアの団体がアメリカ国内で初のアマレス・トーナメントを開催しています。新組織ＡＡＵがフリー・スタイルのルールに改良を加え、後に「カレッジ・スタイル」と呼称される所の新しいレスリング・スタイルの土台を作りました。

そしてアメリカのプロレスの方ですが、一八九〇年代にはカーニバル・レスリング出身のマーティン・バーンズがストラングラー・ルイス、トム・ジェンキンスらとレスリング・ショーで人気を集め、その後バーンズはフランク・ゴッチを始めとする多くのプロレスラーを育て、レスリングの通信教育も行いました。バーンズもまた後年に、「アメリカン・レスリングの父」と呼ばれます。

二十世紀初頭よりアメリカの人口は都市に集中し始め、その結果、町から町へ渡り歩くショーは下火となります、かわりに劇場などで行われるレスリング・ショーが増え、プロレスラーは都市を中心としたテリトリー内を巡業するようになります。このことはプロレスラー間の繋がりを強めて事前に試合内容を調整する事を容易にしました。それは競技スポーツからショー・パフォーマンス行為を生じさせます。これがプロローグに記した、後にアメリカン・プロレス（アメプロ）と言われる現代に繋がるプロレスの誕生なのです。

その象徴的と言うか、エポックメーキングな試合が、一九〇八年四月に行われたヨーロッパの世界王者ジョージ・ハッケンシュミットとアメリカ王者のフランク・ゴッチの対戦です。この試合が語られてきた様にリアル・ファイトであったのかどう

かは不明です。ロシア生まれのハッケンシュミットは、英国のグレコローマン・レスラーとして知られ、プロモーターであり起業家のチャールズ・コクランによって多くの試合のブッキングを受けて、英国のトップレスラーであるトム・キャノンを破った試合でヨーロッパのグレコローマン王者の称号を獲得。一九〇五年にニューヨーク市でアメリカのヘビー級チャンピオンという触れ込みのトム・ジェンキンスに勝利した事で、最初のプロレス世界ヘビー級王者とされていました。ベルトという物理的な媒体表現を持っている事で知られている最初の世界王者です。ハッケンシュミットはレスラーとして評判となりましたが、コクランはハッケンシュミットの正統かつ支配的なレスリングのスタイルが却って群衆の関心を削ぐ恐れがあると思い、ハッケンシュミットにキャノンからショーマンシップを学び、スポーツ性ではなく娯楽のために試合に取り組むように説得したと言われています。この事はプロレスがスポーツエンターテイメント要素を全面に出す事を示しています。後にハッケンシュミットやスタニスラウス・ズビスコといったヨーロッパの本格派の強豪レスラーの多くはアメリカに渡り、トム・ジェンキンス、フランク・ゴッチ、アド・サンテル等アメリカのプロレスラーと対戦し、ショー・レスリングを盛り上げ、ハッケンシュミットとフランク・ゴッチの対戦でピークを迎えます。

ところが米国でのプロレスビジネスは一九一三年ゴッチが引退する頃に衰退に向かいます。一般の人々の目を魅了する新しいリングのスーパースターが現れなかった為ですが、その正当性と競争力のあるスポーツとしての地位に対して広範な疑念が表明されたからでもあります。実際に当時のレスラーは試合の大部分が偽造されたものと語っています。

一九二〇年代になるとエド・ルイス、トーツ・モント、ビリー・サンドウが独自のプロモーションを形成し、ファンを引き付ける為にリング内の事項を変更します。数百名のプロレスラーを配下にして、プロレスラー同士で架空のストーリー（最も分かりやすいのは「善玉」と「悪玉」の闘い）を演じさせ、事前に様々な調整をすることにより、複数の試合からなる興行を行いました。更にタッグチームのレスリングを普及させ、レフェリーの気を散らすなどの新しい戦術を導入して、試合をよりエキサイティングにしました。二〇年代後半にはギミックや派手なサブミッションホールド等でビジネスの成功を呼び、やがて武器としての椅子攻撃を開発して、より暴力的なスタイルに切り替えて行きました。又、女子プロレスや泥レスも登場しています。

これらによりプロレスの人気は高まりましたが、一方、報道、賭博など社会的な場においてプロレスが普通の意味でのスポーツとして扱われる機会は激減します。

以上を簡単に纏めますと、近代のレスリングはプロレスとして誕生しますが、そのプロレスが興行として成り立つにつれ、ショー的要素が多く加わり続け、その純粋な競技部分はアマチ

ュアのレスリングに移行し、競技ルールが確立されていったと言えます。

3　テリーの経歴と追悼

テリー・ファンクは、一九四四年六月にプロレスラーのドリー・ファンク・シニアの次男として生まれ、兄のドリー・ファンク・ジュニアと共にレスリングの英才教育を受けながら、ウエウト・テキサス州立大学でアメリカンフットボール選手として活動後、一九六五年にプロレスラーとしてデビュー、父がプロモートしていたテキサス州アマリロ地区にてプロレスのキャリアを積みました。父のシニアはレスラーとしてはスター選手ではありませんでしたが、二人の息子をスター選手に押し上げ、プロモーターとしての活躍で、当時のプロレス界に重きを置いて行きました。

この時期のアメリカン・プロレスは二章で述べた様に、二十世紀初頭から続くプロレスの流れを受け継ぎ、一九四八年に設立された新ＮＷＡ（ナショナル・レスリング・アライアンス＝全米レスリング協会）を中心に運営されていました。ショーなのかスポーツ競技なのかは曖昧にしたままでしたが、明らかにエンターテイメントでした。そして認定した世界王座を正当化するためにフランク・ゴッチを初代王者とし、二代目以降は適当に過去の団体の王者を継ぎ接ぎしてルー・テーズに至る系譜を作り上げたのです。

あるいはこれはプロボクシング界に対するギミックであったかもしれません。プロボクシングは一八九二年にグローブを着用（クインズベリールール）したヘビー級選手権が行われ、ジム・コーベットがベアナックル（素手）時代の最後の王者で、初代王者に認定されたジョン・Ｌ・サリバンから王座を奪い、そこから連綿と王座が続いていました。

そしてテーズを第三十八代王者として認定し、以後はここからＮＷＡ世界王者の代数をカウントして行く様になります。テリーの兄のドリーが、一九六九年に第四十六代ＮＷＡ世界ヘビー級王者となり、四年程維持し、王座を明け渡すと、一九七五年にはテリーが五十一代王座を獲得します。史上初の兄弟世界王者を獲得したファンク一家はこのショープロレス組織における中心的な存在でした。

ではＮＷＡ世界王者とは何であったのか？これは、プロボクシング等のスポーツ競技の王者とは異なりただ強いだけでは勤まりませんでした。肉体的な強さは当然求められますが、対戦相手を完封圧倒してはならず、常に相手の良さを引き出す事が必要とされました。加盟する傘下のエリア興行を巡回しながら、地元のスター選手と激戦を演じ、その地のファンを熱狂させ盛り上げる為には、あらゆるスタイルに対応できる技術を持ち、受けの美学といえるファイトスタイルを保つのですが、これは怪我を頻発させる代償を伴っています。義務と制約の多い役割

ですが、これをこなさなければ傘下のプロモーション組織の合意は得られず、王座にいる事は不可能でした。日本においては絶大なベビーフェイス人気を博したテリーも、本国アメリカでは肉体労働者風のワイルドさを強調したラフファイト主体のスタイルで、地元のアマリロ地区以外では主にヒールとして活躍し、各地のヒーローと流血の抗争ショーを繰り広げています。業界誌の悪党人気部門では常に上位にランキングされていました。

「冷静沈着でスマート」を売りにしたドリーに対して、「粗削りで、やんちゃな熱いファイト」を売りにしたテリーの兄弟は「ザ・ファンクス」と言うタッグチームでも活躍し、一九七〇年の来日から人気を博しましたが、一九七七年十二月に全日本プロレスで開催された世界オープンタッグ選手権にはザ・ファンクスで出場し、ブッチャー&ザ・シークの史上最凶悪コンビを退けて優勝。この時ブッチャーによるフォークを使った凶器攻撃で、右腕を負傷しながらも「テキサス魂」で真っ向勝負を挑む雄姿が、男女を問わず熱狂的なファンを獲得して親衛隊も生まれました。以降一九八〇年代前半にかけてファンクスは全日本のリングに継続参戦し、爆発的人気を博しました。テリーは日本で最も成功した外国人レスラーの一人と言えます。

テリーは超一流のレスラーとしての名声を得た後も、新しい事に果敢にチャレンジし、リビング・レジェンド（生ける伝説）と讃えられ、若手育成にも力を入れています。晩年まで変わらなかったプロレスに対する熱い姿勢こそが、アメリカ人にはキャプテン・アメリカ的な良き男の魂を感じさせ、日本人にも「強く美しい、熱き正義のアメリカの幻想」を抱かせたレスラーだったのだと思います。それこそが若い時の日本での絶大な人気の源だったと思います。

その後何度かの現役引退、復帰を繰り返しましたが、ＮＷＡと言う組織が衰えてニューヨークがプロレスの中心となる中で、カウボーイ・ギミックのヒールとしてハルク・ホーガン等と抗争を展開し活躍しました。二〇〇九年、兄ドリーと共に、現在の全米プロレスのトップ組織であるＷＷＥの殿堂に迎えられています。又、俳優活動でも〔オーバー・ザ・トップ〕等数本の映画やドラマにも出演しています。

4　プロレスの現在と道南プロレス

今年（令和六年）の四月二十七日に亀田市民プラザで開催された「道南プロレス」を見に行きました。今は地方のプロレス団体が乱立している状況ではあるようですが、函館を中心に興行をおこなっている団体です。高い水準のプロレス・パフォーマンスをこなしており、頑張ってもらいたいと思います。

お客様には子供たちが多く、純粋の初期のプロレスファンとして熱狂していたのは好ましかったです。しかし私の周りではプロレスに対する偏見は旧態依然の物があります。前章まで述

べました様に、曖昧なままのプロレスに理解を求めるのが難しく、結局、プロレスを見たこともなく、あまり関心の無い妻だけを同伴しました。プロレスの勝敗の仕組みを説明して、芝居見物と同じだよ、と連れて行った妻は、それでも終了後感想を聞くと、面白かったと答えました。

現在、日本のプロレス人気は一九九〇年頃のピーク時から、長期低迷しています。この為、日本での活動に区切りをつけて、幾人かの有力な日本人レスラーもアメリカに渡っています。多くの新規の観衆を集める為には、観客意識を変えて行くしかなく、それにはプロレス団体側の観衆に向き合うスタンスが、誠実で地道である必要があります。

以上で、このノンフィクションは完了でしたが、現在（令和六年九月）、ネットフリックスで話題になっているダンプ松本をモデルにした女子プロレスのドラマ「極悪女王」の中で多用される「ブック」と言う言葉が、次の様に波紋を呼んでいると言う記事が掲載されて、今さらと思いつつ関心を惹きました。

以下に転記します。

【劇中で多用される〝ブック〟という言葉があるのですが、これに困惑する視聴者もいるようです。これは、プロレス界に存在するとされる〝台本〟のことですが、プロレスファンの間でもこの話題は議論、ケンカが絶えない禁断の単語なんです」（プロレスムック編集者）〝ブック〟は、『試合進行に関する取り決め』を表わす言葉なので、勝敗に直結するものだ。さらに言えば、プロレスの試合の勝敗はあらかじめ決まっている、という認識を念頭に置いた言葉でもある。

例えば、『興行を盛り上げるため、ベビーフェイス（善玉）がヒール（悪玉）に勝って大団円を目指す』、逆に、『団体がコントロールしにくくなったベビーをヒールが倒して下克上する』など…「この認識自体が、プロレスファンの間でも意見の分かれるところなんですよ。『あくまでも真剣勝負で、八百長はない』とするファン、『エンターテイメントなんだからあっても構わない』とするファンなど、それぞれのスタンスがあり、延々と議論されている命題でもあります。

ただ、近年は『〝ブック〟という言葉は業界では使わない』という説が主流なんですが、ドラマでは使われまくっていましたね。『極悪女王』の舞台となる、かつて実在したプロレス団体・全日本女子プロレス（通称全女）は〝ガチンコ（団体内部ではピストル。抑え込みの真剣勝負）〟はありましたが、当時の様子をそのまま反映するとドラマ的には地味なので、〝ブック〟の存在を認めた脚本になったのではないでしょうか」劇中では水野絵梨奈演じるジャガー横田が「ブックなしでクラッシュとやらせろ」と発言。また、勝つ方が決まっているのに、あるレスラーが暴走して勝利した際に「ブック破りだ」と責められるなど、この禁断の言葉―〝ブック〟が随所に登場する。Xではプロレスファンが戸惑いつつも〝ブック〟に言及している声が多くある。《プロレス界に『ブック』なんて言葉はないはずなのにプロレ

スラーが監修しているドラマ作中にブックブックが飛び交っているのはＯＫなのかね》

《ブックなしでクラッシュとやらせろ　とかは抵抗あるなぁ…》

《プロレスにブックが存在するっていうのが広まってしまう懸念がある気がするんだよなぁ》

ネットの記事をそのまま転載しましたが、一時期はブックに限らず、作り事を意味するケーファイ、アングル。リアル・ファイトを意味するシュート、セメント等、色々なプロレス隠語が表に出て、公表されていたと思っていましたが、世の中的には、まだこの位の認識なのだと思いました。

しかし、これらの事が話題となっているのは、日本のプロレス界にとっては良い事だと私は思います。引き続いて表面的な勝ち負けを扱った物ではなく、プロレスの裏側と言うか、真実を映し出す作品が多く出る事を望みます。日本でも全てがオープンになり、これらの事が一般に浸透して、見る側の認識がクリアになれば良いのだろうと思います。その上にこそ極上のプロレス・エンターテイメント、優れた娯楽のパフォーマンスが開花されると思うからです。（了）

ノンフィクション　佳作

見る旅・乗る旅・偲ぶ旅、江差線

水関　清

かつて北海道函館市の五稜郭駅から檜山郡江差町の江差駅までを結んでいたJR北海道の旧・江差線。その建設の機運は、一九〇九年（明治四二年）、上磯村の峨朗の山中で発見された石灰石を函館に運ぶ目的で、函館区の有志が鉄道院に敷設を請願したのを契機として盛り上がった。これを承けて一九一〇年（明治四三年）から、本来ならその軌間は七六二㎜である軽便鉄道法を準用して建設され、一九一三年（大正二年）九月一五日、五稜郭駅 ― 上磯駅間の上磯軽便線として開業した。鉄道開業時の実際の軌間は、一，〇六七㎜であった。こうして産声を上げた鉄道を、改正鉄道敷設法別表第一二九号前段に規定する予定線（「渡島國上磯ヨリ木古内ヲ經テ江差ニ至ル鐵道」）として、一九三〇年（昭和五年）からの工事によって、檜山郡江差町の江差駅まで延長したものが江差線で、一九三六年（昭和一一年）一一月一〇日に江差駅まで全通した。

このうち木古内駅― 江差駅間は、二〇一四年（平成二六年）五月一二日に廃止されることになったが、廃止直前の段階で一日六往復の列車が設定され、うち四往復は函館に直通するという、廃止予定線としては手厚いダイヤが組まれていた。JR北海道の廃線としては、一九九五年（平成七年）九月四日に廃止された深名線（全線）以来一九年ぶりのことで、北海道内の廃線としても二〇〇六年（平成一八年）四月二一日の北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀河線（旧・国鉄池北線）の全線廃止以来、八年ぶりのことであった。

廃止を翌春に控えた秋の一日、江差線を堪能するために、早朝の江差駅を訪れた。以前なら、一～二台が止まっているだけだった駅前駐車場は、ほぼ満車状態であった。近隣の空き地になんとか駐車して、ホームに駆け込んだ私の前で、二両編成の列車は動き始めた。

江差駅、午前六時四四分四五秒。どの窓にも、乗客の姿が見えるほどの高い乗車率である。次の停車駅である、上ノ国駅への緩い下り勾配を目指してすべり出していた後方車両の窓から、身を乗り出すようにしながら満面の笑みをたたえて、ビデオカメラを回す乗客の姿が見える。

気を取り直して、並走する道路から江差線を走る列車の姿

を撮影することにする。上ノ国駅の次の駅・中須田駅と、さらに次の駅である桂岡駅との間にある踏切で、私を置いて行った列車と出会うことも悔しいが、先ほどのビデオ撮影の乗客の姿が、また眼に入るのは、二重に悔しい。

稲穂が頭を垂れる水田のそばを走る列車の向こう側には、上ノ国の名勝・勝山のなだらかな稜線が見え、その上には風車が並んでいる。次に停車する宮越駅の付近から、江差線には天ノ川が寄り添ってくる。宮越駅と次の湯ノ岱駅までの間で列車は、第二天ノ川橋梁と第一天ノ川橋梁というふたつの長い橋梁を通る。

秋の日は刻々と高度を上げてはいるが、長い年月をかけて天ノ川が刻んだ渓谷の底を流れる清流には、まだ陽光はとどいていない。路肩に車を停めて、第一天ノ川橋梁を渡る列車の姿を撮影する。陽光をまぶしく反射する山頂から中腹までと、中腹から川面までのダークトーンの橋梁とからなる構図。やむなく橋梁を画面やや上方に据えた構図を選んで、走り去る列車を切り取る。

蛇行する天ノ川の本流を、連続する長大橋梁で渡り切った列車は、湯ノ岱駅への下り勾配にかかるが、並走する道路を走る車のほうは、新しく開通した「天の川きららトンネル」に入るので、列車とはしばしのお別れである。トンネルを抜けて車が高台に出ると、道路右方の切通しの中から出てきて、湯ノ岱駅にすべり込もうとする列車の姿を眼下に望むことができる。

江差〜木古内間で唯一、列車のすれ違いが出来る途中駅である湯ノ岱駅には、駅員が常駐している。江差駅からこの湯ノ岱駅までの区間二〇．七kmは、列車集中制御装置（CTC：Centralized Traffic Control）も信号もない単線区間のため、保安の必要上、非自動閉塞方式が採用されている。「閉塞」という衝突回避のための保安システムとは、線路をいくつかの区間に区切って、一区間には一列車しか入れないという方式のことである。江差線の場合、この湯ノ岱〜江差間二〇．七kmが一つの閉塞区間となっている。その閉塞区間に入る車両には通票の保持が求められ、それはスタフと呼ばれる。スタフは鉄製でドーナツ型をしており、皮革製の頑丈な「カバンキャリア」に入れられて、受け渡しされる。江差線には一日六往復の列車が運行するため、この湯ノ岱駅では、通常運行時なら一日に一二回、列車が到着する度に、スタフ入りのキャリアが運転手と駅員の間で受け渡しされる光景を見ることができる。ちなみにJR北海道でこの方式の衝突防止策をとっているのは、ほかに留萌本線の留萌〜増毛間と札沼線の石狩月形〜新十津川間が残るのみで、全国的にみてもきわめて珍しい存在となっている。

なお列車到着後、直ちに対向列車を発車させる場合には、スタフを閉塞器に戻すことなく対向列車の運転士に渡すことができる「折り返し使用」が認められている。江差線の場合、江差発・六時四四分と木古内発・六時四三分の列車が、湯ノ岱で

七時一八分から七時一九分にかけてすれ違う場合と、次の江差発・八時九分と次の木古内発・八時八分発の列車が、湯ノ岱で八時四五分から八時四六分にかけてすれ違う場合の一日二回、この折り返し使用という、さらに珍しい光景に出合えるのである。

ここで、ひとまず江差駅に戻って、後発の列車に乗ることにする。

江差発一〇時二七分の列車に乗り込もうとして驚いた。客室から押し出された乗客がデッキにまで立っているのである。かろうじて運転席後方の運賃支払い箱の前に、立つ場所を確保した。江差を定刻に発車した列車は、しずしずと防砂林の中を進み、徐々にスピードを上げていく。運転席右方の小窓の中には、松前大島の整った輪郭があらわれ、進行方向右側の乗降口にある小窓からは、海上長く横たわる奥尻島の姿も望めるようになる。その小窓から振り返ると、江差の街並みと海上に翼を広げた鴎島の穏やかな姿も遠望できる。このように、江差を出てから二分後、内郷浜の内陸を走る十秒間ほどの車窓に、檜山の海岸線からの絶景の一部が凝縮されているのである。

列車は再び砂防林の中をほぼ直線的に横切ると速度を落とし始め、ゆるやかな左カーブを描いて上ノ国着一〇時三四分一五秒。ホームに立つ八人の姿が見える。停車時間は三〇秒。この混雑である。ひやひやしながら見ていたが、誰も乗らない、誰も降りない。どうやら、江差線の列車を撮影する人らしい。運転手さんのもらしたひと言。

「江差線の廃止が決まってから、こうなんだ。一〇時二七分発の列車ですらこうなんだ。以前なら、この時間に江差から乗る乗客は、一人か二人で、ゼロの時のこともあったね。江差線のほうはなーんも変わっていないけど、無くなると決まってからのお客さんの数はみごとなもんだ。」

私の隣の運転席後方に陣どっていた中年の男性が同調する。聞けば、福島へ単身赴任中の身とのこと。去年の今頃は、のんびりしていたが、今年は窓から身を乗り出してビデオを回したりするお客さんが見られるせいか、列車が生き生きとして見えるという。

列車は、「新村」と呼ばれる地区の田園地帯を貫く直線を快走している。右窓には、頭を垂れる稲穂と丘の上に並ぶ風車の姿が望まれ、左窓に面した道道（どうどう）には、並走する列車の姿を撮影する車の列が続く。そのナンバーから、レンタカーと知れる車も混じる。

中須田着一〇時三八分四五秒。上ノ国と次の桂岡とのほぼ中間に位置し、周囲には水田や畑が広がる。待合室は貨物列車の車掌車を改造したもので、コンクリートの土台の上に載っている、簡素なたたずまいの駅である。この駅は、住民手作りの駅として知られる。江差線が開通した一二年後の一九四八年、付近住民の陳情の結果、一部の列車が停車する臨時乗降場が設けられることとなり、ホームと木造の駅舎が住民の手で

拵えられた。さらにその七年後には、中須田は正式に『駅』に昇格した。

中須田と同じタイプの貨物車を改造して作られた『駅舎』は、江差〜木古内間の中間駅八駅のうちで、次の桂岡と、稲穂峠を越えた木古内側の吉堀の三駅を数え、いずれも旧木造駅舎を取り壊して、一九八六年に設けられたものである。中須田『駅舎』は白に塗られた車体に斜めに黄色いストライプが走るが、桂岡『駅舎』は同じく白い車体に、黄色の一本帯が真横に配され、その一本帯を下から支えるようにして斜めに黄色いストライプが走る。そして吉堀『駅舎』は黄色く塗られた車体の窓の上下に緑の一本帯が配されている、といういでたちである。一九八六年といえば、JR発足の前年である。経費を抑えるためなのか、実用一点張りの武骨な姿の待合室の姿には、『貨車改造駅舎三兄弟』といった趣きが漂う。

田園風景の中を走って、桂岡着一〇時四二分一五秒。この駅では、進行方向左側のドアが開く。それまでのどの駅でも降車時には右側のドアが開いており、それに慣れていた満員の乗客は一瞬たじろぐ。私の左横に立っていた件の単身赴任の男性は心得たもので、ドア横から運転士後方の料金箱へと移動ずみであった。この駅でも、誰も降りず、誰も乗らない。列車到着の風を受けて、コスモスの花がホームの端で揺れている。

停車時間はわずか三〇秒、列車は次の宮越を目指して発車する。木古内まで三五kmという道路標識が見える車窓には刈り取りを終えた水田がひろがり、稲わら積みが一列に整列したり、三々五々散らばったりしている。両側から山塊がせまり、水田の幅も徐々に狭くなって天ノ川が右から寄り添ってくると、もうすぐ次の宮越駅である。

宮越着一〇時四六分一五秒。ホーム脇にある木造駅舎は山小屋風で、道道五号線から少し入ったところにある。江差線車窓のハイライトとして欠かせない、天ノ川の流れはすぐそこにあるが、ホームにいた人はだれ一人として列車に乗らず、カメラのシャッターを切ることに夢中である。

宮越発一〇時四六分四五秒。ここから次の湯ノ岱駅までの区間は、江差線沿線有数の景観で知られる。天ノ川は蛇行し始め、深い渓谷を刻み、江差線は二つの長大橋梁でこの流れを渡る。上ノ国側にある「第二天ノ川橋梁」を渡ると、天ノ川の流れは右窓から左窓に移り、次の「第一天ノ川橋梁」を超えると、流れは左窓から再び右窓へと、ふたたびその場所を移す。見上げればこんもりとした森の木々、見下ろせば光の粒が躍る天ノ川の川面。鉄橋を渡る時には列車の走行音が高まり、森の中に入るとその音は深まる、という走行音の変化と、車窓随一の景観とをあわせて楽しめるという、江差線の誇る車窓なのである。

この区間で、ユニークな人気スポットとして知られるのが、「第二天ノ川橋梁」のたもとに、まちおこしグループ『北海道夢れいる倶楽部』が一九九五年に設けた、「天ノ川」という駅

名標を備えた、ホームそっくりのモニュメントである。JRが設けた正式な駅ではないため、すべての列車が通過する。天の川という清流のほとりにあることと、その名前が銀河を喚起させるというイメージの良さとが重なり合い、「幻の駅」としてひそかな人気を保っていたが、二〇一四年の江差線廃線が伝えられてからは、この幻の駅の前の道道に、「天ノ川駅前」というバス停留所までが設けられるという人気ぶりである。

列車が寄り添っていた天ノ川と別れて切通しを抜けると、もうすぐ湯ノ岱駅である。列車到着間際に線路を渡る観光客の姿を認めた運転手が鳴らしたタイフォンの音が、線路の上を駆け抜ける。列車のすれ違いのことを「交換」と呼ぶが、江差線の廃止が報道されてからというもの、「交換時のスタフの折り返し」という、マニア的用語までが、混雑する朝の湯ノ岱駅ホームに飛び交うようになっている。

湯ノ岱着一〇時五七分。ここは列車交換設備のある、沿線唯一の駅である。運転台の時刻掲示板に「湯ノ岱駅　スタフ返納」とあるとおり、運転手がホームに立つ駅員に、スタフの収納されたタブレットを渡す。その模様を写真に写そうとして、人だかりができる。湯ノ岱駅の貫録なのか、周辺にある温泉に向かうのか、この駅では十二人が下車し、かわって七人が乗車してきた。八人目に乗りこんだSと名乗る中年男性は、江差線フリーパスの入ったストラップホルダーを運転手から受け取ると、ホームに降りて足早に駆け去った。この列車の前身となる、木古内発八時八分の江差行列車の車内に忘れていたものを、連絡を受けた運転手が保管していたものだという。早朝を除く日中は、先ほどのスタフを携行した列車のみがこの区間を往復するという、簡素にしてハードな運行形態だからこそ可能な気配りであろう。

湯ノ岱発一〇時五八分。はじめて停車時間一分での発車である。ホームで五歳くらいの男の子とその弟と思しきふたりが、走り去ろうとする列車に向かって、懸命に手を振る。右隣には大きな荷物を抱えた三十代の御夫婦と思われるふたりが、その姿に目を細めている。運転席左横の小窓から、沈もうとする下弦の月がちらりと見える。この列車は、江差〜木古内間で上下各一本だけの快速列車であり、先に発車した湯ノ岱から終点・木古内までの間はノンストップである。

湯ノ岱駅から数百メートルほど木古内方面に走ったところで列車は、木挽ノ沢から流れ出して天ノ川に注ぐ支流・神明ノ沢川に架けられた短い橋を渡る。レールを渡る走行音が、ゴーという通奏低音にかわる。この、湯ノ岱駅から三五〇mの付近が、江差、木古内それぞれの駅から二一・〇五kmの距離にある地点で、江差〜木古内間のちょうど中間にあたる。一〇時五九分一五秒に、そこを通過した。

この支流をその源へと遡って行って山越えをすると、そこは厚沢部町館町地区である。松前藩の築城した館城のあったところで、一八六八年（明治元年）榎本武揚率いる旧幕府脱走

軍による松前藩の居城・福山城への攻撃を逃れて、藩主らが海路対岸の津軽半島に避難するまでの居城としたことで知られる。

その山塊を左窓に見上げながら走り続ける列車は、次の神明駅の木造駅舎と板張りホームを一一時二分三〇秒に通過すると、エンジン音が高く唸りはじめて登り勾配にかかる。この付近から列車は、天ノ川支流である鰔川ともつれ合うようにしてこの支流を遡っていく。悠々とした川幅を誇っていた天ノ川も、このあたりでは、深い森の中で途切れがちに見える、か細い流れになっている。この光景を見るとあらためて、「川は交通路の母」であることに納得する。川が気の遠くなるほどの時間をかけて刻んだ空間があるからこそ、線路が引け、道路が敷けるのだ。

神明〜吉堀間の鉄道の勾配は、二五‰の急勾配(一，〇〇〇メートル走ると二五メートル上がる)である。稲穂峠を稲穂トンネルと四箇所の覆道で越えると、左窓から、天ノ川支流の膳棚川を遡って吉堀トンネルで稲穂峠を越えた道道五号線が寄り添ってきて、これと交差する。江差〜木古内間唯一のオーバークロスであるが、峠越えの際に鉄道と道路がこのように交叉するのは、鉄路の上を走る鉄道と道路の上を走る自動車との特性の差を示す、象徴的な現象である。磨かれた平滑な線路の上を、重い車両を乗せた車輪で走る鉄道の場合、空転を避けるためにあまり勾配を急には出来ないのに対して、舗装道路をゴムタイヤで走る自動車の場合には摩擦が大きく、鉄道だと空転の恐れがある急勾配でも楽々と登っていくことが出来るからなのである。江差線の場合にも型通りに、勾配が緩やかな鉄道がより高い方を通り、急勾配を苦にしない自動車の方が、低いところを走るため、鉄道は、道路をオーバークロスしている。

この難所を超えた列車は、エンジンの音も軽やかになって速度を上げると、木古内川支流に沿って次の吉堀を目指す。吉堀駅舎は黄色く塗られた車体の窓の上下に緑の一本帯が配された、『貨車改造駅舎三兄弟』の中でもその鮮やかな色合いで、まさに『出色の』駅である。一一時二二分三〇秒にそこを通過した。

吉堀駅は、駅前広場を介して道道五号線に面している。この駅付近のもう一つの見どころは、並走する道道の路肩に設置された、道路の案内標識である。標識は、青色に塗られた地の中に白抜きの数字が浮かぶおなじみのものであるが、興味をひくのはその表示である。まず、上向き矢印の線の中ほどには、六角形で囲まれた道道ナンバーを示す5の数字が組み込まれ、その先端には、『国道228号線』と『江差』と『上ノ国』がならんで表示されている。次にこれと直交する形で、左右方向に矢印が伸び、右向き矢印の先には『瓜谷』という部落名が、左向き矢印の先には『吉堀駅』と駅名が大書されている。この案内標識を素直にみると、左折して吉堀駅へ至る道があると思い

こみそうだが、案内標識のすぐ下にある菱形の警戒標識は、『吉堀駅』と道道が面しているために、三叉路を示す「ト」の字型のものとなっている。さらにその下には、道路幅の狭まりを示す「八」の字型の警戒標識も見える。道道を走る車からは見落としてしまいそうな『吉堀駅』であるが、その駅前の案内標識は、これらふたつの警戒標識を従えた、縦三m・横五mほどの堂々たる大きさの行き先表示なのである。

吉堀を過ぎると列車は、樹林と水田に挟まれた景色の中を走る。右窓には深緑色、左窓には稲穂の黄金色が映り込み、山間から平野部に走り出た爽快感が満ちてくる。次の渡島鶴岡の手前には、ここ木古内町の姉妹都市である山形県鶴岡市の禅宝寺の末寺として、一九〇二年（明治三五年）に本堂が建立され、お寺の境内を列車が横切るという全国でもまれな光景が見られることで知られる、禅燈寺がある。稲穂の波が途切れて、木立の中から禅燈寺の、密迹金剛と那延金剛の二体の仁王像がおさめられた山門が一瞬現れると、次に鶴岡市と木古内町との友好を記念して設けられた本格的な日本庭園とみまがうほどの鶴岡農村公園、そして渡島鶴岡で、一一時二六分四五秒にそこを通過した。ここ木古内町鶴岡地区は、一八八五年（明治一八年）より旧・庄内藩士一〇五戸が入植した所である。

先の吉堀駅の近くで瓜谷川と合流した木古内川は、このあたりに来るとぐっと川幅を広げ、その河川敷の上に敷かれた江差線は、建設中の北海道新幹線の高架をくぐり、海峡線の堂々とした複線に寄り添いながら、木古内駅を目指す。一〇時二七分江差駅発の快速列車は、文字通りに快走して、一一時三〇分木古内駅に到着した。両駅間四二・一kmを、所要一時間三分で駆け抜けたこの快速列車の表定速度（平均速度）は、四〇・〇九km／時。表定速度三〇km台もまれではないローカル線の中では、よく健闘している。

木古内駅のホームで背伸びをしていると、反対側に函館発江差行きの普通列車が入線してきた。一時間余を立ち通しで過ごした後なので、座席が恋しい。ところが、二両編成の列車は、ほぼ満席。かなりの客が降車したものの、同じくらいの乗客が乗りこむ。幸運にも入り口近くのロングシートが確保できたので、江差で購入したまま、ここまで混雑のためにひらく機会のなかったお弁当を味わいながら、江差までの車窓を楽しむことにする。木古内駅発一一時四八分の列車で、この日三度目となる江差を目指して出発した。

その九年後の二〇二三年春に、旧・江差線の廃線跡を訪問した。新幹線の駅が新設され、JR当時の駅舎は道南いさりび鉄道に移管された木古内駅を除くと、次の渡島鶴岡から江差までの駅の中で、当時の駅舎が残っているのは、道南トロッコ鉄道として使われている旧・渡島鶴岡駅、線路は撤去されたがホーム上に駅舎がかろうじて残されている旧・吉堀駅、代替バスの待合室に転用された旧・湯ノ岱駅、そして、当時併設されていた商工会の建物が改築後にも残る旧・上ノ国駅である。起終

点駅を務めていた旧・江差駅舎は撤去されており、その片隅に江差駅の駅名標とレール・車止めが保存されている。

線路跡の路盤は、拡幅された道道五号線の一部にのみこまれている部分のほか、長大な道路トンネルの脇にありし日の姿が遺されている。その最大のものは、道道五号と旧・江差線とが、からみあうようにして分水嶺となる稲穂峠を越えていた、神明駅と吉堀駅との間の区間である。当時の道道五号線は、天ノ川支流の膳棚川を遡って吉堀トンネルで稲穂峠を越え、木古内川支流に沿って吉堀を目指し、一方の江差線は、膳棚川とは別の天ノ川の支流である鰔川ともつれ合うようにしてこの支流を遡り、稲穂トンネルと四箇所の覆道で稲穂峠を越えて木古内側に至り、峠のすぐ下で道道五号線と再会して、ともに吉堀駅を目指していた。

この道道五号線と江差線との交叉箇所が、先に紹介した鉄道が道路を跨ぐ、江差線唯一のオーバークロスであったが、廃線後には早々に撤去されて拡幅された道道五号の一部となり、そこから江差方面へとゆるやかにカーブしながら、長大な新吉堀トンネルへと向かう区間にのみこまれている。トンネル入り口に向かって、路盤が跨いでいるのが、旧・江差線時代の四箇所の覆道の一部であり、ほかにもトンネル入り口を見上げる東側斜面に、痛ましくもありし日の姿を、錆びつきながらとどめている。

鉄道作家、宮脇俊三は、「終着駅の旅情は、そこに至るまでの行程から生まれる」と喝破したが、終着駅に限らず旅情とは、沿線風景・乗客・列車・駅などの要因から複合的に醸し出されるものである。江差線の場合も、檜山の木材や海産物などを運ぶ貨物輸送手段となったほか、檜山と函館を往来する住民の足としても親しまれてきた。その歴史のなかで、鉄道に夢を託して地域で暮らした人々の姿は、鉄道をなかだちとして、人々の脳裏に刻み込まれたのである。

廃止の報を聞いて以来の、江差線の混雑ぶりがそれを証明している。素朴な沿線風景、天ノ川が刻んだ渓谷に訪れる四季の美しさ、貨車改造駅舎や木造駅舎などのユニークな駅のたたずまい、今は珍しいスタフ交換という、働く人の姿が前面に見える安全運行のための営み、など、随所に、鉄道のある暮らしが顔をのぞかせていた。

鉄道が廃止されて駅が消えた街並みは、ほどなく自然に帰り、その跡形をたどることすら難しくなることもまれでないが、人々の思い出の中に、列車は走り続けているのである。

選評

木村　裕俊

今年度の「ノンフィクション部門」での応募総数は6篇でした。数としては少なかったように思いますが、内容的にも充実し、筆力もそれなりに感じた作品揃いで、読み応えのある作品が多かったように思います。

応募作品を拝見させて頂きまして、いくつかの観点から比較検討させて頂きまして、最終的に以下の4篇を選考いたしました。

入選

『話すように読む』

佐藤　健

ある日所属するボランティア団体を通じて「朗読録音奉仕奨励賞」に受賞したという通知を受けました。そのきっかけとなったのが、「朗読講座」に参加した経緯とその体験であり、その後に入ったボランティア団体の活動でした。その団体を通じて『函館市視覚障害者図書館』で、デジタル音訳図書の作成活動を続けており、そのご苦労が頭書の結果となって現われ、今回のノンフィクション作品としてまとめ、応募されたものだといいます。

本作品の進め方は、練習風景やボランティア活動の内容を出来るだけ細かく積み重ね、詳しく説明するという手法でした。そのため、作品全体には安定感があり、申し分ないのですが、報告事項が多くなると、文章がやや冗長となり、平板で感情をそがれる場面もあります。

「朗読講座」での体験と、その後のボランティア団体でのデジタル音訳図書作成の苦労については、詳細な作業内容は深く理解出来ませんでしたが、大変な活動であったことは、感覚としてよく理解できました。しかし、その一つ一つの内容は、本文にも詳しく述べられていますが、「報告書」的で難しく、読み手を置いてきぼりにしているように感じられた所もあり、朗読にしろ、校正にしろ、録音にしろ、その内容・拘束時間・そしてそうした事を全てのみ込んで進めていくという本人の努力というものに一緒に共感している所だけに、僅かに惜しい気がしています。しかし、全体としては、完成度の高い作品だと思われます。

入選

「ワシを見る」

竹中　亜弥

冬になると川にサケが遡上し、それを狙ったワシ・タカが、北からやって来ます。道南でもオオワシやオジロワシを見ることが出来るのだというのです。

作者がオジロワシと初めて対面したのは八雲の遊楽部川だったそうだが、車の中から観察していたのですが、オジロワシと偶々目が合い、すごい迫力で睨まれ、動けなくなったと述べていました。鳥がいる条件は、水辺で、エサがあり、身を隠せる樹木があることだそうです。筆者はそういう所を探しては、カメラで何枚もの写真を撮って、ご夫君と車であちこちに出掛けては行動記録を整理しているようでした。そうしたワシ・タカを見る目が、自然の中でと

ても生き生きとした、新鮮な文章となって現わされているのだろうと思いました。

ある時、道南の川で、八雲以外にもワシ・タカが来ている川があるのではないかと考えるようになり、サケの上る川、孵化場のある所などを調べ、北斗市の茂辺地川と知内町の知内川を調査しようと出かけたそうです。ワシ・タカは、「ハンノキ」が好きなのか、大概はその種の木によくとまっているようです。茂辺地川でも「ハンノキ」を見つけて探してみたら、案の定いたといいます。茂辺地川は八雲の遊楽部川に比べると、ワシ・タカの生息域が狭く感じられましたが、その分自然の濃度が濃く詰まっていたように感じたといいますし、良い写真が沢山撮れた気がするとも、述べておられました。

このようにワシ・タカへの、あるいは自然への観察眼が、文章が進むにつれ、詳細に、説明され、美しい光景が、共有されてきているように思います。知内川でも、川辺の木の上にワシがいました。川辺の大きな一本の木にまとまって何羽もとまっていて、作者はまるで「ワシのなる木」のようだ、と表現していました。川にかかった橋の上から観察していると、川面に積もった雪の上から急にワシが飛び立ち、思わずシャッターを切り、それをきっかけに沢山の写真を撮ることが出来たと、述べていました。恐らくは、ワシが飛び立つ瞬間の迫力ある写真や大空を舞う美しい写真だったのだろうと想像できます。

その後にも、八雲や豊浦などに通っていたようです。八雲では新幹線工事が最盛期になっており、その工事により環境が変えられ、サケ・マスにとっても、ワシ・タカにとっても望まない環境変化だったろうと気づかいを示していました。こうした公共工事には特に、工事開始前から工事関係者、自治体、地域住民等が細かく気を配って、工事計画を立てて欲しいものです。

最後に「今年もまた、ワシを見に行きたい。」と述べておられました。良い写真をたくさん撮ってください。そしてまた、報告してください。

佳作

「テリー・ファンクの追悼と プロレスの現在」

高橋　剛治

懐かしい名前が出て来たな、と思いながら読んでいました。とは言っても、それ程のプロレスファンではありません。少年時代に近所の家でテレビを見せて頂いた時の、力道山をはじめとしたプロレスラーに強い印象を受けた世代の一人だということです。ですから、テリーファンクの名前は聞いたことはあっても、その知識は、ほとんどありません。

それに比べ作者は、どうも「玄人はだし」のようです。その作者が、「テリーファンクの追悼」というプロレス雑誌を通じて、テリーファンクの活躍とプロレスの在り方について、日本プロレス界へ問題提起を投げ掛けている作品になっているようです。といっても、その中身は、明るく・テンポよく、誰にでも楽しく読めそうな内容になっているのです。

筆者の主張によると、プロレスとはエン

ターテインメント（人々を楽しませる娯楽・サービス）であり、リアル・ファイト（真剣勝負）ではない。プロレスは勝負の形式を取るが、あらかじめ作られた筋書きに沿って行われるショービジネスであり、この事を正式に公表すべきである、と主張しています。

「プロレスは、エンターテインメントでショービジネスである。」このことをきちんと正式に公表しなければ、「いつまでもプロレスの勝負は『インチキ』で『八百長』だ、などと悪いレッテルが貼られたままでありプロレスファンとしては悲しいものがある。」と嘆いているのです。そして「このままでは観客動員数に影響する。」、「アメリカではすでに早くから公表しており、『興行団体』として届け出ているのだ。」とも述べています。

こうした主張の後に、プロレスの起源と歴史について触れている。古代ギリシャのオリンピックの競技でもあったという、総合格闘技「パン・クラチオン」からきているという。また、近代のレスリングの起源は少し変わっている。プロレスの方が先に存在しており、アマチュア・レスリングへの移行は、ショー的要素を取り除き、ルールを確立して出来上がっていったのだといいます。プロレスはヨーロッパでうまれ、フランス、イギリスなどでの興行を成功させ、その後アメリカに渡って行きました。アメリカではＮＷＡ協会を中心に運営していくエンターテインメントによるショーが主役で、世界王者がルー・テーズに至る系譜を作り、その後にドリー・ファンク、テリー・ファンク兄弟が活躍するようになったのでした。それらの経緯についても詳しく述べています。筆者の相当に詳しい解説とプロレスに合わせたのか、テンポの速い・小気味いい文脈にツイ引き込まれていく魅力があります。

さて、最後に日本のプロレス界に戻って語っています。現在日本のプロレス人気は、長期的に低迷しており、新規の観衆を集めるためには、主催者側の誠実で地道なスタンスが必要だと述べています。つまり頭書の主張に戻って「プロレスはエンターテインメントであって、リアル・ファイトではないことを公表して。」初心に返るべきだとしています。

また今、ネット上で話題になっているという女子プロレスのドラマの中で、エンターテインメントを暴露するような言動のシーンが使われているが、もっと真実を映し出し、全てがオープンになって見る側の認識がクリアになれば、娯楽のパフォーマンスも変わって来るだろうと主張していました。

佳作

「見る旅・乗る旅・偲ぶ旅、江差線」

水関　清

かつて、9年前にはまだ走っていた江差線沿線を昨年春に訪れ、廃止直前に乗った時の思い出をルポルタージュ形式で書いた作品です。導入部では、江差線建設の歴史にも触れられていました。

江差線は、大正2年（１９１３）に上磯までを軽便鉄道で開通し、昭和5年（１９３０）には木古内迄線路が伸びました。江

差まで全線開通したのは、昭和１１年（１９３６）であったといいます。そして廃止されたのが２０１４年であり、開業期間はわずか７８年で、その姿を消したのであった。実はこの当時私もある文芸誌からの要請を受けて、若い（幼い）頃の江差線の思い出を綴ったことがあり、本作品を懐かしく拝見させて頂きました。

９年前の筆者は廃線前の江差線を堪能するため、江差～木古内間を3往復も乗っていたようです。そのせいか、報告している文章には、混み合った車内の状況や、車窓からの景色が生きいきと明るく報告されていました。

筆者の方は、鉄道関係の方か熱烈マニアの方でしょうか、各駅での停・発車時刻を秒単位で計測していましたし、駅舎の説明や鉄道関係の建造物の説明にも詳しい。読み手としては、この詳しさが鉄道旅であることを思い出させ、一緒に旅をしているような心地よい気分にさせてくれているのです。

当時は、江差線の廃止が発表されてからは、毎日のように乗客の混雑が続いているのだといいます。皮肉なものです。もともとこんなに乗っていれば廃止などしなくても良かったのではないでしょうか。全国には、同じローカル線でも何とか頑張っている所がまだいくつかあるといいます。

その9年後つまり昨年、筆者は江差線跡地を訪ねたのだそうですが、その跡地からはすでに駅が消え、線路が消えて、自然に帰り、もはやそのあとを辿ることさえ難しくなってきたといいます。一度なくしたものは、もはや元には戻らないのでしょう。しかし、江差線は人々の心にいつまでも残って、走り続けていることでしょう。

詩

入選

波動と鼓動

水関　清

萌え出したばかりの緑が
柔らかく一面に光る高原では
吸い込む空気までもが　緑に香り
身体の中をすみずみまで
緑の下地で塗り上げていく

夕方の太陽の光が
山裾からの風に吹かれて
散らばり始めた雲に映え

みるみるうちに空は
錦色のパレットになる

視野を覆い尽くすようにして
広がった空の中で
雲は布巾のように　陽光で細く切り裂かれ
橙色に縁どりされた部分と
濃い影とに分かれる

もはやその名を知らない
無数の色たちによって
染め分けられた
光る雲の布巾たちは

澄み切った空気のなかで
揺れながら膨らみ　そして萎み
空の中に　細やかな起伏をつくる

天頂から少しずつ退いてゆく
空の夕焼けの色は
途切れることなく
刻々と彩合いを変えてゆく

無数の色たちは
いっときも留まることなく
分かれては周囲と混ざり合い
新たな彩合いを生み出していく

そこにはリズムがある
光が反射するところに　色が生まれる
色たちが刻むリズムは
やがて鼓動となり
自分の体内で命を刻んできた
循環や呼吸と同期し始める

ひかりは波動　いのちは鼓動

陽光の中から生まれ出て
雲と空を満たした無数の色たちは
それを見つめる身体の中へと

矛盾なく溶け込んでゆく

そのようにして加えられた
なめらかな彩合いは
少しずつ織り上げられて
自分だけの色彩となる

頭上遥かな高みにある空は
藍色に染まりはじめ
インクが零れるようにして
闇の素が滲み出てくる

闇は

その重みに耐えかねるようにして
足元に忍び寄る

華々しく光をまき散らしていた太陽の光が
雲海の奥で熾火のようになって
山の端に溶け込んでいく頃
色彩と共鳴した自分の身体は
時を刻む新たなリズムを得て
もうひとつの　いのちのかたちとなる

詩

佳作

呪詛

工藤　貴子

呪いをかけられたから
それを別な所にかけ返してしまった

かけられた事を恨んだけど
自分もかなりなかけ手だった

解こうとしては
更に別な呪いをかけてしまう（もともと照準が狂っているからね）
その繰り返し

互いにがんじがらめ

外れてしまったのではなく
変更しただけだ
ためらってグズグズしていたら
思わぬ力で弾き出された
ここはどこ？
なぜここに？
目覚める度パニックになる

呪いの地に舞い戻り
気を取り直したものの
正否がまるでわからない

どちらに行こうか、いつ行こうか
どうやって行くのか、引き返すのか

懐かしい風と
ひんやりした空気
街並み
光
癒しと呪い
空にかかった扉を開けたら
呪詛も鎖も解けるらしい
塵と風に消え去りたいと
とうの昔から思っているのだが

救いようのない話に
つい笑ってしまう
ふと開いたページから浮き上がる、
鍵の言葉たち
確たる目醒めを促している

詩

佳作

受験

根本　直樹

雨に濡れひとり登校していた時、傘を貸す女子。
夏休みの前日に、「お付き合いできませんか」との声。
「受験で付き合えない」と。
その時に気になるひとが。

そのひとに話す学校祭。
二駅の時間をともにする仲に。
図書館で待ち合わせして帰路につく。
日曜日、彼女が退席すると友がちょっかいを。

一電車遅れた時間にロビーで待つ彼女。
お互いの違った時間の不整脈。

曇ったドアに言葉にできない文字を書く癖。
「あなたはいつも何を書いているの」との質問。
文字は消えていくか、水滴となり落ちていく。
伝えられないココロのデザイン。
浮遊する不確かな言語。

数ヵ月後に「受験が近づいたのでもう会えない」と。
「受験」の二文字で二人の時間が止まった。
青春の一こまが記憶装置に封印され
数枚の白黒写真に。

後戻りできない時間のアポリア。

選評

鷲谷　みどり

今年度は、共感性や抒情性に加えて、独自の表現や世界観を持った作品が多く寄せられ、嬉しい悲鳴と共に時間をかけて選考させていただきました。詩作とは、本来言語化できない、言語化以前のふと湧き出てきた感覚や感情を、何とかして言語で表わそうとする矛盾に満ちた行為であり、そのため詩のことばは私たちが普段用いる日常的言語の機能性から常に滑り落ちていかねばならず、そこに生まれる違和・余白がもたらす非日常的世界こそが詩を詩たらしめているという、何とも歪で、繊細な生の発露です。その、ともすればすぐに指先から零れ落ちていくような自身の感覚に真摯に向き合ったことばに読み手が触れると、そこには論理を超えた共振が生まれ、さらに書き手の意図を離れた様々な化学反応が起こります。それが詩の悦びであり、見知らぬ自分自身を発見する契機ともなります。

入選　「波動と鼓動」

水関　清

刻々とかたちを変えていく夕景のダイナミズムを、視覚だけでなく聴覚や触覚とリンクさせ描き切った力作。自然の情景を緻密な観察眼で捉え、絵画のように美しい色彩で切り取った作品は珍しくないが、この詩を傑出したものにさせているのは、そこに「自分」のむき出しのいのちを動的なスクリーンとして投入しているからに他ならない。不定の自然の中で染め変えられ、その身体の在り方そのものも常に新しく変化していく「自分」は、一種危うさを感じてしまう程無垢で恐れがない。自然との一体化を望みながら、最終的には観察者としての距離を捨てきれない表現者が数多いる中、この詩人は迷うことなく「自分」を自然へと差し出していく。

初連、夕刻を迎える前から既に、語り手は植物の「柔らか」な「緑」によって「身体の中をすみずみまで／緑の下地で塗り上げ」られており、やがて訪れた夕景の「いっときも留まることなく」「新たな彩合いを生み出していく」色たちは「鼓動」となり、語り手のいのちと「同期し」、溶け込み浸潤し、「自分だけの色彩となる」。ここで気付くのは、この作品の語り手たる「自分」は、無数の色彩の中に拡散していくわけでもなく、輪郭を失い惑うこともない。与えられた色彩を「少しずつ織り上げ」、他の誰にも創り得ない自己の固有の感動として身に纏う。それは地面の上に立つ「自分」という存在への絶対的な自信であり、その語り手にとっての自明の理が、どこまでもこの作品を澄み渡った開放的なものにしており、いとも容易く読み手と語り手のいのちの「同期」を可能にし、「ひかり」の「波動」を私たちのたましいに響かせることができるのである。健康的で美しい、稀有な作品である。

佳作　「呪詛」

工藤　貴子

すべてを無に還してくれる死に強く惹かれながら、悪い夢のように続いていく泥濘の生の上を彷徨い続ける、今年度最も鋭

く光る個性を持った作品。この作品で吐き出されることばたちは、真っ白な雪を汚してしまう泥や足跡のような、「呪い」という表現に集約される、生きる上で積み重なっていく自身の生への懐疑、罪悪の意識であり、感性の強さと引き換えに表現者がしばしば受け取ってしまう在世の苦しみである。最終連では、「ふと開いたページから浮きあがる、／鍵の言葉たち」という鮮やかに目を引く描写に続き、「確たる目醒めを促している」と、暗然たる世界からの脱出の希望を感じさせるが、同じ詩人による別作品「夢とまぼろし」では、冒頭で「幻想が解けた」後も語り手は「茫漠とした風景」の中、死者と生者の領域の狭間に居続ける。それが彼女の棲まう座標であり、それこそが彼女を詩人たらしめている原点、初期衝動であるからだ。これからこの詩人の見る世界がどう動いていくのか、更なる深化を遂げるのか、興趣が尽きない。

佳作　「受験」

根本　直樹

過去の恋愛を振り返り、その内実を深い内省と共に探っていく三部作の一作品目。かつての恋の述懐はよく目にするモチーフであるが、静けさの中に余韻を残す筆致、「お互いの違った時間の不整脈。」や二作品目「手紙」の「受け止められない甘い遺伝子。／露光不足の曖昧なエスプリ。」など、単なる昔語りでは終わらせない、異化されたそれぞれの時空間に読み手を引き込んでいく詩語のセンスと巧みさが、この作品を読ませるものへと押し上げている。特に「受験」の第三連は秀逸。結露で「曇ったドア」に書いた文字は「消えていくか、水滴となり落ちていく。「伝えられ」ず、「浮遊する」感情と「不確かな言語」。その不明瞭な、言語化されない空白が、何より雄弁に読み手の想像力を刺激し、「ココロのデザイン」は生身の手触りとしてこちらに確かな感応を残していく。ただ、一つ気になったのは、「青春の一こま」という表現である。「青春」といった多義的な要素をほぼ持たず、常套句と化してしまったことばは、それ自体を転倒させる目的でない限りは、オリジナリティ喪失の危険があるため、詩作の上では避けた方が無難と考える。

短歌

嵯峨牧子選

入選

揺れ動く昆布を甥は見定めてマッカを捩ぢる気合ひと共に　竹田光彦

命あるもの這ひ出せる容（かたち）あり妻の布団の温もりたたむ　菊地利春

伝言板うすれた文字に大切なものが何だか思い出せない　水関清

佳作

疎まれて負けじと伸びるオニアザミ自分で良ければ話は聞くが　岩見義隆

老漁師後継ぎもなしこの漁期が最後と決めて電灯磨く　齊藤満

突然に言い渡された異動かな心残りのピアノレッスン　菅原節子

枯れたりと思いし薔薇の根元より伸びゆく新芽赤々と照る　中崎裕美

墓参り熊出没の立て札に故人との会話短かくし去る　大山利子

選評

嵯峨　牧子

入選

揺れ動く昆布を甥は見定めてマッカを捩ぢる気合ひと共に

昆布漁に携わる甥の動きを力強く表現している。マッカとは昆布を絡めてねじり取る道具であり、その使用の具体が「気合ひと共に」の言葉と相まって迫力を持って読者に迫り、漁師の誇りを感じさせる歌となっている。

命あるもの這ひ出せる容（かたち）あり妻の布団の温もりたたむ

「命あるもの這ひ出せる容」が先ず発見である。日常の暮しの風景をいったん俯瞰して見る目がここにある。下の句でいつもの目にもどり、妻への愛情と優しさを感じさせる心憎い一首。

伝言板うすれた文字に大切なものが何だか思い出せない

スマホ時代には使われなくなった「伝言板」という言葉で、すでに追憶の世界に引きこまれる。書かれては消される言葉、時間の経過とともに薄くなっていく文字、忘れてしまったけれど何か大切だったはずの言葉は誰の胸にも眠っている。

佳作

疎まれて負けじと伸びるオニアザミ自分で良ければ話は聞くが

オニアザミがひとつの人格として立ち上がり、それがなかなかの苦労人だというので、作者はすっかり入れ込んでいる様子。発想の愉快と、オニアザミに向き合う作者の人柄が魅力だろう。

老漁師後継ぎもなしこの漁期が最後と決めて電灯磨く

語るべきは尽くした感のある重厚の一首。生真面目な仕事ぶりを見せる老漁師の寂寥がひしひしと胸に迫る。

突然に言い渡された異動かな心残りのピアノレッスン

上の句と下の句、それぞれ他の言葉に入れ替え可能なところはあるが、この組合せは抒情を醸し出している。句切れも効いている。一連の作品からも離れがたい事情は察せられるが、ここではピアノレッスンに絞ったことが一首に透明感と明るさをもたらした。

枯れたりと思いし薔薇の根元より伸びゆく新芽赤々と照る

写生歌の典型と言える歌。「枯れたりと思いし」で一首に作者の影が差す。「照る」の語の選択も周到である。

墓参り熊出没の立て札に故人との会話短かくし去る

熊との遭遇が珍しくなくなった現代の景を捉えて、緊張感の漂う一首。結句やや忙しない印象がある。

「市民文芸」では、短歌の新人から年季の入った人まで、年齢も含めさまざまな層の応募がある。当然内容も仕事詠から時事詠、若者らしい歌もあればひ孫歌もあり、怒り、悲しみ、喜び、すべてが歌の対象になる。ルールはあって無いようなものだと思われがちだが、やはりそこには、自分の短歌の肝と言える部分を相手に正確に伝える冷静さと技術が必要になる。友情を育むように短歌と向きあっていきたい。

選者詠

嵯峨　牧子

今年また待ち望まれてギリヤーク尼ケ崎が踏む函館の土

観衆のかなたを見据ゑかれの呼ぶ「母さん！」大門の空わたる声

立てぬはずの体に九十四歳の大道芸人じょんがら踊る

駿府公園に「母さん！」と叫びしこのひとを見てより三十年の歳月

踊りつくし車椅子に乗るギリヤーク人びとの胸に炎（ほむら）を点し

俳句

熊澤 三太郎選

入選

花火音に背で驚き泣く赤子　石嵜 章枝

進水の薬玉割られ風光る　竹田 光彦

冬ぬくし空耳なれど母の声　菊地 穂草

佳作

過ぎ去りし事と諦めきれぬ秋　川村 尚子

後書を先に読むくせちちろ鳴く　住吉 紀美子

揺れやすき人の心や吾亦紅　斉藤 ふじお

爽やかな空の青さや風の唄　太田 満喜子

田草取る一歩一歩が母の道　清水 法雄

選評

熊澤　三太郎

入選

花火音に背で驚き泣く赤子

この「花火」は花火大会ですね。私達でもその音に驚くことがありますね。「花火」は秋の季題。「赤子」は「赤ん坊」よりも、やさしい云い方ですね。「赤子」がびっくりして母親の背で泣いたのでしょう。いい句になりましたね。

進水の薬玉割られ風光る

「風光る」が、春の季題ですね。新しい船が出来上って、その進水式が行われた句ですね。その新船にまつわる不浄や邪気を払うために薬玉を割る儀式が行われたのです。薬玉には、香料や造花などが入れてあり、それ等が、薬玉から飛び出たのでした。中に潜んでいた風も飛び出て廻りの空気を光らせたのでした。

冬ぬくし空耳なれど母のこゑ

雪が積って風が緩やかな日は雪に囲まれて温い街になるときがありますね。それを「冬ぬくし」と表現しました。面白い季題を取り上げましたね。そんなとき母に呼ばれたような声を聞いたのでした。音がしないのに聞いたような感じがしました。それが「空耳」であって、尚のこと、母の愛情を感じた一瞬でした。

佳作

過ぎ去りし事と諦めきれぬ秋

この句の「秋」は、季節の秋そのものでしょうね。季節の秋に起った事柄ではないのですね。しかし、月日の秋も、その時の事柄も早々と過ぎ去ってゆくものですね。「過ぎ去りし事」を「諦め」ましょうよ。と云いたいが為、この句をいただきました。「諦めきれぬ」で面白い句となりました。

後書を先に読むくせちちろ鳴く

「ちちろ」は「こおろぎ虫」の異名ですね。その鳴き声から出た語のようです。私も後書を先に読む者です。そしてどこの出身の方で何才ぐらいかなど覚えてから中味を読みます。

揺れやすき人の心や吾亦紅

「吾亦紅」を辞書で読みました。バラ科の多年草。高さ〇．六メートルから二メートル。夏から秋にかけて二～三センチの花。紅から紫に変わる。とありました。それを「揺れやすき人の心」に見合わせて、詠嘆しました。「吾亦紅」を「我も亦紅」と読んでしまったのは私の考え過ぎだったかも知れません。

爽やかな空の青さや風の唄

爽やかな青空に風が吹いてゐる。ただそれだけなのになぜか爽やかな句ですね。「風の唄」の語が効いてゐるのでしょうか。

田草取る一歩一歩は母の道

この句も「母の道」が効いてゐるのです。「田草」にゆるりと足を運びながら素手で田草を抜き取る姿を私もじっと見つめていたことがありました。もうすでに亡くな

ってしまった母の姿をこの句を読みつつ
思い出していました。

選者吟

熊澤 三太郎

足許も頼りなき老秋の風

秋惜む杖を頼りの翁(おきな)吾れ

秋雨に打たれても酒買ひに出る

田に立てば古き案山子(かかし)のごとき吾れ

入院の妻に代わりし菊手入

川柳

白井靖孝選

入選

咲いたよと貴方の植えた花飾る　本間総子

八十路坂支えて歩く老い絆　鍋倉英諒

五十路越えスイッチ入る更年期　山崎園子

佳作

物価高差し入れ愛が身に沁みる　大山徒史子

あれそれで通じるあなた心地よき　犬石恭子

夜勤終えいつもの冷菓食す帰路　大山康太

生きているもうそれだけで丸もうけ　山根裕二

介護して感謝されて生きがいに　山根敬子

選評

白井　靖孝

本年度の市民文芸川柳部門への投句は十名、五十作品でした。

例年より減少しましたが、句が粒ぞろいで嬉しく思いました。全国的に川柳の愛好者が減少傾向にありますが、伝統有る函館の川柳の再興を期待したいと思います。

今回もたくさんの佳句をありがとうございました。

入　選

咲いたよと貴方の植えた花飾る

庭いじりの好きだった貴方が、丹精を込めて育てていた花の咲くのを待たずに逝ってしまった。あとを受けて、苦労しながらやっと咲かせた花を、いの一番に見せたくて貴方の写真の隣に飾った。来年も再来年も、二人の花を咲かせ続けたい。

八十路坂支えて歩く老い絆

平均寿命が男女ともに八十歳をこえてから数年経ちますが、函館でも元気に同伴する姿を普通に見ることができますね。杖までお揃いのカップルに、日本は間違いなく長寿国だと実感しますよね。人間を詠む川柳では、積極的に老いの川柳を発表して欲しいですね。

五十路越えスイッチ入る更年期

ともすれば後ろ向きに見られてしまう更年期のようですが、新しい自分を見つけるべくスイッチオンしました、という掲句に拍手です。川柳の世界では若手に入る五十代。紙と鉛筆を携えて、好奇心と共にますます闊歩していって欲しいですね。

佳　作

物価高差し入れ愛が身に沁みる

物価の優等生と言われた鶏卵が嘗ての倍以上の価格で売られているように最近の物価高には驚かされます。特に毎日の食料品は必需品ですので、やりくりが大変です。ご近所さんから「庭で余るだけ出来たので、申し訳ないがこの胡瓜貰ってくれない？」と、差し入れが有った時には、神様仏様に見えます。

あれそれで通じるあなた心地よき

代名詞の多い会話、主語の無い会話には、そこに至るまでの熟成期間の長さを感じますね。余人の介入を許さない、二人だけの心地よい空間が広がっていますね。

夜勤終えいつもの冷菓食す帰路

【眠らない街】が増えるに伴って夜勤をする人も多くなっています。人間の身体に大きな負担のかかる夜勤を終えた朝には、緊張感から解放される喜びと共に、自分へのご褒美に帰宅する車内で大好きな曲を聴きながら大好きなアイスを食べるという大事な時間なのです！

生きているもうそれだけで丸もうけ

毎日を一所懸命に働いている時に、ふと立ち止まり周りを見渡してみたら「俺って、そこそこの望みも叶えてきて結構頑張っているじゃないか。」と気が付く。人様から褒めてもらおうとは思わないがこれって人生丸もうけのように思えてくる。この先、趣味の一つも加えて大いに楽しもう。

平易な言葉を使って綴る究極の人生訓でしょうか。

介護して感謝されて生きがいに

ご家族を毎日介護なさっている方々の御苦労には本当に頭が下がります。そこで交わされる「ありがとう。」このひと言がする側とされる側の距離を縮めますね。肩に入っていた力がすうっと抜けて生きがいに変化していくことでしょう。

選者吟

白井　靖孝

まあいいか唱えただけでウツが飛び

まだ生きて暑さ寒さに身をさらす

骨肉がもったいないで出来ている

毎日の加減乗除がおもしろい

大儀だと思う心に油差す

審査員紹介（＊本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

北海道教育大学名誉教授　杉浦清志

小説・文芸評論

文芸誌『視線』発行統括
元函館市文学館館長　和田裕

ノンフィクション

北海道史研究協議会会員
市立函館博物館友の会副会長　木村裕俊

詩

日本現代詩人会会員
詩誌（雨彦）同人　鷲谷みどり

短歌

星座α会員　嵯峨牧子

俳句

『ホトトギス』同人
『玉藻』同人　熊沢三太郎

川柳

函館川柳クラブ代表
道新文化センター川柳教室講師　白井靖孝

あとがき

『市民文芸』第六十四集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、**随筆十三編、小説六編、文芸評論一編、ノンフィクション六編、詩十二編、短歌七十七首、俳句九十六句、川柳五十句、計　二百六十一点**となり、前年度より若干応募数が減ってしまいました。今後更に市民の皆様方に広く浸透するよう係として取り組んで参ります。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響も影を潜め、インバウンドの増加で函館も再び観光客が戻って来ました。作品では最近の物価高をテーマにした作品を数多く見かけました。

今回新たに杉浦清志先生が随筆部門、和田裕先生が小説・文芸評論部門、嵯峨牧子先生が短歌部門と三名の審査員が加わってくださいました。これから、どうぞよろしくお願いいたします。

各審査員の先生方にはご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸　―第六十四集―
発行日　令和7年3月15日
編集・発行　函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・マルエイヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26―1）
TEL（〇一三八）三五―五五〇〇
題　字　木下　順一
表　紙　旧函館図書館 今・昔　スタッフ撮影とデジタル資料館より
印刷所　有限会社　日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

１．随筆	400 字詰原稿用紙	５枚以内
２．小説	同　上	４５枚以内
３．文芸評論	同　上	４５枚以内
４．ノンフィクション	同　上	３５枚以内
５．詩	同　上	５編以内
６．短歌	同　上	５首以内
７．俳句	同　上	５句以内
８．川柳	同　上	５句以内

【 応 募 規 定 】

１．応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）

２．原稿は未発表のものであること。

３．原稿には　**①応募部門**
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号　を明記してください。

４．400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（　　）をしてください。

５．応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。

６．作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。